



E-ASIA
university of oregon libraries

<http://e-asia.uoregon.edu>

足迹

徳田秋声

底本：「日本の文学 9 徳田秋声（一）」中央公論社

1967（昭和 42）年 9 月 5 日初版発行

1971（昭和 46）年 3 月 30 日第 5 刷

足迹

徳田秋声

一

しょう
お 庄 の一家が東京へ移住したとき、お庄はやつと十一か二であつた。

まさかの時の用意に、山畑は少しばかり残して、後は家屋敷も田もすつかり売り払つ

すす だんす ながひばち ぜんわん
た。煤 けた塗り 箆 筒 や 長 火 鉢 や 膳 椀 のようなものまで金に替えて、それを
そつくり父親が縫立ての胴巻きにしまい込んだ。

いなががら はや
「どうせこんな 田 舎 柄 は東京にや流行らないで、こんらも古着屋へ売つちまおう。

みんな
東京でうまく取り着きさえすれア 衆 にいいものを買つて着せるで心配はない。」

とかく愚痴つばい母親が、奥の なんと ておりじま
納 戸 でゴツゴツした 手 織 縞 の着物を引つ張つた

あとさき
り畳んだりしていると、前 後 の考えのない父親がこう言つて主張した。これまでも
もさんざん道楽をし尽して、どうかこうか五人の子供を育てあげるにさしつかえぬくら

つぶ
いの身代を飲み 潰 してしまつた父親は、妻子を引き連れてどこか面白いところを見物
に行くような心持でいた。

それまでに夫婦は長いあいだ、^{しんしょう}身 上 をしまわぬで幾度となく ^{もんちやく} 捫 着
した。母親はそのたびにいろいろの場合のことを言い出して、一つ一つなくなった物を
数えたてた。

「あんらも今あれアたとい東京へ行くにしたつてはずかしい思いはしないに」と、ろく
に手を通さない紋附や小紋のようなものを、縫い直しにやると言つて、一ト背負い町へ
持ち出して行かれたことなどを、くどくどと ^{こぼ} 零 した。自分で苦勞して、養蚕で取つた

金を夕方裏の川へ出ているちよつとの間に、ちよろりと ^{せし} 占 めて出て行つたきり、色町

へ入り ^{びた} 浸 ちて、七日も十日も帰らなかつたことなども、今さらのように言い立てられ

た。すると父親は ^{きせる} 煙 管 を筒にしまつて腰へさすと、^{ろばた} ぷいと 炉 端 を立つて向うの本家

へ ^{はず} 外 してしまふ。

お庄は母親が、売るものと持つて行くものとを、丹念に ^え 選 り分けて、しまつたり出し

たりしている ^{そば} 傍 に座り込んで、これまでに見たこともない ^{こぎれ} 小 片 や袋物、古い押し絵、

さんごじゆ ^{いじ} 珊瑚 球 のような物を、不思議そうに選り出しては 弄 ちていた。中には

がつかせんえん ^{ばあ} 顎 下 腺 炎 とかで死んだ祖母さんの手の ^{あと} 迹 だという ^{かび} 黴 くさい ^{きんちやく} 巾 着 など

もあつた。お庄は自分の産れぬ前のことや、^{ちいさ} 稚 いおりのことを考えて、暗い ^{なつ} 懐 かし

いような心持がしていた。

家がすっかり片着いて、^た 起 つ二日ばかり前に一同本家へ引き揚げた時分には、思ひ断 ^き
りのわるい母親の心もいくらか紛らされていた。明るい方へ出て行くような気もしてい
た。

父親は本家の若い^{あるじ}主と朝から晩まで酒ばかり飲んでいて、村で目ばしい家は、ど

こかで縁が^{つな}繋がっていたので、それらの人々も、^{せんべつ}饞別を持って来ては、入れ替り

立ち替り酒に浸っていた。山国の五月はやつと桜が咲く時分で裏山の松や^{からまつ}落葉松の間

に、^{ほのじろ}微白^{くろず}いその花が見え、桑畑はまだ灰色に、田は雪が消えたままに柔かく黝
んでいた。

道中はかなり手間どつた。汽車のあるところまで出るには、五日もかかった。馬車

の通っているところは馬車に乗り、^{くるま}人力車のあるところは人力車に乗ったが、子供を

^{おぶ}負つたり、手を引つ張つたりして上るような^{けわ}嶮しい峠もあつた。父親は早目にその

日の^{はたご}旅籠へつくと、^{いせ}伊勢参宮でもした時のように^{ゆうちよう}悠長に構え込んで酒や^{さかな}下物
を取つて、ほしいままに飲んだり食つたりした。

「田舎の地酒もここがおしまいだで、お前もまあ坐つて一つやれや。」と、父親はきち
んと坐つて、しゃがれたような声で言つて、妻に^つ酒を注いだ。

母親は泣き立てる^{ちの}乳呑み^ご児を抱えて、お庄の^{あした}明朝の^ゆ髪を^{いどばた}結つたり、下の井戸端で

^{むつき}襦袢を洗つたりした。雨の降る日は部屋でそれを^ほ乾さなければならなかつた。

「^{はな}鼻汁をたらしていると、東京へ行つて笑われるで、^{きれい}綺麗に行儀をよくしているだ

ぞ。」と、父親はお庄の^{はな}涕汁なぞを^か拭んでやつた。気の荒い父親も旅へ出てからの妻や
子に対する心持は優しかつた。

ある町場に近い^ゆ温泉場へつれて行つた時、父親はそこで三日も四日も^{とうりゆう}逗留して、

しま
終いに芸者をあげて騒ぎだした。

二

一行が広い上野のプラットホームを、押し流されるように出て行ったのは、ある蒸し暑い日の夕方であった。

父親は ^{かばん} 鞆 に二本からげた ^{かさ} 傘 を通して、それを ^{ぶらさ} 垂下げ、ぞろぞろ附いて来る子供を引っ張ってベンチのところへ連れて行くと、母親も泣き立てる背中の子を ^{ゆす} 揺り揺しめし ^{しめし} 襦袢 の入った包みを持って、めまぐるしい群集のなかを目の色を変えて急いで行つた。

^{ステーション} 停車場 では ^{あおじろ} 蒼白い ^{ガスとう} 瓦斯燈 の下に、夏帽やネルを着た人の姿がちらほら見受けられた。

そこで一休みしてから、「私 ^{わし} はまア後で行くで、お前たちは ^{くるま} 人力車で ^{ひとあし} 一足先へ行つとれ。」と言つて、よく東京を知つている父親は ^{ものな} 物馴れたような調子で、構外へ出て ^{くるま} 人力車を ^{あつら} 三台 誂 えた。行く先は母親の ^{かわ} 側の縁続きであった。父親は妻や子供をぞろぞろ引っ張つて、そこへ入つて行くのを好まなかつた。

「それじゃ私は先へ行つておりますで、^{あした} 明朝 はどうしても来て下さるだろうね。」母親は ^{こうり} 行李 を一つ ^{また} 股 の下へ ^{はさ} 挿 んで、車夫が ^{かじぼう} 梶 棒 を持ち上げたときに、^{のど} 咽喉 の ^{ふさ} 塞がりそうな声を出して言うと、父親は ^{うなず} 頷 いて傘に包みを一つ下げながら、帽子をか ^{かし} 傾 げて停車場前の広場へ出て行つた。

お庄は^{しり}尻から二番目の妹と、一つの車に乗せられた。汽車に乗る前に、父親に町で買ってもらった^{はなかんざし}花簪などを大事そうに^{あたま}頭髪にさしていた。

車は湯島の辺をあっちこっちまごついた。坂の上へあがると、煙突や灯の影の多い広い東京市中が、海のような^{もや}濛濛の中に果てもなく拡がって見えたり、狭いごちやごちやした街が、^{いくつ}幾個も幾個も続いたりした。そのうちに日がすっかり暮れた。

門構えや^{いたべいがこ}板塀囲いの家の多い町へ来たとき、^{くるま}がた人力車の音が耳につくくらいそこらが暗くシンとしていた。そこは^{みようじん}明神の深い森の影を受けているようなところで、地面が低く空気がしつとりしていた。^{あおぎり}碧桐の蔭に^{ほこり}埃を^{かぶ}冠った瓦斯の見えるある下宿屋の前へ来かかったとき、母親と車夫との話し声を聞きつけて、薄暗い窓^{すだれ}の簾のうちから、^{かもがわ}「鴨川の姉さまかね。」と言って、母親の^{さと}実家の古い屋号を声をかけるものがあつた。見るとそこに^{ひげぶか}髯深い丸い顔が、近眼鏡を光らしてニコニコしている。

その顔はじきに入口の^{こうしど}格子戸の方へ現われた。

「おや、みんなやって来たやって来た。」と言う、この^{おんなあるじ}女主人の声も耳に入つた。

しばらくすると帳場の次の狭苦しい部屋で物の^{ばかていねい}莫迦町寧な母親と、この人たちとの間に長い^{あいさつ}挨拶が始まった。

気象の^{はげ}烈しい女主は、くどいお辞儀を続けている母親を見下すようにして、「東京

は田舎と^{ちが}異つて、何もせずに、ぶらぶら遊んでいるような者は一人もいないで、^{ため}為

さあのような^{ずく}精のない人には、やつて行かれるかどうか^{わし}私ア知らねえけれど、ま
ず一ト通りや二タ通りのことでは駄目だぞえ。」と、ずけずけ言った。

「そうでござんすらいに……。」と、母親は^{さび}淋しい^{えがお}笑顔を作つて、ずらりと傍に並
んで坐つた子供を見やつた。

^{むすこ}子息の^{きくたろう}菊太郎は、ニコニコしながら茶をいれて^{みんな}衆に^{すす}侷めた。

「大きくなつたな。お庄さんは^{いくつ}幾歳になるえね。」と、お庄の丸い顔を^{のぞ}覗き込んだ。

部屋には薄暗いランプが^{とも}点されて、女主の後から三男の^{しげぞう}繁三が黒い顔に目ばかり
グリグリさせて、田舎から来た子供の方を^{なが}眺めていた。

やがて繁三につれられて、お庄は弟と一緒に近所の^{せんとう}洗湯へやられた。

三

その晩お庄は^{まいご}迷子になった。

「お庄ちゃんは女だから、そつちへお入り。」と、お庄はパツと明るい女湯の中へ送り
込まれて、一人できよろきよろしていた。そこには見たこともない大きい姿見がつるつ

るしていた。お庄は日焼けのした丸い顔や、田舎田舎した^{べにい}紅入り^{ゆうせん}友染の帯を

^{むなだか}胸高に締めた自分の姿を見て、ぼツとしていた。

湯から上つてみると、男湯の方にはもう繁三も弟も見えなかった。お庄は一人で暗い外へ出ると、温かい湯の匂いのおどぶぎわのする溝際について、ぐんぐん歩いて行つたが、どこへ行つても同じような家と町ばかりであつた。お庄はさつき車夫が上つたような暗い坂を上つたり下りたり、同じ下宿屋の前を二度も三度も往^{ゆき}来^きしたりした。するうちに町がだんだん更^ふけて来て、今まで明るかつた二階の板戸が、もう締まる家もあつた。

菊太郎と繁三とが捜しに来たころには、お庄はもう歩き疲れて、軒燈の薄暗い、とある店屋の縁台の蔭にしゃがんで、目に涙をにじませながらぼんやりしていた。

「お前まあ今までどこにいただえ。」女主は帳場の奥から、帰つて来たお庄に声かけた。

「東京には人^{ひと}浚^{さら}いというこわいものがおるで、気をつけないといけないぞえ。」

お庄はメソメソしながら、母親の側^{そば}へ寄つて行つた。

ごちやごちやした部屋^{すみ}の隅^{あたま}で、子供同士頭^{あたま}顛^{かぶ}を並べて寝てからも、女主と母親と菊太郎とは、長火鉢の傍でいつまでも話し込んでいた。

「^{ため}為^{ため}さあは、何をして六人の子供を育てて行くつもりだかしらねえけれど、取り着くまでには、まあよつぽど骨だぞえ。」と女主は東京へ出てからの自分の骨折りなどを語つて聞かせた。

「私らも、田舎でこそ押しも押されもしねえ家だけれど、東京へ出ちや女一人使うにも遠慮をしないじゃないで……。」

田舎では問屋本陣^{とんやほんじん}の家柄であつた女主は、良人^{おつと}が亡くなつてから、自分の経営していた製糸業に失敗して、それから東京へ出て来た。そして下宿業を営みながら、三人の男の子を医師に仕立てようとしていた。それまでに商売は幾度となく変つた。

翌日父親が来たとき、母親と子供は、狭い部屋にうようよしていた。

「とにかくどんなところでもいいで、家を一つ捜さないじゃ……話はそれからのことで

すつて。」と父親は落ち着き払つて ^{たばこ} 煙 ^{ふか} を喫していた。

午後に菊太郎と父親とは、近所へ家を見に出た。家はじきに決まった。すぐ横町の路
次のなかに、このごろ新しく建てられた、^{やすぶしん} 安普請の平屋がそれで、二人はまだ

^{どろかべ} 泥壁に ^{かんなくず} 鋸屑 [# 「鋸」はママ] の散っている狭い勝手口から上つて行くと、台
所や押入れの工合を見てあるいた。

「田舎の家から見れば手狭いもんだでね。」と菊太郎は砂でざらざらする青畳の上を、
浮き足で歩きながら笑った。

「まあ仮だでどうでもいい。新しいで結構住まえる。東京じゃ、これで坪二十円もしま
すら。」

晩方には、もうそこへ移るような手続きが出来てしまった。

下宿からは、さしあたり必要な古火鉢や ^{ちやの} 茶呑 ^{ちやわん} 茶碗、雑巾のような物が運ばれ、
父親は通りからランプや ^{あぶらつぼ} 油壺、七輪のような物を、一つ一つ買つては ^さ 提げ込んで
来た。母親は木の香の新しい台所へ出て、ゴシゴシ働いていた。

その間お庄は、乳呑み児を ^{せなか} 背に縛りつけられて、下宿と引越先との間を、幾
度となく ^{かよ} 通っていた。

四

ひともし
点燈ごろにそこらがようよう一片着き片着いた。

広い田舎家の奥に閉じ ^{こも} 籠つて、あまり外へ出たことのない母親は、近所の女房連の
集まっている井戸端へ出て行くのが、何より ^{いや} 厭であつた。子供たちも行き詰つた家の

なかを、そつちこつちうろつきながら、何にもない台所へ出て来ては水口のところにびつたりくつついて、暮れて行く路次を眺めていた。お庄は出たり入ったりして、そこらの門口にいる娘たちの^{あたま}頭髪や^{みなり}身装を遠くからじろじろ見ていた。

父親は買立てのバケツを提げて、水を汲みに行ったり、大きな^く軀^{からだ}で七輪の前にしゃがんで、煮物の加減を見たりした。

「こんな流しは^{わし}私^{うわなが}初めて見た。東京には田舎のような上流しはありましねえかね。」

「ないこともないが田舎は何でも仕掛けが^{えら}豪いで。まア東京に少し住んで見ろ。田舎へなぞ帰ってとてもいられるものではないぞ。」

「何だか知らねえが、私は家のような気がしましねえ。」母親は^{すす}滌いでいた^{とくり}徳利をそこに置いたまま、何もかも都合のよく出来ている、田舎のがつしりした古家をなつかしく思った。

父親が、明るいランプの下でちびちび酒を始めた時分に、子供たちはそこにずらりと並んで、もくもく蕎麦を喰いはじめた。母親は額に汗をにじませながら、荒い鼻息の音

をさせて、すかすかと乳を^{むさぼ}貧^{みずご}っている碧児の顔を見入っていた。

「今やつと晩御飯かえ。」と、下宿の^{あるじ}主婦は裏口から声かけて上つて来た。

「皆な今まで何してただえ。」

「お疲れなさんし。」母親は重い調子でお辞儀をして、「何だか馴れねえもんだね。」と、いいわけらしく言った。

「それでもお蔭で、どうかこうか寝るところだけは出来ましたえ。まア一つ。」と父親

は^{ちよく}猪口をあけて差した。

あるじ
主婦は落ち着いて酒も飲んでいなかった。そしてじろじろ子供たちの顔を見ながら、
「為さあはこれから何をするつもりだか知らねえが、こう大勢の口を控えていちやなかなかやりきれたものじゃない、一日でも遊んでいれアそれだけ金が減って行くで。」

ひらて な
父親は平手で額を撫であげながら、黙っていた。父親の気は、まだそこまで決まっていなかった。行つて見たいような商売を始めるには、資本が不足だし、^{もと} 軀 ^{からだ} を落して働くには年を取り過ぎていた。どうにかして取り着いて行けそうな商売を、それかこれかと考えてみたが、これならばと思うようなものもなかった。

わし
「私も考えていることもありますで、まア少しこつちの様子を見たうえで。」と、父親はあまりいい顔をしなかった。

あるじ
「相場でもやろうちゆうのかえ。」主婦はニヤニヤ笑った。

す わし
「そんなことして、摺ってしまつたらどうする気だえ。私はまア何でもいいから、
もと
資本のかからない、取着きの速いものを始めたらよかろうかと思うだがね。」

父親は聴きつけもしないような顔をしていた。

おととい
「それに一昨日神田の方で、少し頼んでおいた口もありますで。」

「そうですかえ。けど、そんな人頼みをするより、いつそ誰にでも出来る氷屋でも出せ
アいいに。氷屋で仕上げた人は随分あるぞえ。綺麗事じゃ金は ^{きれいごと} 儲 ^{もう} からない。」

「氷屋なぞは夏場だけのもんですツて。第一あんなものは ^{せわ} 忙しいばかりで一向儲け
が細い。」

母親も心細いような気がしだした。氷屋をするくらいならば……とも思つた。

「田舎ツペ、宝ツペ、明神さまの宝ツペ。」と、よく近所の子供連に 囃^{はや} されていたお

庄の田舎^{いなかなま} 訛^とりが大分除れかかるところになっても、父親の職業はまだ決まらなかった。

父親は思案にあぐねて来ると、道楽をしていた時分^{こしら} 拵^えた、印^{いん}伝^{でん}の煙草入れを角帯の腰にさして、のそのそと路次を出て行つた。行く先は大抵決まっていた。下宿

屋の主^{あるじ}婦^めにがみがみ言われるのが厭なので、このごろはその前を多くは素通りにする

ことにしていた。そして 蠣^{かき}殻^{がら}町^{ちよう}の方へ入り込んでいる。村で同姓の知合いを、

神田の鍛冶^{かじちよう}町^{たず}に訪^{たず}ねるか、石川島の会社の方へ出ている妻の弟を築地^{つきじ}の家に訪ねるかした。時とすると横浜で商館の方へ勤めている自分の弟を訪ねることもあつた。

浜からはよく強い洋酒などを 貰^{もら}つて来て、黄金色したその酒を小さい杯^{こつぷ}に注ぎな

がら、日に透^{すか}して見てはうまそうになめていた。

「浜の弟も、酒で鼻が真紅^{まつか}になつてら。こんらの酒じゃ、もう利^きかねえというこんだ。金にしてよつぽど飲むらあ。」

「あの衆らの飲むのは、器量^{はたらき}があつて飲むだでいい。身^{しん}上^{しよう}もよつぽど出来たろうに。」

「何が出来るもんだ。それでも娘は二人とも大きくなつた。男の子が一人欲しいようなことを言つてるけれど、やらずかやるまいか、まアもつと先へ寄つてからのことだ。」

そのころから、父親はよく夢中で新聞の相場付けを見たり、夜深^{よなか}に外へ飛び出して、

空と睨^{にら}めツくらをしたりしていた。朝から出て行つて、一日帰らないようなこともあ

った。するうちに金がだんだん減つて行つた。四月たらずの居喰いで、目に見えぬ

でせに
出錢も少くなかつた。

「手を汚さないで、うまいことをしようたつて駄目の皮だぞえ。為さあはまだ苦勞が足り
ない。」下宿屋の主^{あるじ}婦は留守にやつて来ると、妻に蔭口^つを吐いた。そして、「お安

さあもお安さあだ。これまで裸^はに剥がれてこの上何をぬぐ気だえ。黙つて見てばかりい
ずと、ちつと言つてやらつし。」と言つてたしなめた。母親は、切ないような気がして、
黙つていた。

母親は、押入れの葛籠^{つづら}のなかから、子供の冬物を引つ張り出して見ていた。田舎か
ら除^よけて持つて来てた、丹念に始末をしておいた手織物が、東京でまた役に立つ時節が

近づいて来た。その藍^{あい}の匂いをかぐと、母親の胸には田舎の生活がしみじみ思い出さ
れた。

父親は一日出歩いて晩方帰つて来ると、こそこそと家へ上つて、火鉢の傍に坐り込
だ。傍にお庄兄弟が、消し炭の火を吹きながら玉蜀黍^{とうもろこし}を炙^{あぶ}つていた。六つにな

る弟と四つになる妹とが、付け焼きにした玉蜀黍^{かじ}をうまそうに噛^かつている。父親はお
庄の真赤になつて炙つている玉蜀黍を一つ取り上げると、はじ切れそうな実を三粒四粒

指でつて、前歯でぼつりぼつり噛^かみ始めた。四方^{あたり}はもう暗かつた。薄寒いような風が、
障子を開けた縁から吹いて来た。母親はそこにいろいろな物を引つ散らかしていた。

「日の暮れるまで何をしてるだか……。」と、父親は舌^{したうち}鼓^きをして、煙管^{きせる}を筒から
抜いた。

「何かやり出せば、それに凝って、子供に飯食わすことも^{ひとも}点火することも忘れてしまっている。」

母親は急に出ていたものを引^{くる}つ括めるようにして、「忘れていてというでもないけれど、着せる先へ立って、揚げが短いなんて言うのと困ると思つて。」

六

うしどし
丑年の母親は、しまいそうにしていた^{つづら}葛籠の傍をまだもぞくさしていた。父親が二タ言三言^{こごと}小言を言うと、母親も口のなかでぶつくさ言い出した。きちんと坐り込んで^す蓑を喫っていた父親が、いきなり立ち上ると、子供の着物や母親の^{じゆばん}襦袢のような物を、両手で^か搔^{さら}つ^つ浚^{ほう}つて、ジメジメした庭へ^{つく}捏^{ほう}ねて^{ほう}投り出した。庭には虫の鳴くのが聞えていた。

お庄が下駄を持って来て、それを縁側へ拾い揚げるところには、父親は^{ほうき}箒を持ち出して、さつさと部屋を掃きはじめた。母親がしょうことなしに^た座を起つと、子供も火鉢の側を離れてうろうろしていた。お庄は泣き出す小さい子を^{おぶ}負い出すと、手に玉蜀黍を持って狭い庭をぶらぶらしながら家の様子を見ていた。父と母とは台所で別々のことを働きながら言い合っていた。

お庄は薄暗い縁側に腰かけて、母親のことを気の毒に思つた。^{ほうらつ}放埒な気の荒い父親が、これまでに田舎で働いて来たことや、一家のまごつき始めた^{おぼろ}径路などが、^{おぼろ}朧

^{あたま}げながら^{あたま}頭脳に考えられた。お庄が覚えてから父親が家に落ち着いているような日は

ほとんどなかった。上州から流れ込んで来た村の^{だるまや としま}達磨屋の年増のところへ入り浸つ

ている父親を、お庄はよく迎えに行つた。その女は腕に^{ほりもの}文身などしていた。^{しゆす}繻子

の^{はんえり}半衿のかかった軟かもの^{はんてん}半纏などを引^かつ^{すす}被けて、煤けた障子の外へ出て

来ると、お庄の手に小遣いを^{つか}掴ませたり、菓子^{つか}を懐ろへ入れてくれたりした。長く家

へ留めておいた^{かみがた}上方もの^{おやこ}母子の^{ぎだゆうかた}義太夫語りのために、座敷に床を^{こしら}拵え

て、人を集めて語らせなどした時の父親の^{ふるまい}挙動は、今思うとまるで^{きちがい}狂気のように

であつた。母親も着飾つて、よく女連と一緒に坐つて聴いていた。父親や村の若い人た

ちは終いに浮かれ出して、愛らしい娘を取り^ま捲いて、明るい^{しよくだい}燭台の陰で、綺麗な

その目や^{ほお}頬に吸いつくようにしてふざけていた。お庄はきまりはずかしい^{おも}念いをして

て、その義太夫語りに何やら少しずつ教わつた。

「^{あたい}妾にこのお子を四、五年預けておくれやす、きつと物にしてお目にかけます。」

と太夫は言つていたが、父親はこんな無器用なものには、芸事はとてもダメだと言つて

真面目に失望した。

秋風が吹いて、^{とりいれ}収穫が済むころには、よく夫婦の^{さいもんかた}祭文語りが入り込んで来

た。^{うすぎたな}薄汚い祭文語りは^{ろばた}炉端へ呼び入れられて、^{もんど}鈴木主水や^{かるかや}刈萱道心のよ

うなものを語つた。母親は時々こくりこくりと^{いねむ}居睡りをしながら、鼻を^{つま}塞らせて、

^{げび}下卑たその文句に^{きほ}聴き惚れていた。田のなかに村芝居の立つ時には、父親は頭取りのよ

うな役目をして、高いところへ坐り込んで威張つていた。

養蚕時の^{せわ}忙しい時期を、父親は村境の峠を越えて、四里先の町の色里へしけ込むと、きつと迎えの出るまで帰って来なかった。迎えに行った男は二階へ上ると、持って行った金を捲き揚げられて、一緒に飲み潰れた。そしてまた幾日も二人で^{いつづけ}流連していた。

夜の目も合わさず^{みんな}衆が立ち働いているところへ心も体も酒に^{ただ}爛れたような父親が、嶮しい目を赤くして夕方帰って来ると、自分で^{さかな}下物を拵えながら、炉端で二人がまた迎え酒を飲み始める。棄てくさったような^{はなうた}鼻唄や笑い声が聞えて、誰も傍へ寄りつくものがなかった。

お庄は剛情に坐り込んで、^{まきぎれ}薪片で打たれたり、^{あしげ}足蹴にされたりしている母親の様子を幾度も見せられた。火の^つ点いているランプを取って投げつけられ、頬からだらだら流れる黒血を^{おさ}抑えて、^{はだし}跣足で暗い背戸へ飛び出す母親の^{たもと}袂にくっついて^か走け出した時には、心から父親をおそろしいもののように思った。

七

そんなことを思い出している間に、父親は^{てつきゆう}鉄灸で^{しおざかな}塩肴の切身を^{あぶ}炙った^{ひた}り、^{ひた}浸しのようなものを拵えたりした。

「お庄や、お前通りまで行って酢を少し買ってきてくれ。」父親は戸棚から^{びん}瓶を出すと、明るい方へ透して見ながら言った。

「酢が切れようが砂糖がなくなろうが、一向平気なもんだ。そらお鳥目……。」と、父

親は懐の財布から小銭を一つ取り出して、そこへ^{ほう}投り出した。

「あれ、まだあると思つたに……。」と、ランプに火を^{とも}点していた母親は振り^{かえ}顧つて言おうとしたが、^{ごう}業が沸くようで口へ出なかつた。母親の胸には、これまで亭主にされたことが、一つ一つ新しく想い出された。

お庄は^{きさく}気爽に、「ハイ。」と言って、水口の^{さお}後の竿にかかっていた、^し塩気の染み込んだような小風呂敷を^{はず}外して瓶を包みかけたが、父親の用事をするのが、何だか

^{こしゃく}こしゃく小癩のようにも考えられた。^{ときわす}常磐津の師匠のところへ通っている向うの子でも、

仲よしの通りの古着屋の子でも、一度も自分のような^{しみ}吝つたれた使いに使されたこと

がなかつた。ちよつとしたことで、^な弟を啼かすと、すぐに^{つか}飛びかかつて来て引つ^{つか}挿ん

で、^{いき}呼吸のつまりそうな厚い大きな田舎の夜具にぐるぐる捲きにされて、暗い納戸の隅

にうつちやつておかれたり、^{みぞれ}霰がびしょびしょ降つて寒い^{きつね}狐の啼き声の聞える

晩に、背戸へ締出しを喰わしておいて、自分は暖かい^{こたつ}炬燵に^{たかいびき}高^{かみ}敷で寝込んでい

たような父親に、子供は子供なりの反抗心も持つて来た。

お庄はどの家でも、明るい^{ちやぶだい}餉台の上にこてこてと食べ物が並べられ、長火鉢の

側で晩飯の^{はし}箸を動かしている、^{にぎ}賑やかな夕暮の路次口を出て行くと、^{かみ}内儀さん連の

寄っているような明るい店家の前を避けるようにして、^{みぞぎわ}溝際を伝つて歩いていた。

いつも立ち停つて聞くことにしている通りの師匠の家では、このごろ聞き覚えて、口癖

のようになっているお駒才三こまさいざを誰やらがつけてもらっていた。お庄は瓶を抱えたまま、暗い片陰にしばらくたたずんでいた。

お庄は振りのような手容てつきをして、ふいとそこを飛び出すと、きまり悪そうに四下あたりを見廻して、酒屋の店へ入って行った。

急いで家へ帰って来ると、父親はランプの下で、苦い顔をして酒の爛かんをしていた。

子供たちは餉台の周まわりに居並んで、てんでんに食べ物あさを獵あさっていた。

母親は手元の薄暗い流し元にしゃがみ込んで、ゴシゴシ米を精といでいた。水をしたむ間、ぶすぶす愚痴こぼを零こぼしている声が奥の方へも聞えた。お庄はまた母親のお株が始まったのだと思った。父親はそのたんびにいらいらするような顔に青筋を立てた。

母親が禪たすきをはずして、火鉢の傍へ寄って来る時分には、父親はもうさんざん酔ってそこに横たわっていた。お庄は、気味のわるいもののように、鼻の高い、鬢びんの毛の薄い、その大きな顔や、脛毛すねげの疎まばらな、色の白い長いその脚あしなどを眺めながら、母親の方へ片寄って、飯を食いはじめた。

母親の口には、まだぶすぶす言う声が絶えなかった。臆おくびよう病びようなような白い眼が、おりおりじろりと父親の方へ注がれた。張ったその胸を突き出して、硬い首を据すえ、東

京へ来てからまだ一度も鉄漿かねをつけたことのないような、歯の汚い口に、音をさせて飯を食っている母親の様子を、よく憎さげに真似してみせた父親の顔に思い合わせて、お庄は厭だるまやなような気がした。達磨屋の年増や、義太夫語りの顔などをお庄は目に浮べて、

母親は様子が悪いとつくづくそう思った。

八

次の年の夏が来るまでには、お庄の一家にもいろいろの変遷があつた。暮には残しておいた山畑を売りに父親が田舎へ出向いて行って、その金を持って帰つて来ると、ようやく諸払いを済まして、お庄兄弟のためにも新しい春着が裁ち縫いされ、下駄や

かんざしかんざしも買えた。お庄らは田舎から持って来たほしぐり干栗や、こおりもち氷餅の類をさも珍

しいもののように思つてよろこ悦んだ。正月にはお庄も近所の子供並みに着飾つて、はね羽子など突いていたが、そのころから父親は時々家をあけた。

あるじ下宿の主婦は、「為さあは、金が少し出来たと思つて、どこを毎日そうぶらぶら歩いてばかりいるだい。」と、来ては厭味を言つていた。

父親はニヤリともしないで、わし「私もそういつまでぶらぶらしてはいられないで、今度という今度は商売をやろうと思つて、そのことでいろいろ用事もあるで……。」と言

うていたが、父親のもくろみ目論見では、田舎の町で知っている女が浅草の方で化粧品屋を出している、その女に品物の仕入れ方を教わつて、同じ店をこてい小体に出して見ようという考えであつた。

お庄は一月の末に、父親に連れられて一度その女の家へ行つた。母親も薄々この女のことを知つていた。田舎からの父親のなじ昵みで、ずっと以前に、商売をや罷めて、その抱

え主と一緒に東京へ来ていた。抱え主は十八、九になるむすこ子息と年上の醜い内儀さんと

を置去りにして、二人で相当なあきな商いに取り着けるほどの金をさら浚つて、女をつれて

逃げて来た。そのころにはその^{うち} 楼も大分左前になっていた。

その亭主は大して^{わずら} 患いもしないで、去年の秋のころに死んでから、男手の欲しい
ような時に、父親が何かの相談相手に、ちよいちよい顔を出し出ししていた。母親は、
^{けんか} 喧嘩の時は、そのことも言い出したが、^{くし} 不断は忘れたようになっていた。父親は^{くし} 櫛

など薄い紙に^{くる} 包んで来て、そつと鏡台の上に置いてくれなどした。

「こんらも高いものについているら。」と言って、母親は櫛を手にとって吐き出すよう
に言ったが、^{ひきだし} 抽斗の奥へしまい込んで、^さ ろくに挿しもしなかった。^す 棄てるのも惜し
かった。

^{てのろ} お庄は手鈍い母親に、二時間もかかって、^{えり} 顔や頸を洗ってもらったり、髪を結つ
てもらったりして、もう^{ねこ} 猫になったような^{おしろい} 白粉までつけて出て行った。お庄は母

親の髪^{いじ}の弄り方や結い方が無器用だと言って、鏡に向っていながら、^{あたま} 頭髪をわざと
振りたくつたり、手を上げたりした。父親も側で^い 苮を喫いながら口小言を言った。

「人に髪を結ってもらって、今からそんな^{うんじょう} 雲上を言うものじゃないよ。」と、母

親も^{かんしゃく} 癩癩を起して、口を^{とんが} 尖らかしてぶつぶつ言いながら、髪を引っ張ってい
た。

「庄ちゃんの髪^いの癖が悪いからだよ。」

^{おつか} 「阿母さんに似たんだわ。」お庄もべろりと舌を出した。

その女の家は、^{かみなりもん} 雷門の少し手前の横町であった。店にはお庄の見とれるよう
な物ばかり並んでいたが、そこに坐っている女の様子は、お庄の目にも、あまりいいと

は思えなかった。薄い毛を^{いちようがえ}銀杏返しに結って、^{はんえり}半衿のかかった^{ふたこ}双子の上に
軟かい羽織を引っかけて、体の骨張った、血の^け気の薄い三十七、八の大女であった。

「おや、お庄ちゃん来たの。」というような調子で、細い^{ねぼ}寝呆たような目尻に^{こじわ}小皺を
寄せた。

父親はじきに奥の方へ上って行った。奥は暗い茶の間で、畳も汚く天井も低く窮屈で
あったが、火鉢や茶箆などのはつるつるしていた。そのまた奥の方に、箆など据えた
部屋が一つ見えた。

お庄は^{ひざ}膝へ乗っかって来る猫を気味悪がって、尻をもぞもぞさせていると、女は長
火鉢の向うからじろじろ見て笑っていた。

九

父親とその女との話は、お庄には解らないようなことが多かつた。女はお庄のまだ知
らないお庄の家のことすら知っていた。田舎の縁類の人の^{うわさ}噂も出た。お庄はどこか
父親に^に肖ているとか、ここが母親に肖ているとか言つて、顔をじろじろ見られるのが、
むず^{かゆ}痒いようであつた。

「庄ちゃん^{おば}小母さんとこの子になつておくれな、小母さんが大事にしてそこら面白いと
ころを見せてあげたりなんかするからね。」と言つたが、お庄には、黙っている父親に
も、その心持があるように思えた。

女はそこらを捜して銀貨を二つばかりくれると、「お庄ちゃん、公園知つていて。観
音さまへ行つたことがあるの。^{にぎ}賑やかだよ。」と言つて^き訊いた。

「知つてるとも、すぐそこだ。」父親は長い顎^{あご}を突き出した。

ひと
「独りじゃどうだかね。」

「何、行けるとも。それは豪^{えら}いもんだ。」

お庄は銀貨を帯の間へ挟^{はさ}んで、家だけは威勢よく駈^かけ出したが、あまり気が進まなかつた。一、二度来たことのある釣堀^{つりぼり}や射的の前を通つて、それからのろのろと池の畔^{はた}の方へ出て見たが、人込みや楽隊の響きに怯^{おじ}けて、どこへ行つて何を見ようという気もしなかつた。

お庄は活人形^{いきにんぎょう}の並んだ見世物小屋の前にたたずんで、その目や眉^{まゆ}の動くさまを、不思議そうに見ていたが、うるさく客を呼んでいる木戸番の男の悪ごすいような目や、別の人間かと思われるような奇妙な声が気になって、長く見ていられなかつた。幕の外に出ている玉乗りの女の異様な扮装^{ふんそう}や、大きい女の鬢^{かつら}を冠^{かぶ}つた猿^{さる}の顔にも、釣り込まれるようなことはなかつた。

今の家と同じような小間物店や、人形屋の前へ来たとき、お庄は帯の間の銀貨を気にしながら、自分にも買えるようなものを、そつちこつち見て歩き歩きしたが、するうちに店が尽きて、寒い木立ち際の道へ出て来た。

公園を出たころには、そこらに灯の影がちらちら見えて、見せ物小屋の旗や幕のようなものが、劇^{はげ}しい風にハタハタと吹かれていた。お庄はいつごろ帰つていいか解らないような気がしていた。

帰つて行くと、父親は火鉢^{そば}の側^{てじやく}で、手酌^{そば}で酒を飲んでいて、女も時々来ては差

し向いに坐つて、海苔^{のり}をつまんだり、酌^{つま}をしたりしていたが、するうちお庄も傍^{そば}で

すし
鮓 など食べさせられた。

「お前今夜ここで泊って行くだぞ。」父親は酒がまわると言い出した。

「この小母さんが、店の方がちと忙しいで、お前がいてしばらく手伝いするだ。」

「私帰って家の阿母さんに聴いて見て……。」お庄は紅味のない丸い顔に、泣き出

しそうな笑みを浮べた。

「阿母さんも承知の上だでいい。」

お庄は黙ってうつむいた。

「お庄ちゃん厭……初めての家はやっぱり厭なような気がするんでしょうよ。」と、女

は傍の方を向きながら、ふきんで火鉢の縁を拭いていた。

「お前はもう十三にもなったもんだで、そのくらいのことは何でもない。」

「少し昵んでからの方がいいでしょうよ。」と、女も気乗りのしない顔をしていた。

お庄はその晩、かんざし 簪 など 貰って帰った。

花見ごろには、お庄も学校の隙にここの店番をしながら、袋を結える観世絢り
など絢らされた。

十

品物の出し入れや飾りつけ、値段などを少しずつ覚えることはお庄にとって、さまで
苦勞な仕事ではなかったが、この女を阿母さんと呼ぶことだけは空々しいようで、
どうしても調子が出なかった。それに女は長いあいだの商売で体を悪くしていた。時々
頭の調子の変になるようなことがあつて、どうかするとおそろしい意地悪なところを見
せられた。お庄はこの女の顔色を見ることに慣れて来たが、たまに用足しに外に出され

ると、家へ帰って行くのが厭でならなかった。

お庄は^{すきはら}空腹を抱えながら、公園裏の通りをぶらぶら歩いたり、静かな細い路次のようなところにたたずんで、にじみ出る汗を^{たもと}袂で拭きながら、いつまでもぼんやりしていることがたびたびあった。

^{だる}慵い体を木蔭のベンチに腰かけて、袂から^{あまなつとう つま}甘納豆を撮んではそつと食べていると、池の向うの柳の蔭に人影が夢のように動いて、^{けうと}気疎い楽隊や^{はやし}囃の音、

^{どら}騒々しい銅鑼のようなものの響きが、重い濁った空気を伝わって来た。するうちに、

^{よど}澱んだような^{あお}碧い水の^{まわ}周りに映る^ひ灯の影が見え出して、木立ちのなかには夕暮れの色が漂った。

女は、帰って来たお庄の顔を見ると、

「この人はどうしたって家に^{なじ}昵まないんだよ。」と言って笑った。店にはこのごろ出来た、女の新しい亭主も坐って新聞を見ていた。亭主は女よりは七、八つも年が下で、どこか薄シのろのような様子をしていた。この男は、いつどこから来たともなく、ここ

^{みせさき}の店頭^{やと}に坐って、亭主ともつかず^{やと}慵い人ともつかず、商いの手伝いなどすること

になった。お庄は長いその顔がいつも^{たる}弛んだようで、口の利き方にも締りのないこの男が傍にいと、肉がむず痒くなるほど厭であった。男はお庄ちゃんお庄ちゃんと言っ

て、なめつくような優しい声で^{な な}狎れ狎れしく呼びかけた。

男は晩方になると近所の洗湯へ入って^{はなさき}額や鼻頭を光らせて帰って来たが、夜は

^{よせ}寄席入りをしたり、公園の矢場へ入って、^{ようきゆう}楊弓を引いたりした。夜遊びに^{ふけ}耽っ

た朝はいつまでも寝ていて、内儀^{かみ}さんにぶつぶつ小言を言われたが、夫婦で寝坊をして
いることもめずらしくなかつた。

お庄は寝かされている狭い二階から起きて出て来ると、時々独りで台所の戸を開け、
水を汲^くんで来て、釜^{かま}の下に火を焚^たきつけた。親たちが横浜の叔父の方へ引き寄せられ

て、そこで襯衣^{シヤツ}や手巾^{ハンケチ}シヨールのような物を商うことになってから、東京にはお

庄の帰つて行くところもなくなつた。お庄は襦^{たすき}をかけたままその板敷きに腰かけ
て、眠いような、うつとりした目を外へ注いでいたが、胸にはいろいろのことがとりと

めもなく想い出された。水^{みず}弄^{いじ}りをしていると、もう手先の冷え冷えする秋のころで、

着物のまくれた白^{しろ}脛^{はぎ}や脇^{わき}明^あきのところから、寝^ね熱^{ぼて}りのするような肌^{はだ}に当る風
が、何となく厭なような気持がした。

お庄は雑巾を絞つてそこらを拭きはじめたが、薄暗い二人の寝間では、まだ寝息がス
ウスウ聞えていた。

お庄は裾^{すそ}を卸^{おろ}して、寝床の下の方から二階へ上つて行くと、押入れのなかから何

やら巾着^{きんちやく}のような物を取り出して、赤い帯の間へ挟んだが、また偷^{ぬす}むようにし

て下へ降りて行つたころに、亭主がようやく起き出して、袖^{そで}や裾^{しわ}の皺^{しわ}くちやになつ

ひとえ寝^ねまきの寝衣^{あくび}のまま、欠^あをしながら台所から外を見ながらしゃがんでいた。

お庄は体が縮むような気がして、そのままバケツを提げて水道口へ出て行つた。泡^{あわ}

を立てて充ち満ちて来る水を番しながら考え込んでいたお庄は、やがて的^{あて}もなしにそ

こを逃げ出した。

十一

お庄はごちやごちやした裏通りの^{こみち}小路を、そつちへゆきこつちへ脱けしているうち

に、観音堂前の広場へ出て来た。紙片^{かみきれ}、蓆の吸殻などの落ち散った汚い地面はまだ

しっとりして、木立ちや建物に淡い濛靄^{もや}がかかり、鳩^{はと}の啼き声^なが湿気のある空気にポツポツと聞えた。忙しそうに境内を突つ切つて行く人影も、大分見えていた。お庄はここまで来ると、急に心が鈍つたようになって、渋くる足をのろのろと運んでいたが、す

るうちに、堂の方を拝むようにして、やがて仁王門^{におうもん}を^{くぐ}潜つた。

^{なかみせ}仲店はまだ縁台を上げたままの家も多かつた。お庄は暗いような心持で、石畳の

うえを歩いて行つたが、通りの方へ出ると間もなく、柳の蔭^{みちわき}の路側^{くるま}で腕車を決めて乗つた。

「湯島までやつて頂戴な。」と、お庄は^{あたり}四辺を見ないようにして低い声で言うと、ぼくりと後の方へ体を落して腰かけた。

上野の広小路まで来たころに、空の雲が少しづつ^は剥がれて、秋の^{うすび}淡日^{うすび}が差して来た。

^{かす}ぼつと霞^{かす}んだようなお庄の目には、そこらのさまがなつかしく映つた。

お庄は下宿の少し手前で腕車を降りて、それから急いで勝手口の方へ寄つて行つた。

屋内^{やうち}はまだ静かであつた。お庄は^{すだれ}簾^{すだれ}のかかつた暗い水口の外にたたずんで、しばらく考えていた。

「どうしてこんなに早く来ただい。」

あるじ
主婦は上つて行くお庄の顔を見ると、言い出した。蒼白あおざめたような頬に、薄い

びん
鬢あの髪がひつついたようになって、主婦あるじは今起きたばかりのだる慵だるい体をして、莩あを
す
喫あっていた。

お庄はただ笑っていた。

「小言でも言われたただかい。」

「いいえ。」

しくじり
「何か失あ敗あるじでもしたろ。」主婦はニヤニヤした。

「いいえ。」

「それじゃあすこが厭で逃げて来ただかい。逃げて来たつて、お前の家はもう東京にや
ないぞえ。」

くく
お庄は袂で括あれたような丸あい顎あのところを拭いていた。

「それにあすこはお父さんが、ちゃんと話をつけて預けて来たもので、出るなら出る
で、またその話をせにやならん。お前は黙つて出て来ただかい。」

「……………」

「そんなことしちやよくないわの。向うも心配しているだろうに。」と、主婦あるじは

きせる
煙管あを下におくと、台所の方へ立つて行つた。そして、楊枝を使いながら、「家へ帰
つたつていいこともないに、どうして浅草で辛抱しないだえ。銀行へ預けた金もちつと
はあるというではないかい。」

お庄はしばらく見なかつたこの部屋の様子を、じろじろ見廻していた。

ただす
奥から二男のあ糺あも、繁三も起き出して来た。今あ茲あ十九になる糺あはむずかしい顔

ねまき
をして、白地の寝衣あの腕あをあ捲ありあげながら、二十二、三の青年のように大人あぶつ

た様子で、火鉢の傍に坐ると、ぼかぼか蓑を喫い出した。

「糺や、お庄が浅草の家を逃げて来たとえ。」と主^{あるじ}婦は大声で言った。

糺は目元に笑って、黙っていた。

「また詫^わびを入れて帰って行くにしろ、このまま出てしまうにしろ、断わりなしに出て来るといふのはよくないで、お前は葉書を一枚書いて出しておかつし。」

糺はうるさそうに口を歪^{ゆが}めていた。

朝飯のとき、お庄も^{みんな}衆と一緒に^{ちやぶだい}餉台の^{まわ}周りに寄って行った。

「浅草へ行ってから、お庄もすっかり様子がよくなった。」糺は飯を盛るお庄の横顔を眺めながら笑った。

十二

ここの下宿は私立学校の医学生と法学生とで持ちきっていた。長いあいだ居着いてい
るような人たちばかりで、菊太郎や糺とも親しかつた。中には免状を取りはぐして、

あたま^{すさ}も生活も荒んでしまった三十近い男などが、天井の低い狭い部屋にごろごろし
て、毎日花を引いたり、碁を打ったりして暮した。夜はぞろぞろ寄席へ押しかけたり、

近所の牛肉屋や蕎^{そば}麦屋で、火を落すまで酒を飲んだりした。北廓の事情に詳しい人や、
寄席仕込みの芸人などもあつた。

「××さんもいつ免状をお取りなさるだか。お国のお父さんも、すっかり田地を売つて
おしまいなすつたというに、そうして毎日毎日茶屋酒ばかり飲んでいちや濟まないじゃ
ないかえ。」

あるじ^{くわ}主婦は楊枝を^{だじやく}啣えて帳場の方へ上り込んで来る書生の懦弱な様子を見ると、
苦い顔をして言った。

「私らんとこの菊太郎も実地はもうたくさんだで、今茲^{ことし}は病院の方を罷^よさして、この秋から田舎に開業することになっておりますでね、私もこれで一ト安心ですよ。病院ももう建て前が出来た様子で、昔の^{おも}ことを思^もや地面も三分の一ほかないけれど、旧^{もと}の家^{しんせき}の跡へ親戚で建^{しんせき}てくれたと言うもんだでね。」

あるじ
主婦は同じようなことを、一人に幾度も言^{あるじ}つて聞かせた。

その書生は鼻^{あしら}で遇^{あしら}つて、主婦が汲^{あしら}んで出す茶を飲^{あしら}みながら、昨^{ゆうべ}夜の女の話などをしはじめた。

「あれ、厭^{のろけ}な人だよ、手放^{のろけ}して惚^{のろけ}気^{のろけ}なんぞを言^{のろけ}つて。」

と、主婦はじれじれする^{あるじ}ような顔をした。

するうちに、奥の暗い部屋^さで差^{はな}して弄^さ花^{はな}が始^さまった。主婦は小肥りに肥^さった体^{はな}に、

しゆす
縹^{あわせ}子の半衿^{あわせ}のかかった軟^{あわせ}かい^{あわせ} 袷^{あわせ}を着^{あわせ}て、年^{あわせ}にしては派^{あわせ}手^{あわせ}な風^{あわせ}通^{あわせ}の前^{あわせ}垂^{あわせ}な^{あわせ}ど^{あわせ}をかけていた。黒縹子の帯のあいだに財布^{ふうつう}を挟^{ふうつう}んで、一勝負^{まえだれ}するごとに、ちやらちやら音をさせて勘定^{まえだれ}をした。

学校^{みんな}から衆^{みんな}が帰^{みんな}つて来ると、弄^{はな}花^{はな}の仲間も殖^{はな}えて来^{はな}た。二男の糺も連中^{はな}に加^{はな}わつて、出^{はな}の勝^{はな}つ母親^{はな}のだらしのない引き方^{はな}を尻目^{はな}にかけながら、こわらしい顔^{はな}をしていた。

夕方^{あるじ}になると、主婦^{あるじ}は乗^{あるじ}りのわるい肌^{あるじ}の顔^{あるじ}に白粉^{あるじ}などを塗^{あるじ}つて、薄^{あるじ}い鬢^{あるじ}を大^{あるじ}きく取^{あるじ}り、油^{あるじ}をてらてらつて、金^{あるじ}の前^{あるじ}歯^{あるじ}を光^{あるじ}らせながら、帳場^{あるじ}に坐^{あるじ}り込^{あるじ}んでいた。

「お神^{あるじ}さんがまた白粉^{あるじ}を塗^{あるじ}っているのよ。」と、女中^{あるじ}は蔭^{あるじ}でくすくす笑^{あるじ}つた。

「××さんがこのごろほかに女^{あるじ}が出来^{あるじ}たもんだから、焼^{あるじ}けてしようがないのよ。」

女中^{あるじ}は廊下^{あるじ}の手摺^{あるじ}りに凭^{あるじ}れながらお庄^{あるじ}に言^{あるじ}つて聞^{あるじ}かせた。

この書生は、外へ出ない時はよく帳場の方へ入り込んでいた。主婦と一緒に寄席へ行くこともあった。帰りにはそこらの小料理屋で一緒に酒を飲んで、出て行った時と同じに、別々に帰って来た。その書生は二十八、九の、色の白い、目の細い、口の利き方の優しい男であった。

主婦がその部屋へ入り込んでいるのを、お庄は幾度も見た。

「ちよいとちよいと、面白いものを見せてあげよう。」^{ひょうきん} 剽 軽 な女中はバタバタと
だんばしご
段 梯子 から駈け降りて来ると、奥の明るみへ出て仕事をしているお庄を手招ぎした。

女中は二階へあがって行くと、足を浮かして^{はずれ} 尽 頭 の部屋の前まで行って、立ち停ると、袂で顔を抑えてくすくす笑っていた。

十時ごろの下宿は、どの部屋もどの部屋もシンとしていた。置時計の音などが^{うら} 裏 か
らかちかち聞えて、たまに人のいるような部屋には、書物の^{ページ} 頁 をまくる音が洩れ聞えた。

お庄は逃げるように^{した} 階下へ降りて行くと、重苦しく呼吸が^{いき つま} 塞 るようであった。

お庄は冬の淋しい障子際に坐つて、また縫物を取りあげた。冷たい^{あか} 赭 い暈に、^{はえ} 蠅
の羽が弱々しく冬の薄日に光っていた。

十三

横浜の店をしまつて、一家の人たちがまた東京へ舞い戻つて来るまでには、お庄も二、三度その家へ行ってみた。

家は山手の場末に近い方で、色の^あ 褪 せたような店には、品物がいくらかも並んでいなか

つた。低い軒に青い暖簾のれんがかかって、淋しい日影に曝さらされた硝子ガラスのなかに、

メリヤスくつたびのシャツや靴足袋、エツプルのような類が、手薄く並べられてあつた。

あめやまわの太鼓の周りに寄っている近所かじやの鍛冶屋や古着屋の子供のなかに哀れなよう

な弟たちの姿をお庄は見出した。弟たちは、もうここらの色なじに昵んで、目の色まで鈍いように思えた。

まさ「正ちゃん正ちゃん。」と、お庄が手招ぎすると、一番大きい方の正雄は、姉の顔をじつと見返つたきり、やはりそこに突つ立っていた。

上つて行くと、荒さびれたような家の空気が、お庄の胸にもしみじみ感ぜられた。母親

は、この界隈かいわいの内儀かみさんたちの着ているような袖無しなどを着込んで、裏で子供の着物を洗っていた。目の色うるが曇んで、顔も手もかさかさしているのが、目立って見えた。

母親は傍へ寄つて行くお庄の顔をしげしげと見た。頬や手足の丸々して来たのが、好ましいようであつた。

「湯島じゃ皆な変りはないかえ。」

お庄は台所の柱のところに凭もたれて、頭髪あたまを撫でたり、帯を気にしたりしながら、母親の働く手元を眺めていたが、やがて奥へ引つ込んで、店口へ出て見たり、茶の間のなかを歩いて見たりした。部屋には、東京で世帯を持った時、父親が小ママに買い集めた道具などがきちんと片着いて、父親ふとんが蒲団の端から大きい足を踏み出しながら、

あんかあんか安火に寝ていた。父親は何もすることなしに、毎日毎日こうしてだらけたような生活

に浸っていた。皮膚に^{しみ}斑点の出た大きい顔が、^{むく}脹んでいるようにも思えた。

お庄は家が淋しくなると、賑やかな大通りの方へ出て行った。^{はごろもちょう}羽衣町に薬屋を出している叔父の家へも遊びに行った。

叔母はその父親が、長いあいだある^{フランスじん}仏蘭西人のコックをして貯えた財産で有福に暮していた。その外人のことを、お庄はよく叔母から聞かされたが、屋敷へ連れられて行ったこともあった。叔母は主人のいない時に、綺麗なその部屋部屋へ入れて見せた。

食堂の棚から、銀の^{さじ}匙や、金の食塩壺、見事なコーヒ茶碗なども出して見せた。錠をおろ卸してある寝室へ入って、深々した軟かい、二人寝の寝台の上へも^ね臥かされた。よく

葉種屋の方へ遊びに来ている、お島さんという神奈川在^{うま}産れの丸い顔の女が、この外人の^{らしやめん}洋妾であった。

「ここへ、あの人たちが寝るのさ。」と、色気のない叔母は、寝台に^よ倚つかかっているから笑った。

お庄は目のさめるような色の鮮やかな蒲団や、^{あたり}四周の^{みと}装飾に見惚れながら、長くそこに横たわっていられなかった。湯島の下宿の二階で、女中に見せられた、暗い部屋のなかの赤い毛布の色が浮んだ。

^{うすあか}淡紅い顔をしたその西洋人が帰って来ると、お島さんもどこからか現われて来て、^{じだらく}自堕落な^{だる}懶い風をしながら、コーヒを運びなどしていた。

この叔母が飲んだくれの叔父に、財産を減らされて行きながら、やはり^き思い断ることの出来ない様子や、そのまた叔父に、父親が次ぎ次ぎに金を出し出ししてもらってる事

情が、お庄にも見え透いていた。

十四

父親は時々、この叔母の所有に^{かか}係る貸家の世話や家賃の取立て、叔母の代のや、父親から持越しの貸金の催促——そんなようなことに口を利いたり、相談相手になったりした。田舎にいたおり、村の出入りを扱うことの^{うま}巧かった父親は、自家の^{うち}始末より、大きな家の世話役として役に立つ方であった。

叔母は^{てだんす}手箒筥や手文庫の底から見つけた古い証文や新しい書附けのようなものを父親の前に並べて、「何だか、これもちよつと見て下さいな。」と、むつちり肉づいた手^{しわ}の皺を熨した。

「うっかりあの人に見せられないような物ばかりでね。」と、叔母は道楽ものの亭主を恐れていたが、^{あに}義兄の懐へ吸い込まれて行く高も少くなかった。

店の品物が、だんだん^{たなざら}棚曝しになったころには、父親と叔母との間も、初めのようにはなかつた。叔母が世話をしてくれたある生糸商店の方の口も、自分の職業となると、長くは続かなかつた。

「堅くさえしていってくれば、なかなか役に立つ人なんだけれど、どうもあの人堅気の商人向きでないようでね。」と、叔母は^{みせさき}しまいかけてある店頭へ来て、不幸なそ

^{あによめ}の嫂に話した。

父親は、その姿を見ると、煙草入れを腰にさして、ふいと表へ出て行つた。店には品物といつては、もう何ほどもなかつた。雑作の買い手もついでにしまつたあとで、母親は奥でいろいろのものを始末していた。横浜へ来てから、さんざん着きつてしまつた子供

の衣類や、^{ふるぎれ}古片、^{がらくた}我楽多のような物がまた一ト^ひ梱も二ト^{こおり}梱も殖えた。初めて

東京へ来るとき、東京で^{はや}流行らないような手織の着物を残らず売り払って来てから、

^{ふだん}不断着せるものに不自由したことが、^{あたま}ひどく頭脳に^ししみ込んでいた。

「東京の方が思わしくなかつたら、また出てお出でなさいよ。」

叔母は^{ぼろぎれ}襤褸片や、風呂敷包みの取り散らかった部屋のなかに坐つて、黒縹子の帯の間から、^{ありきれ}餞別に何やら紙に包んだものを取り出して、子供に渡したり、水引きをかけた有片を、火鉢の傍に置いたりした。

「さんざお世話になつて、またそんな物をお貰い申しちや済みましねえ。」

母親はそれを^{みつ}瞞めていながら、押し返すようにした。

「お庄ちゃんか正ちゃんか、どつちか一人おいて行けばいいのにね。」と、叔母は子供たちの顔を眺めた。

「田舎において来たつもりで、お庄ちゃんを私に預けておおきなさい。ろくなお世話も出来やしないけれど、どこかいいところへ異人館へ小間使いにやつておけば、運がよければ主人に気に入つて、^{むこう}西洋へでも連れて行かないものとも限らない。そして真面目に働きさえすれば、お金もうんと出来るし、見られないところを方々見てあるいて、おまけに学問まで仕込んでくれるんだからありがたいじゃないかね。」

叔母はそんな人の例を一つ二つ^あ挙げた。帰朝してから横浜で女学校の教師に出世した

女や、溜めて来た金を持って田舎へ引込んで、いい養子を貰つた女などがそれであった。母親はそういう気にもなれなかつた。叔母が亭主と一緒に洋食を食つたり、洋酒を飲んだりするのすら、見ていて不思議のようであつた。

「まア、もう少し大きくでもなりますれアまた……。」と、^き重い口を利いた。

にい
「義兄さんも思いきつて、正ちゃんをくれるといいんだがね。」叔母は色白の、体つき
のすんなりした正雄に目を注いだ。

母親はこの子は手放したくなかった。

「何なら定吉の方を貰っておもらい申したいっていうこんだで……。」と、母親は、
あか たばこ いもうと
赧らんだような顔をしながら、 蓑 を吸い着けて 義妹 に渡した。

お庄は傍に坐って、二人の はなし 談 に注意ぶかい耳を傾けていた。

十五

お庄は母親と、また湯島の下宿に かの 寄食っていた。正雄は、横浜から来るとじきに築地
の方にいる母方の叔父の家に引き取られるし、妹は田舎で開業した菊太郎の方へ連れら
れて行った。次の弟は横浜の薬種屋の方に残して来た。

「男の子一人だけは、どうにかものにしなくちゃア。」と、叔父は、姉婿が くの 壊れた家
を支えかねて、金を拵えにと言つて、田舎へ逃げ出してから、下宿の方へ来てその姉に
話した。

その叔父は はや 夙くから村を出て、田舎の町や東京で、長いあいだ書生生活を続けて来
た。勤めていた石川島の方の会社で、いくらか信用ができて株などに手を出していたが、
くび しろはぶたえ つまかわ ひよりげた
頸に白羽二重を捲きつけて、折り鞆を提げ、 爪皮 のかかった日和下駄をは
いて、たまには下宿へもやって来るのを、お庄もちよいちよい見かけた。肩つきのほつ
そりしたこの叔父と、 くび きょうだい
頸の短い母親とが、お庄には 同胞 のようにも思えなかつ
た。

「小崎の あとと 迹取りはお前だに、皆を引き取ればよい。この節は大分株で もう 儲けるとい

じゃないか。」下宿の^{あるじ}主婦は^{からか}叔父を^{からか}擲^ううように言つたが、叔父は取り澄ました風をして^{ふか}葛を^{ふか}喫しながら、ただ笑つていた。

それから二、三日^た経つてから、ある晩方母親は正雄をつれて行つたが、一人で外へ出たことのないお庄も一緒に家を出た。

そのころ引つ越した築地の家の様子は、お庄の目にも綺麗であつた。三味線や^{げつきん}月琴が茶の間の火鉢のところの壁にかかっている、そこから見える^{座敷}座敷の方には、

暮に取りかえたばかりの^暈暈が青々していた。その飾りつけも^{まちやふう}町屋風で、新しい^箆箆筒の上に、箱に入った人形や羽子板や鏡台が飾つてあり、その前に^{たちものいた}裁物板や、敷紙などが置いてあつた。

田舎の町で、叔父が教師をしていた若い時分に、そこの商家から迎えたという妻は、堅気な風をして大柄の無愛想な女であつた。

「私のところも、入る割りには交際は多いもんでね、せつかく正ちゃんをお引き受け申しても、お世話が出来ることやら出来ぬことやら、……。」と、叔母は茶^箆箆筒のなかから、皮の干からびたような^{もなか}最中に、気取つた^箸箸をつけて出してくれた。

「それに女のお^こ見だと、また始末がようござんすがね、お庄ちゃんも^{浅草}浅草の方へお出でなさるんだとかでね……。」

「どうでござんすか。あすこも出て来たきり、^{これ}庄が厭がるもんだで、一向^{おとさた}音沙汰なしで……。」と、母親は四つになつた末の弟とお庄との間に坐つて、口不調法に挨拶していた。

母親は病身な正雄の小さい時分のことや、食事の細かいこと、気の弱いことなどを、弟嫁に話しかけていたが、子供を持つたことのない叔母には、その気持の受け取れようが

なかつた。お庄は骨張つたようなその大きな顔を、時々じろじろと眺めていた。

母親は四つになる末の子を ^{おぶ}負いかけては、取りつきかかる正雄の顔を見ていた。

やがてお庄は足の遅い母親を ^せ急き立てるようにして、道を歩いていた。

母親は下宿にいても、何も手に着かないことが多かつた。父親が妻子をここへあずけて田舎へ立つてから、もう一ト月の余にもなつた。

「それでも為さあは田舎で何をしているだか、また方々酒でも飲んであるいて、こつちのことは忘れてはいるずら。書けねえ手じゃなし、お安さあもぼんやりしていないで、手紙を一本本家の方へ出して見たらどうだえ。」

^{あるじ}主婦はランプの蔭で、^{むしば}ほどきものをしながら ^{むしば}齧歯を気にしている母親を小突いた。

お庄は火鉢の傍で、^{よい}宵の口から主婦の肩をたたいていた。お庄は時々疲れた手を休め

て、台所の方で ^{わるさ}悪戯をしながら、こつちへ手招ぎしている繁三の方を見ていた。

繁三は ^{かつば}河童のような目をぎろぎろさせながら、戸棚へ ^か掻い上つて、砂糖壺のなかへ手を突っ込んでいた。

「あらア、おばさん繁ちゃんか……。」お庄は ^{はすは}蓮葉な大声を出した。

繁三はどたんとう戸棚から飛び下りると、目を ^む剥き出して ^{にら}睨めた。

十六

田舎から上つて来た身内の人の口から父親の消息がこの家へも伝わって来た。

その人は母方の身続きで、下宿の ^{あるじ}主婦とは ^{いとこ}従兄弟同志であつた。村では村長をしていて、赤十字の大会などがあると花見がてらにきつと上つて来た。田舎で春から開業し

ている菊太郎の評判などを、小父が長い胡麻塩の顎鬚を仕扱きながら従姉に話して聞かせた。

「為さあも、油屋の帳場に脂下っているそうで、まア当分東京へも出て来まい。」小父は笑いながら話した。

お庄は母親の蔭の方に坐っていて、柱も天井も黝んだ、その油屋という暗い大きな宿屋の荒れたさまを目に浮べた。そこは繭買などの来て泊るところで、養蚕期になるとその家でも蚕を飼っていた。主は寡婦で、父親は田舎にいる時分からちよいちよいそこへ入り込んでいた。お庄の家とはいくらか血も続いていた。

母親は齧歯の痛痒く腐ったような肉を吸いながら、人事のように聞いている。

「それ、そんなこんだろうと思つたい。」と、主婦は吐き出すような調子で言った。

「あすこも近年は料理屋みたいな風になってしまつて、ベンベコ三味線も鳴れア、白粉を塗つた女もあるせえ。」

「いつそもう、そこへ居坐つて出て来なけアいい。」母親も鼻で笑つた。

「出て来なけアどうするえ。稚いものがいちや働くことも出来まいが……。」

小父は主婦とお庄とをつれて、晩方から寄席へ行つて、帰りに近所の天麩羅屋で酒を飲んだ。

「小崎の姉さまも一ト晩どうだね。」と、田舎の小父は大きな帽子のついた、帯のあるとんび鳶を着ながら、書類の入つた折り鞆を箆笥の上にしまい込んで、出がけに母親に勧めた。

「私はへい。」と、母親は二十日たらずも結ばない髪を気にしながら言った。

「お安さあは寄席どころではないぞえ。」と、主婦は古い小紋の羽織などを着込んで、蓑入れを帯の間へ押し込みながら、出て行った。

母親は東京へ来てから、まだろくろく寄席一つ覗いたことがなかった。田舎にいた時の方が、まだしも面白い目を見る機会があった。大勢の出て行ったあと、火鉢の傍で、

母親は主婦が手きびしくやり込めるように言った一ト言を、いつまでも考えていた。気楽に寄席へでも行ける体にいつなれるかと思つた。

「私は東京へ来て、商業に取り着くまでには、田町で大道に立って、庖丁を売つたこともあるぞえ。」と、主婦の苦勞ばなしが、また思い出された。

自分には足手纏いの子供のあることや、長いあいだ亭主に虐げられて来たことが、つくづく考えられた。

「あの人も、えらい出ずきだね。」

やがて女中と二人で、主婦の蔭口が始まった。

皆の躑音が聞えた時、火鉢に寄りかかって、時々こくりこくりと居寝りをして

いた母親は、あわてて目を擦って仕事を取りあげた。

主婦は眠そうな母親の顔に、すぐに目をつけた。

「この油の高いに、今までかんかん火をつけて、そこに何をしていただえ。」

主婦は榎楊枝を啣えながら大声にたしなめた。

「私が石油くらいは買うで……。」と、母親は言い返した。

主婦の声はだんだん荒くなつた。母親も寢所へ入るまで理窟を言つた。

暗いところで小父の脱棄てを畳んでいながら、二人の言合いをおそろしくも浅まし

くも思つたお庄は、^{しま}終いに突つ伏して笑い出した。

十七

お庄はごちやごちやした日暮れの^{まち}巷で、末の弟を見ていた。弟はもう大分口が利けるようになっていた。うつちやらかさねつけているので、家のなかでも、朝から晩まで^{ひと}ころころ独りで遊んでいた。

「どうせもうそんなにたくさんはいらないで、この子を早く手放しておしまいやれと言
うに——。」と、^{あるじ}主婦は^{いらだ}気を苛立たせたが、^き母親は^{よそ}思い断つて余所へくれる気にも
なれなかつた。

弟は大勢の子供の群れている方へ、ちょこちょこと走つて行つた。しまつておいた
^{すだれ}簾が、また井戸端で洗われるような時節で、^{すそ}裾をまくつておいても、お尻の寒い
ようなことはなかつた。お庄は^{みぞぎわ}薄暗くなつた溝際に^{うみほおずき}しゃがんで、海酸漿を鳴
らしていた。

そこへ田舎から上野へ着いたばかりの父親が、日和下駄をはいて、^{こうもりがさ}蝙蝠傘に包
みを持ってやつて来た。

「庄そこにいたか。」

父親はしゃがれたような声をかけて行つた。お庄は猫背の大きい父親の後姿を、ぼんやり見送つていた。

お庄が弟をつれて家へ入つて行くと、父親はぼつねんと火鉢のところに坐つて、^{ふか}蓐を
喫していた。母親も傍に黙つていた。お庄は父親と顔を合わすのを避けるようにして、
台所の方へ出て行つた。

「女房子を人の家へ打^ぶつつけておいて、田舎で今まで何をしていなさつただえ。」と、

あるじ
主婦は傍へ寄^よって行くと、ニヤニヤ笑いながら言^いつた。

父親はどこかきよときよとしたような調子で、低い声でいいわけをしていた。

「それならそれで、手紙の一本もよこせアいいに……。」と、主婦は父親に厭味を言^いう

と、「ちつとあつちへ行^いつて、台所の方でも見たらどうだえ。」と母親を^お逐^おい立てた。

母親は始終不興気な顔をして、父親が台所へ出て声をかけても、ろくろく返事もしなかつた。

「酒を一本つけてくれ。私^{わし}が買^かうから。」と、しばらく東京の酒に^{かつ}渴^{かつ}えていた父親は、暗いところで財布のなかから金を出して、戸棚の端の方においた。

「そんな金があるなら、子供に^{かんざし}簪^{かんざし}の一本も買^かつてやればいい。」母親は見向きもしないで、二階から下^{くだ}つて来た膳の上のものの始末をしていた。

「それアまたそれさ。来る早々からぶすぶすいわないもんだ。」

お庄が弟を^{おぶ}負^{おぶ}つて、裏口から酒を買^かつて来たころには、二人の言合^ついも大分^つ募^つっていた。お庄は水口の^{かまち}框^{かまち}に後向きに腰かけたまま、眠りかけた弟を膝の上へ載せて、目から涙をにじませていた。

父親が自分でつけた酒をちびちびやりながら、荒い声が少し静まりかけると、^{あるじ}主婦

がまた母親を^{けしか}煽^{けしか}動^{けしか}けるようにして、傍から口を添えた。

やがて父親は酒の^{しずく}雫^{しずく}を切ると、財布のなかから金を取り出して、そこへ置いた。

「私はこれから、浜の方へ少し用事があるで……持つて来た金^{みんな}は^皆ここへ置^おきます
で……。」

主婦は鼻で笑った。

「行けアまたいつ来るか解らないで、子供を持って行ってもらったらよからずに。」

「子供をどうか連れて行っておもらい申したいもんで……。」と、母親も強^{きつ}いような調子で言った。

父親の出て行くあとから、お庄は弟を^{おぶ}負^つせられて、ひたひたと尾いて行った。

十八

父親は時々^{みち}途^{かえ}に立ち停つては後を振り顧^{かえ}った。聖堂前の古い医学校の黒門の脇にある長屋の出窓、坂の上に出張つた床屋の^{みせさき}店^{みせ}頭^{さき}、そんなところをのろのろ歩いてい^る父親の姿が、狭い通りを^{せわ}忙^{ゆきき}しく往^{すき}来^{すき}している人や車の^{すき}隙^{すき}から見られた。浜へ行くといつて^{いさぎよ}潔^{あたま}く飛び出した父親の頭^{あたま}脳^{あたま}には何の成算もなかった。

父親が立ち停ると、お庄もまた立ち停るようにしては尾いて行った。するうちに、父親の影が見えなくなつた。道の真中へ出てみても、端の方へ寄つてみても見えなかつた。「お前気が弱くて駄目だで、どうでもお父さんに押つ着けて来るだぞえ。」

お庄は、主^{あるじ}婦^{あるじ}が帽子や袖無しも持つて来て、いいつけたことを憶い出しながら、坂を降りて、暗い方へ曲つて行った。おろおろしていた母親の顔も目に浮んだ。

お庄は広々した静かな^{めがねばし}眼鏡^{めがね}橋^{ばし}の袂へ出て来た。水の黝んだ川岸や向うの広い通りには淡い^{もや}濛^{もや}靄^{もや}がかかつて、蒼白い街燈の蔭に、^{くるまや}車^{くるま}夫^{まや}の暗い看板が^{いくつ}幾^{いくつ}個^{いくつ}も並んで^{いた}いた。お庄は橋を渡つて、広場を見渡したが、父親の影はどこにも見えなかつた。お庄は柳の蔭に馬車の動いている方へ出て行くと、しばらくそこに立^{とま}つて見^{とま}ていた。駐^{とま}つた

馬車からは、のろくさしたような人が降りたり乗ったりして、幾台となく来ては大通りの方へ出て行った。

暗い明神坂を登る時分には、^{せなか}背で眠った弟の重みで、手が^{しび}痺れるようであった。

「それじゃまたどこかそこいらを^{ぶらつ}彷徨っているら。」と、主婦は独りで^{つぶや}呟いてい

たが、お庄は母親に弟を^{おろ}卸してもらおうと、帯を^{ゆわ}結え直して、顔の汗を拭き拭き、台

所の方へ行って^{ちやぶだい}餉台の前に坐った。

お庄がある朝、新しいネルの^{ひとえ}単衣に、紅入りメリンスの帯を締め、買立ての下駄に

白の木綿足袋を^{もめんたび}はいて、細く折った手拭や鼻紙などを懐に挿み、^{かぶとちよう}兜町へ出て

いる父親の友達の^{かみ}内儀さんに連れられて、日本橋の方へやられたころには、この^{ちいさ}稚

い弟も父親に連れられて、田舎へ旅立って行った。父親はそれまでに、横浜と東京の間

を幾度となく往つたり来たりした。弟の家の方を^{うかが}視つたり、浅草の女の方に引つか

かっていたりした。終いにまた子供を突き着けられた。

お庄はまた弟をつれて、上野まで送らせられた。弟は^{みんな}衆の前にお辞儀をして、

^{ひも}紐のついた^{ぞうり}草履をはきながら、ちょこちょこと下宿の石段を降りて行った。

お庄は構内の隅の方の腰掛けの上に子供をおろして、持って来たビスケットなどを出

して食べさせた。子供はそれを^{つか}攫んだまま、賑やかな^{あたり}四下をきよろきよろ眺めてい

た。

父親の顔は、長いあいだの放浪で、目も落ち^{くぼ}窪み骨も立っていた。昨日浅草の方か

ら、母親に捜し出されて来たばかりで、懐のなかも淋しかった。母親は、^{あるじ}主婦に^か噛み

つくように言われて、切なげに子供を負つて馬車から降りると、二度も三度も^{みせさき}店頭を往来して、そのあげくにやつと入つて行つた。

父親はその時二階に寝ていた。女の若い^{おとこ}情人は、そのころ勧工場のなかへ店を出していた。

父親は山の入つた^{はかた}博多の帯から、煙草入れを抜き出して、マッチを^す摺つて傍で莩を喫つた。お庄は^{ひげ}髯の生えたその顎の骨の動くさまや、^や瘦せた^{てつき}手容などを横目に眺めていた。

汽車の窓から、弟は姉の方へ手を^{べそ}拡げては泣面をかいた。

お庄は父親に、^{きんちやく}巾着のなかから、少しばかりの銀貨まで^{さら}浚われて、とぼとぼとステーションを出た。

十九

お庄は日本橋の方で、ほとんどその一ト夏を過した。

その家は奥深い^{ぬりやづく}塗屋造りで、広い座敷の方は始終薄暗いような間取りであつたが、天井に厚硝子の^{はま}嵌つた明り取りのある茶の間や、台所、湯殿の方は雨の降る日も明るかつた。お庄はその茶の間の隅に^す据わつた、^{かま}釜の傍に番している時が多かつた。

朝起きると、お庄は赤い^{たすき}襦袢をかけ、節のところの落ち窪むほどに肉づいた白い手を二の腕まで見せて塗り壁を拭いたり、床の間の見事な卓や、^{ふくろだな}袋棚の^{まきえ}蒔絵のすずりばこ^{きぬぶきん}絹拭巾をかけたしたりした。^{あるじ}主の寝る水浅黄色の^{ちりめん}縮緬の夜着

くれないじま ふとん
や、郡内縞の蒲団を畳みなどした。

主人は六十近い老人で、は 上がった あたま 頭 顱 の皮膚に汚い まだら 斑点が出来ており、裸になる

と、曲った背骨や、とが 尖った腰骨のあたりの肉も薄いようであったが、ここに寝泊りする夜はまれであった。

「ただ今お帰りですよ。」

お庄は時々、こんな電話を むこうじま 向島 の方の しょうたく 妾宅 から受け取って、それを奥へ取り次ぐことがあった。

かみ おつと たけ
内儀さんは背の低い、品のない、五十四、五の女で、良人に羽織を着せる時、丈

つまだ
一杯爪立てする様子を、お庄は後で思い出し笑いをしては、としま 年増 の仲働きに なら 睨まれた。

客の多い家で、老主人が家にいると、お庄は朝から茶を出したり、菓子を運ぶのに忙しかった。店の方を切り廻している三十前後の若主人や、そのかみ 内儀さんも、折々来ては老人の機嫌を取っていた。縁づいている娘も二人ばかりあった。

いまわ あさ
年取った内儀さんは、よく独りで、市中や東京居 周りの仏寺を 獵つてあるいた。

嫁や娘たちが、海辺や湯治場で、暑い夏を過すあいだ、内儀さんは質素な みにり 扮装をし

て、川崎の大師や、羽田の いなり 稲荷 へ出かけて行った。この春に京都から えちぜん 越前 まで廻

つて秋はまた しなの 信濃 の方へ出向くなどの計画もあった。そのたんびに寺へ寄附する金の

たか 額も少くなかった。お庄は時々、そんな内幕のことを、年増の女中から聴かされた。

こまごま
内儀さんは、家にいても夫婦一つの部屋で 細々話をするようなことは、めつたに

なかつた。^{りはつ} 惻 発 そうなその優しい目には、始終涙がにじんんでいるようで、狭い

^{ひたいぎわ} 額 際 も曇っていた。階上の物置や、暗い倉のなかに閉じ ^{こも} 籠 っ て、数ある寝道具や衣類、こまこました調度の類を、あっちへかえしこっちへ返し、整理をしたり置き場を換えて見たりしていた。着物のなかには、もう着られなくなった、色気や模様の派手なものがたくさんあった。

「私が死ねば、これをお前さんたちみんなに ^{かたみわ} 片 身 分 け に あ げ る ん で す よ 。

内儀さんはその中に坐りながら言った。

老人は、^{あたま} 頭 ^{かつ} 脳 が 赫 となって来ると、この内儀さんの顔へ、物を取って投げ着けな
どした。得がたい瀬戸物が、柱に当って砕けたり、大事な持物が、庭の隅へ ^{ほう} 投 り 出 さ
れたりした。

お庄らは、この老人の給仕をしているあいだに、袖で顔を ^{おお} 掩 う て、勝手の方へ逃げ
出して来ることがしばしばあった。内儀さんに就いていいのか、老人に就いていいの
か、解らないようなこともたびたびであった。

夜は若いものが店の方から二、三人来て泊った。酒好きな車夫も来て、台所の方によくごろ寝をしていた。若い人たちは時間が来ると入り込んで来て、湯に入ってから、茶
の間の次で雑誌を見たり、小説を読んだりした。湯に入っていると ^{ぼたんいろ} 牡 丹 色 の ^{しごき} 仕 扱
を、手の届かぬところへ隠されなどして、お庄は帯取り裸のまま電燈の下に縮まっていた。

二十

こっちの仲働きが向島のと入れ替った。そのころからお庄の心もいくらか自由になつた。向島の方のお鳥という女が、何か落ち度があつて暇を出されるところを、慈悲のあ

かみ
る内儀さんが、入れ替らせて本宅で使うことにした。

「お前がしばらく行って、あすこを取り締つておくんなさいよ。お絹には若いものはとも使いきれないから。」

こつちの仲働きは内儀さんからこう言い渡されたとき、奥から下つて来ると厭な顔をして、黙つて火鉢の傍で^{ふか}苧ばかり^{そばかす}喫していた。顔に蕎麦滓の多い女で、一度は亭主を持つたこともあるという話であつた。腹には苦勞もありそうで、絶えず奥へ気を配り、うつかりしているようなことはなかつた。

お庄は目見えの時、内儀さんからこの女の手^いに渡されて、二、三日いろいろのことを教わつた。お茶の運び工合から蒲団の直しよう、煙草盆の火の埋け方、取次ぎのしか

^{つやぶきん}た、光沢拭巾のかけ方などを、少しシヤがれたような声で^{したばや}舌速に言つて聴かせ

た。お庄が笑い出すと、女はマジマジその顔^{みつ}を瞞めて、「いやだよ、お前さんは、真

面目に聞かないから。」と、^{きせる}煙管^{たた}をポンと敲いた。お庄はこの「お前さん」などと

言われるのが初めのうち^{きつ}強^{さわ}く耳に障つて、どうしても素直に返辞をする気になれな

かつた。そんな時にお庄は、低い鼻のあたりに^{しわ}皺を寄せてとめどなく笑つた。一緒に

膳に向う時、この女の汚らしい^{くちつき}口容をみるのが厭な気持で、白い腰巻きをひらひら

させてそこらを飛び歩いたり、食べ物^{あんばい}を塩梅したりする様子も、どうかすると気にかかつてならなかつた。お庄はそういう時にも、顔に袂を当てがって笑う癖があつた。

一緒に湯に入ると、女はお庄の肉着きのいい体を眺めて、「わたしは一度もお庄ちゃんのように^{ふと}肥つたことがなくて済んだんだよ。」と、うらやましがつた。

お庄はまた、骨組みのきやしや織細なこの女の姿だけはいいと思つて眺めた。髪の癖のないのも取り柄のように思えた。

「まアこちらのお宅に辛抱してごらんなさい。こちらあまりパツパとする方じゃないけれど、おかみ内儀さんが目をかけて使つて下さるからね。どこへ行つたつて、そういい家というものはないものですよ。」と、女はお庄がややなじ昵んだ時分に、寢所でしみじみ言つて聴かせた。

お庄はそうして奉公気じみたことを考えるのが、厭なようであつた。

女が包みと行李とをけこ蹴込みに積んで、ある晩方向島の方へ送られて行くと、間もなくお鳥がやつて来た。

お鳥はからだ軀の小さい、顔の割りに年を喰つた女であつたが、一ト目見た時から、どこか気がおけなそうに思えた。

お鳥は来た晩から、洗ざらい身の上ばなしを始めた。向島の妾宅のこと、これまでわたしわたに渉りあるいた家のことなども、明けツ放しに話した。

お庄は時々この女に、用事をいいつけるようになった。女は「そう」「そう」と言つて、こばしこ小捷く働いたが、そそくさと一ト働きすると、じきにだる懈だるそうな風をしてペツたり坐つて、まる円い目をパチパチさせながら、いつまでも話し込んだ。この女が平気でしゃべ弁しまることが、終しまいにはおそろしくなるようなことがあつた。

お鳥はひや冷ひやつこい台所の板敷きに、ふく はぎ脹ふくら脛はぎのだぶだぶした脚を投げ出して、また浅草で関係していたおとこ情人おとこのことを言いだした。

「堅気の家なんか ^{ほんとう} 真 実 につまらない。奉公するならお茶屋よ。」

お鳥は溜息をついて、深い目色をした。

お庄も足にべとつく着物を ^{まく} 捲 しあげて、戸棚に ^{もた} 凭 れて、うつとりしていた。奥も台所の方も、ひっそりしていた。

二十一

水天宮の晩に、お鳥は奥の方へは ^{したや} 下 谷 の叔母の家に行くと言つて、お庄に下駄と小遣いとを借りて、裏口の方から出て行つた。この女は来た時から何も持っていなかつた。押入れのなかに ^{ころ} 転 がした風呂敷のなかに、^{ねまき} 寝 衣 と着換えが二、三枚に、白粉の ^{びん} 壺 があつたきりで、昼間外へ出る時は傘までお庄のをさして行くくらいであつたが、金が一銭もなくとも買食だけはせずにいられなかつた。お鳥と一緒にいると、お庄は自分の心までが ^{ただ} 爛 れて行くように思えた。

台所ばかりを働いている田舎丸出しの ^{えちご} 越 後 女 は、よくお鳥に拭巾と雑巾とを ^{ごつちや} 混 合 にされたり、奥からの洗濯物のなかに汚い物のついた腰巻きをつくねておかれたりするので、ぶつぶつ小言を言つた。

「お前が来てから、何だかそこいらが汚くなつたようだよ。」と、^{かみ} 内 儀 さんは時々出て来てはそこいらに目を配つた。

「私口を捜しに行くんですから、奥へは黙つていて下さいね。どこかいいところがあつたら、あなたも行かないこと。」お鳥は出て行く時お庄にも勧めた。

お庄はただ笑つていたが、この女の口を聞いていると、そうした方が、何だか安易な

ような気もしていた。貰いのたくさんあるようなところなら、自分の手一つで、母親一人くらいは養って行けそうにも思えた。

お庄は落ち着かないような心持で、勝手口の側^{わき}の鉄の棒の嵌^{はま}った出窓に凭^{もた}れて路次のうちを眺めていた。するうちに外はだんだん暗くなつて来た。一日曇っていた空もとうとう雨になりそうで、冷たい風は向うの家の埃^{ほこり}ふかい廂^{ひさしあい}間から動いて来た。

お庄はじれつたいような体を、窓から引つ込めて行くと、自分たちの荷物や、この家がらくたの我楽多^{がらくた}の物置になつている薄暗い部屋へ入つて、隅の方に出してある鏡立ての前にしゃがんだ。ふと呼^{よびりん}鈴^{しん}がけたたましく耳に響いた。茶の間へ出て行くと、今店の方から来たばかりの小僧が一人、奥へ返辞もしないで、明るい電燈の下で、寝転んで新聞を読んでいた。お爨^{さん}は台所で、夕飯の後始末をしていた。

「お前さんちよつと行つてくれたつてもいいじゃないの。」

お庄は小僧に言いかけて、手で^{しり}臀^なのあたりを撫でながら、奥の方へ行つた。奥は四、五日^{かんだか}甲高^{かみ}な老人の声も聞えなかつた。内儀^{かみ}さんは、時々二階へあがつて、そこで一人かけ離れて冬物を縫つているお針の傍へ行つたり、物置の方へ物を捜しに行つたりして、日を暮した。お鳥に聞かされるいろいろの話に引き寄せられていたお庄は、しばらくこの主人とも疎^{うと}くなつたような気がしていた。

内儀^{しょうのう}さんは樟^し脳^しの匂いの染み込んだような軟かいほどこきものを一枚出して、お庄に渡した。

「お前、旦那^{だんな}がお留守で、あんまり閑^{ひま}なようなら、ちつとこんなものでもほどいておくれ。」

お庄はそれを持って引き退^{さが}つて来たが、今急に手を着ける気もしなかった。

水天宮へ出かけて行った店の若い人たちが、雨に降られてどかどかと帰つて来た時分には、お庄もお鳥の帰りが待ち遠しいような気がして来た。そして明りの下でほどこきものをしながら、心にいろいろのことを描いていた。

お鳥の帰つたのは、その翌朝であつた。

「どうも済みません。」

お鳥は疲れたような顔をして、紅梅焼きを一ト袋、袂の中から出すと、それを棚の上において、不安らしくお庄の顔を見た。お庄はまだ目蓋^{まぶた}の脹^はればつたいような顔をして、寝道具をしまつた^{あと}迹^{あと}を掃^{たすき}いていた。お鳥は急いで襷^{たすき}をかけて、次の間へハタキをかけ始めた。

二十二

お庄は久しぶりで湯島の方へ帰つて行った。もといた近所を通つて行くのはあまりいい気持でもなかつたし、母親の顔を見るのも厭なような気がして、お庄は日蔭もののように道の片側を歩いて行った。昨夜^{ゆうべ}お鳥のところへこの間の話の人にいい口があると言つて、浅草の方から葉書で知らせて来た。先方は^{たべものや}食物屋で、家は小さいけれど、客種^{せわ}のいいということは前からもお鳥に聞かされていた。それに忙^{せわ}しいには忙しいが芸者なども上つて、^{みいり}収入も多^{みいり}いということであつた。体が大きいから、年などはどうにもごまかせると言つて、お鳥は女文字のその葉書を見せた。お庄は何だか^{かつ}担^{かつ}がれでもするようで、こわかつたが、行つて見たいような心がしきりに動いた。お庄はもう半分、ここにいる気がしなかつた。

下宿へ入って行くと、下の方には誰もいなかったが、見馴れぬ女中が、台所の方から顔を出して胡散^{うさん}そうにお庄を眺めた。そこらはもう薄暗くなっていた。

母親は二階の空間で、物干しから取り込んだ蒲団の始末をしていた。窓際に差し出ている碧桐^{あおぎり}の葉が黄色く蝕^{むしば}んで、庭続きの崖^{がけ}の方の木立ちに蝸^{かなかな}が啼いていた。そこらが古くさく汚く見えた。お庄は自分の古巣へ落ち着いたような心持で、低い窓に腰かけていた。

おつか
「阿母^{おつか}さん、私お茶屋などへ行つちやいけなくて。」お庄は訊^きいた。

母親は畳んでいた重い四布蒲団^{よの とん}をそこへ積みあげると、こつちを振り顧^{かえ}って、以前より一層肉のついたお庄の顔を眺めた。

「お茶屋ってどんなとこだか知らないが、堅気のはまアあんまり行くところじゃあるまい。」

「ちゃんとした家なら、行つたつていいじゃないの。」

「さア、どんなものだかね、私^{わし}らには一向解りもしないけれど……どこかそんなところでもあるだか。」母親は立っ^たていながら言った。

お庄はこの母親に言^つて聞^かせても解らないような気がしてもどかしかった。

「お前^{まへ}そうして、そこへ行くと言^うだかい。」母親はマジマジ娘の顔を見た。

「どうだか解りやしない。行^つて見^まないかと言^う人があるの。」お庄は外の方を見^ていながら、氣疎^{けうと}いような返辞をした。

「誰^{たれ}からそんなことを言^われたか知らないけれど、まアあんまり人の話^わにや乗^まらない方がいい。もしか間違^{まちが}いでもあつて、後^{あと}で親類^{しんるい}に話^わの出来^{でき}ないようなことでもあつちや済^すまないで。」と、母親は暗^くいような顔^{かほ}にニヤニヤ笑^わって、

「その人^{ひと}はやつぱりあすこへ出入^{でいり}りする人^{ひと}でもあるだか。」

「一緒^{いっしょ}に働^{はたら}いている人^{ひと}さ。その人^{ひと}も近^{ちか}いうちにあすこを出^でるでしようと思^{おも}うの。」

「じゃ、その人はお前より年とつた人ずら。自分が出るでお前も一緒に引つ張つて行かずかという気でもあるら。」

母親は蒲団の前に坐り込んで芥ごみを捻ひねりながら、深く思い入っているようであつた。

夕暮の色が、横向きに腰かけているお庄の顔にもかかつて来た。

「よくせき困つてくれば、時と場合で女郎さえする人もあるもんだで、身を落す日になれア、何でもできるけれど、家じゃ田舎にちゃんとした親類もあるこんだもんだで、あの人たちに東京で何していると聞かれて、返辞の出来ないようなむやみなことも出来ないといったようなもんせえ。あすこへ世話してくれた人にだつて、そんなことを言い出せた義理じゃないしするもんだで……。」

お庄は、重苦しい母親の調子が、息ぜわしいようであつた。

やがて下から声かけられて、母親が板戸を締めはじめると、お庄もむつとかびくさい部屋から脱けて、足元の暗い段梯子を降りて行つた。

二十三

「おや厭だぞえ、誰かと思つたらお庄かい。」

段梯子の下に突っ立っているながら、目の悪い主かみ婦さんは、降りて来るお庄の姿を見あげて言つた。お庄は牡丹の模様のある中ちゆう形がたを着て、紅入り友べ禅にいの帯ゆうなどを締め、香水の匂いをさせていた。揉も揚みげの延びた顔にも濃く白粉を塗つていた。

「お前今ごろ何しに来たえ。塩あん梅ばいでも悪いだか。」

主かみ婦さんは帳場のところへ来てお辞儀をするお庄のめつきり大人びたような様子を見ながら訊いた。

お庄はそこにあつた^{うちわ}団扇で、^{ほて}熱つた顔を^{あお}煽ぎながら、畳に片手を突いて膝を

^{くず}崩していた。

「これがお茶屋に行かずかと言いますがどんなもんでござんすら。」と母親が大分経つ

てから、おずおず言い出したとき、^{かみさん}主婦はお庄の顔を見てニヤリと笑った。

「そろそろいい着物でも着たくなつて来たら、そして先アどこだえ。」

「何だか浅草に口があるそうで……。」

主婦は詳しくも聞かなかつた。そこへ客が入り込んで来たりなどして、話がそれぎりになつた。

お庄は台所の隅の方で、また母親とこそこそ立ち話をしていた。

九時ごろにお庄は、通りの角まで母親に送られて帰つて行つた。

「それじゃ世話する人にも済まないようだつたら、今いる家へ知れないように目見えだけでもして見るだか。」

母親は別れる時こうも言つた。お庄は断わるのに造作はなかつたが、それぎりにするのも飽き足らなかつた。

帰つて行くと、奥はもうひっそりしていた。茶の間と若い人たちの寝る次の部屋との間の重い戸も締められて、心張り棒がさされてあつた。お鳥は^{ねまき}寝衣のまま起きて出て、そつと戸を開けてくれた。

「私あのことどうしようかしら。」

お庄はお鳥の^{ねどこ}寝所の傍にべつたり坐つて、額を抑えながら深い溜息を吐いた。

お鳥はだらしのない風をして、^{きせる}細い煙管に煙草を詰めると、^すマッチの火を摺りつけて、^のすばすば喫みはじめた。

「どうでもあんたの好きなようにすればいいじゃありませんか。あんまりお勧めしても悪いわ。」お鳥はお庄の顔をマジマジ見ていた。

「そこは ^{ほんとう} 真 実 に堅い家なの。」

「それア堅い家でさね。だけど、どうせ客商売をしてるんですから、堅いと言ったって、ここいらの堅いとはまた違ってますのさ。」お鳥は鼻にかかった声で言つて澄ましていた。

お鳥は ^{ねどこ} 寢 所 へ入つてからも、自分の知っているそういう家の風をいろいろ話して聞かした。

二、三日経つてから、お鳥が浅草の叔母の方へ帰つて行つたころには、店の方からよく働く女が一人ここへ廻されていた。方々ですれて来たお鳥の使いにくいことが、その前から奥へもよく解つていた。店の荷造りをする男と、一緒に仕舞湯へ入つてべちやくちやししながら、肌の綺麗な男の背を流しなどしているところを、台所働きに見られて、

言いつけられた。 ^{かみ} 内儀さんはお鳥を呼びつけて、 ^{こごと} しねしね 叱 言 を言つた。

「もう厭になつちやつた。どうせこんなところは腰かけなんだから、どうだつてかまやしな。」

お鳥は奥から出て来ると、 ^{ふて} 太 くさつたような口を利いて、茶の間にごろごろしていた。

お鳥は出て行くとき、荷部屋へ入つて、お庄としばらく話し込んでいた。それから借りた金なども綺麗に返して、包みを一つ抱えて裏から脱けて行つた。

後で多勢でこの女の噂が始まつた。若い男たちは、お庄らの気着かぬことまで見ていた。お庄も一緒になつて、時々切なげな笑い方をした。

二十四

お庄の行つた家は、お鳥の言うほど ^{しやれ} 洒 落 てもいながつた。

お庄は家からかかつた体裁に、お鳥から電話をかけてもらつて、ある晩方日本橋の家

を脱けて出た。その日は一日 ^{きしよく} 気色 の悪い日で、店から来た束髪の女ともあまり口を利かなかつた。お庄には若い夫婦の傍にいつけて、理窟つぼくなっているこの女の幅を利かすほど、煮物や汁 ^{つゆ} ^{かげん} 加減 が巧いとは思えなかつた。学校出の御新造を笠に被て、お上品ぶるのも厭であつた。

その晩は、白地が目に立つほど涼しかつた。お庄は母親に頼んであるネルの縫直しがまだ出来ていなかつたし、^{あわせばおり} 袷羽織 の用意もなかつたので、洗濯してあつた、
^{ゆき} ^{たけ} 袴丈 の短い ^{かすり} 紺の方を着て出かけて行つた。

馬車の中は、水のような風がすいすい吹き通つた。お庄は軽く胸をそそられるようであつた。

お庄は賑やかな ^{いけ} ^{はた} 池の畔 から公園の ^{すそ} 裾の方へ出ると、やがて家並みのごちやごちやした狭い通りへ入つた。氷屋の ^{すだれ} 簾、床屋の姿見、^{たべものや} 食物屋の窓の色硝子、

いくつ ^{なまめ} 幾個となく並んだ神燈の蔭からは、媚かしい女の姿などが見えて、湿つた暗い砂利の道を、人や ^{くるま} 俥が忙しく往来した。ここはお庄の目にも ^{なじ} 睨みのないところでもなかつた。

お鳥のいる家はじきに知れた。大きい木戸から作り庭の ^{とうろう} 燈籠の灯影や、橋がかりになつた ^{はなれ} ^{みすか} 離室の見透されるような家は二軒とはなかつた。お庄は ^{みせ} ^{さき} 店頭の軒下に据えつけられた高い ^{ようすい} ^{おけ} 用水桶の片蔭から中を ^{のぞ} 覗いて、その前を往つたり来つたりしていたが、するうち下足番の若い衆に頼んで、お鳥に外まで出てもらつた。やがてお鳥は下駄を突っかけて料理場の ^{わき} 脇の方から出て来た。

その家は^{なかみせ}仲見世寄りの静かな町にあつた。お鳥は花屋敷前の暗い木立ちのなかを脱

けて、^{ほしみせ}露店の出ている通りを突つ切ると、やがて浅黄色の旗の出ている、板塀囲い

の^{こてい}小体な家の前まで来てお庄を^{かえ}振り顧つた。お庄は片側の方へ寄つて、遠くから入

口の方を^{すかみ}透し視していた。

裏から入つて行くと、勝手口は電気が薄暗かつた。内もひっそりしていて、^{こもかぶ}菰被

りの据わつた帳場の方の次の狭い部屋には、^{だる}懈そうに坐っている瘦せた女の^{くしま}櫛巻き

姿が見えた。上に^{くまで}熊手のかかつた帳場に、でッぷりした肌脱ぎの^{おやじ}老翁が、立てた膝

を両手で抱えて、眠^よそうに倚りかかつていた。

お鳥は女中を一人片蔭へ呼び出すと、暗いところで立ち話をしはじめた。そうしてから外に立っているお庄を呼び込んだ。

「じゃこの人よ。どうぞよろしくお願い申します。」お鳥は口軽にお鳥を^{ひきあわ}紹介すと、やがて帰つて行つた。

女中はお庄を櫛巻きの女の方へつれて行つた。女は落ち窪んだヒステレー性の力のない目でお庄をじろじろ眺めたが、言うことはお庄はよく聴き取れなかつた。

帳場前の廊下へ出ると、そこから薄暗い硝子燈籠の^{とも}点れた、だだッ広い庭が、お庄

の目にも安ッぼく見られた。ちぐはぐのような^{こま}小間のたくさんある^{やだ}家建ちも、普請が

^{がさつ}粗雑であつた。お庄はビールやサイダーの広告のかかつた、取つ着きの広い座敷へ連

れられて行くと、そこに商人風の客が一ト組、じわじわ煮立つ^{とりなべ}鶏鍋を真中に置い

て、酒を飲んでいるのが目についた。お庄は入口の方に坐つて、しばらくぼんやりしていた。

「あんたも来て手伝つて頂戴。」

女は骨盤の押し開いたような腰つきをして、片隅に散らかつたものを忙しそうに取りまと纏めていた。

お庄はきさく気爽に返事をして、急いで傍へ寄つて行つた。

その晩から、お庄はみんな なじ衆に昵んだ。

二十五

正雄がある朝十時ごろに、いち や一の家を訪ねて行くと、お庄ははん えり半襟のかかつた

ふたこ双子の薄綿入れなどを着込んで、縁側へいくつ しんちゆう幾個も真鍮の火鉢を持ち出して灰を

ふる振つていた。お庄が身元引受人に湯島のあるじ主婦を頼みに行つたとき、主婦はニヤニヤ笑つて、

「お前そんなことをしてもいいだかい。自分の娘のことじゃないから、私はまア何とも言わないが、長くいるようじゃダメだぞえ。」と、念を押しながら判をお捺してくれた。

お庄は二日ばかりの目見えで、毎日の仕事もあらまし解つて来た。家の様子や客の風のも大抵呑み込めた。どこのどんな家のものだか知れないような女連の中に交じつて立ち働くのも厭なようで、自分にもそれほど気が進んでもいながつたが、日本橋の方へ帰つて、気むずかしい老人夫婦ばかりの、陰気な奥の方を勤めるのも張合いがなかつた。

「今いる家は、体が楽でも気がつま塞つていけないそうで……。」と、母親も傍から口を

添えた。

お庄はここへ書附けを入れてから、もう二ヶ月にもなった。

お庄は裏口の戸の外に待っている正雄の姿を見ると、顔を^{あか}赧くして傍へ寄って行ったが、目に涙がにじんだ。明けると十四になる正雄の様子は、しばらくのまにめつきり下町風になっていた。頭髪を短く刈り込んだ顔も明るく、^{しま}縞の綿入れに角帯をしめた体つきものんびりしていた。

「何か用があつたの。」とお庄は何か語りそうな弟の顔を見た。

「いいえ。」正雄は^{かぶり}頭^ふを掉つた。

「どうしてここにいることが解つたの。^{おつか}阿母さんに聞いて来たの。」

それぎり、二人は話すことも、思い出せないような風で立っていた。

しばらくたつと、お庄は顔や髪などを直して、出直して来た。大きい素足に^{あとば}後齒の下駄をはいて、意気がつたような長い縞の前垂を蹴るようにして蓮葉に歩き出すと、やがて芝居や見世物のある通りへ弟を連れ出して来た。

見世物場はまだそれほど雑踏していなかった。帽子も^{かぶ}冠らないで、ピンヘットを耳

のところに挟んだような、^{めつき}目容のこわらしい男や、黒足袋をはいて襷がけしたような

女の^{ゆきき}往来している中に、子供の手を引いた夫婦連れや、^{きれ}白い^{くび}巾を頸に巻いた女と

一緒に歩いている、^{きんぶちめがね}金縁眼鏡の男の姿などが、ちらほら目についた。二人はその間をぶらぶらと歩いていたが、弟はどこを見せても厭なような顔ばかりしていて、張合

いがなかった。お庄は見世物小屋の木戸口へ行って、帯のなかから^{きんちやく}巾着を取り出しながら、弟を呼び込もうとしたが、弟はやはり寄って来なかった。

「何か食べる方がいいの。」お庄は橋の手摺りに^よ寄りかかって、あつちを向いている弟の傍へ寄り添いながら訊いたが、弟はやはり厭がった。

「じゃ、何か欲しいものがあるならそうお言いなさい。姉さんお^{あし}鳥目があるのよ。」

「ううん、お^{あし}鳥目なんか使つちやいけない。」弟はニヤニヤ笑った。

二人は橋を渡つて木立ちの見える方へ入つて行つた。弟は姉と一緒に歩くのが厭なような風をして、先へずんずん歩いた。

別れる時、お庄は片蔭へ寄つて、巾着から銀貨をあらまし取り出して渡した。「姉さんも早くあの家を出るようにしておくれ。」と、弟の言つたのを時々思い出しながら、お庄は裏通りをすごすごと帰つて行つた。

二十六

帰つて行くと、内儀さんが帳場の方に^{かみ}頑張^{がんば}っていた。

内儀さんは上州辺の女で、田舎で^{げいしや}芸妓をしていた折に、東京から出張つていた土木の請負師に連れ出されて、こつちへ来てから深川の方に囲われていた。ここの^{おやじ}老爺と一緒にしたのは、その男にうつちやられてから、浅草辺をまごついていた折であつた。前の内儀さんを^お逐い出すまでには、この女もいくらかの金をかけて引つ張つて来た

老爺の手から、幾度となく逃げて行つた。^{ことし}今茲十三になる前妻の女の子は、お庄がこ

こに来ることになつてから、間もなく^{とりごえ}鳥越にいる叔母の方へ預けられた。この

^{ままこ}継子を、内儀さんがその父親の前で^ぶ打つたり毒突いたりしても、爺さんは見て見ない振りをしていた。

「それアひどいことをするのよ。」と、女中たちは蔭で顔を^{しか}顰め合った。

「あんなにいびるくらいなら、^{よそ}余所へくれた方がいいわ。」

「あの年をしていて、わが子よりは^{かみ}内儀さんの方が可愛いなんて、お^{じい}爺さんも随分だわね。」

^{あお}蒼い顔をして、女中と一緒に、隅の方で飯を食っている、その女の子の様子を見ると、お庄も厭な気がした。「それでもお前たち子供が可愛そうだったもんで……。」と、いつか母親の言った^{ことば}語を思い出された。

「外聞が悪いから、いい加減にしときなよ。」と、爺さんは^{かみ}内儀さんのいびり方が^{はげ}劇しくなると、眠いような細い^{めつき}目容をして、重い体をのそのそと表へ出て行った。そうでもしなければ、彼女の病気がどこまで募るか解らなかつた。内儀さんは、請負師の^{めかけ}妾をしているところから、劇しいヒステレーに陥っていたらしく思われた。

「おいおい、家は^{せわ}忙しいんだよ、朝ツぱらからどこを遊んであるくんだ。」

^{すき}隙のない目で、上つて来るお庄の顔を見て、内儀さんは怒鳴った。その顔にはいつものように酒の^け気もするようであつた。どこかやんばらなようなところのある内儀さん

は、^{ままこ}継子がいなくなつてからは、時々劇しくお爺さんに喰つてかかつた。^{けんか}喧嘩をす

ると、じきに^{こもかぶ}菰冠りの呑み口を抜いて、^{ひやざけ}コップで冷酒をも^{あお}呷った。

「どうも濟みません。」

お庄は笑いながら言つて、奥の方へ入つて行った。

座敷の方では、赤いメリンスの腰捲きを出して、まだ雑巾がけをしている女もあつた。並べた火鉢の側に寄つて、昨夜^{ゆうべ}仲店で買つて来た^{くし}櫛^{かんざし}や^{かんざし}簪の値の当てツこをしている連中もあつた。

「あれお前さんの弟……。」一人はお庄にこう言つて訊きかけた。

「え、そう」お庄は^{うなず}頷いた。

「道理で似ていると思つた。」

^{きょうだい}「同胞だつて似るものと決まつてやしないわ。」

^{あたりまえ}「当然さ。親子だつて似ないものもあるじゃないか。」

てんでんに下らなく笑つて、顔の話などをしはじめた。お庄は形の悪い鼻を気にしな^{ゆびさき}がら、指頭^{こま}が時々その方へ行つた。奥の小間では、お庄が出る前から飲みはじめて、後を引いている組もあつた。^{どどいつ}都々逸^{はなうた}の声などがそつちから聞えて、うるさく手が鳴つた。誰かが、「ちょツ」と舌うちして、^{うた}鼻唄^{うた}を謳いながら起つて行つた。お庄も寒い外の風に吹かれながら^{はながしら}鼻頭^{あかじ}を赤くして上つて来た客に声かけて、垢染みた蒲団などを持ち出して行つた。

夜お庄は、弟から^{はがき}端書^{はがき}を受け取つた。端書には、読めないような生意気なことが、^{まず}拙い筆で書いてあつたが、茶屋奉公などしている姉を怒っている弟の心持は、お庄の胸に深く感ぜられた。

正月の十五日過ぎに、お庄は肩にシヨールをかけ、^{いちようがえ}銀杏返しに^{びんか}白い鬢搔きな

どをさして奥山で^と撮った手札形の自分の写真と、^{あるじ}主婦や母親、女中に半襟や櫛のよう

なものを買って、湯島の方へ訪ねて来た。そのころ湯島ではもう^{だいこんばたけ}大根畠の方の

下宿屋を引き払っていた。田舎で^{つぶ}潰れた家を興して、医師の玄関を張っている菊太郎
から、儉約すれば第二人を学校へ出して行けるだけの金が、月々送られることになって

から、^{あるじ}主婦は下宿を売り払って、その金の幾分で路次裏にちょっとした二階屋を買っ
て、そこへ引っ越していた。二階にはごく気のおけない人を一人二人置いてあった。

主婦のお元は、お庄の風を見てあまり^{よろこ}悦ばなかった。

お庄が半襟などを取り出して、「^{おつか}阿母さんがいろいろお世話になりまして……。」

と、ひねた^{あいさつ}挨拶ぶりをすると、婆さんは紙に包んだその品を見もしないで、苦い顔
をしていた。

「お前は、そしてその家で何をしているだい。やっぱり出てお客のお^{しゃく}酌でもするだ
かえ。」

「え、時々……。」お庄はニヤニヤしながら、「やっぱりね、それをしないと怒る人が
あるものですから。」

「そんなことをしてはいけないぞえ。ろくなお客も上るまいに。金でもちつと溜つたと
言うだか。」お庄は笑っていた。

「お安さあのところへ時々送るといふ話だつたじゃないかえ。」

「それはそうなんですけれど、ああしておれば何だ彼だと言つてお小遣いもいりますか
ら……。」

「それじゃお前、初めの話と違うぞえ、そのくらいなら日本橋にいた方がまだしも^{まし}優

だ。続いて今までおればよかつたに。」

お庄もそんなような気がしていないこともなかつた。お酉^{とり}さま前後から春へかけて、お庄は随分働かされた。一日立詰め、夜も一時二時を過ぎなければ、火を落さないようなこともあつた。脚も手も^{くたび}憊れきつた体を、硬い蒲団に横たえると、すぐにくツすり寝込んだ。朝起きるとまた同じように、重い体を動かさなければならなかつた。お庄は婆さんの前に坐っていると、膝やお尻の^{ちにく}血肉が醜く肥つたことが情ないようであつた。

「それにあすこいらはおそろしい風儀がよくないと言うじゃないかい。お前もそんなことをしていれば、一生頭があがらないぞえ。」

お庄の耳には、根強いような婆さんの声が、びしびし響いた。お庄は聞いて聞かないような振りをして、やっぱり笑つていた。そして時々涙のにじみ出る^{めかど}目角を、

ゆびさき^{ぬぐ}指頭で拭つていたが、^{しま}終いにそこを立つて暗い段梯子の方へ行つた。お庄は婆さんに何か言われるたんびに、下宿の二階で見たことなどがじきに頭に浮んだ。鬢の薄^{くろあか}い、唇の黒^{あか}赭いようなその顔が、見ていられなくなつた。

「兄さんはお二階……。」お庄は落ち着かないような調子で訊いた。

二階では、取つ着きの明るい部屋で、^{ただす}糺^{どてら}が襦^{どてら}袍を着込んで、机に向つて本を見ていた。

「御免なさい。」と言つて、お庄はそこへ上り込んで行つた。

「誰か来ているのかと思つたらお庄か。」^{いとこ}従兄はこつちを向いて、長い^{きせる}煙管を取り上げた。

お庄は挨拶をすますと、窓のところへ寄つて来て、障子を開けて外を^{のぞ}覗いた。そこ

はすぐ女学校の教室になっていた。曇ったガラス窓からは、でこでこした束髪頭がいくつ
幾個も見えた。お庄は珍しそうに覗き込んでいた。

「どうしたい。」従兄はお庄の風に目をつけている。

「今下で、お婆さんにさんざん油を絞られましたよ。」

「お前のいるところはどこだえ。」

お庄はそこへ坐って、煙管を取りあげた。

「何だ、お庄ちゃんか。」と言って、繁三も次の室^まから顔を出した。

二十八

日の暮れ方まで、お庄はここに遊んでいた。二階の連中と出しっこをして、菓子も水
ものを買って、それを食べながら、花を引いたり、^{はしや} 燥^は いた調子で話をしたりするう
ちに、^{よせ} 夜寄席へ行く約束などが出来た。

「そんなことをしていてもいいかえ。築地の小崎もお前のことを心配していたで、今夜
にも行って見た方がよくはないかえ。お前の風を見て、小崎が何と云うだか。」

婆さんは、飯も食わずにそわそわしているお庄に小言を言った。もうランプが^{とも}点
れていた。お庄は隅の方へ鏡を取り出して大人ぶった様子をして髪^{かみ}の形などを直してい
た。

「今日でなくとも、明日という日もありますから……。」と、お庄は^{あんか}安火^{あんか}に入つて、
こつちを見ている糺の苦い顔を見ながら言った。

^{よそ} 余所へ出て働くというのは辛いものだろう。」と、糺は傍から口を利いた。

「どうせそれは楽じゃないわ。」と、お庄も鏡に映る自分の髪^{かみ}の形に見入りながら、気
なしに言った。

「今初めてそんなことが解つただか。お前が独りで口を拵えて行つたじゃないかえ。」
お庄も糺も黙っていた。

「さあ、若いものは遅くなると危いで、化粧^{つくり}などはいい加減にして、早くおいでと言
うに。」と、婆さんはやるせなく急^せき立てた。

築地の方へは、この家が下宿を引き払つた時分から、母親が引き取られていた。弟も
相変らずいた。そこへ行くには、叔母にもちゃんとした挨拶をしなければならず、自分
の身の上の相談を持ち込むのも厭であつた。

「それじゃ行つたらいいだろう。そして小崎の叔父に話をして、浅草なぞは早く足を洗
つた方がよさそうだぜ。」糺も興のない顔をして言つた。

「え、それじゃ行きます。」お庄は急に髪^せの道具をしまいかけた。

「どうせお前たちを見るのは、一番縁の近い小崎のほかにはアないもんだで、行つたらよ
く話して見るがいい。あすこには子供^{あたりまえ}がないで、そのくらいのことをするが当然
だ。」

するうち古茶箆筒の上の方にかかっている時計が五時を打つた。お庄は何だか気が進
まなかつた。寄席へも行きそびれたような気がして、心がいらいらした。糺に話したい
ことも胸につかえているようであつた。お庄思ひの糺には、家もなくて方々まごつて
いるお庄の心持が、一番解つているように思えた。

お庄は帯を締め直すと、二階に忘れて来た^{ハンケチ}手^{ハンケチ}を捜しに上つた。二階には寒い夕
方の風を立てつけの悪い障子をはたがた鳴らして、そこらの壁や机の上にまだ薄明りが
さしていた。お庄はその薄暗いなかに坐つて、しばらく考え込んでいた。するうちにそ
とと起ちあがつて、段梯子を降りた。

お庄はやがて、堅く凍^いてついた溝^{どぶいた}板^{こまげた}に、駒下駄の歯を鳴らしながら、元気よく
路次を出て行つた。外は北風が劇しく吹きつけていた。十五日過ぎの通りには人の

ゆき^{ゆきき}き
往來も少く、両側の店も淋しかった。砂埃に吹き^{さら}曝^{さら}されている、薄暗い寄席の看板

などが目についた。

お庄はまだ思い断^きつて、独りで築地へ行く気がしなかった。それよりは、浅草の方へ帰って行った方が、まだしも気楽なように思えた。そして時々立ち停^とつて思案していた。

浅草へ帰ったのは、八時ごろであった。お庄は馬車を降りると、何とはなし仲居の方へ入って行ったが、しばらくそこらを彷徨^{ぶらつ}しているうちに、四下^{あたり}がだんだん更^ふけて来た。

お庄はその晩大道で、身の上判断などしてもらって、それからとぼとぼと家の方へ帰って行った。身の上判断は思っているほど悪い方でもなかった。

二十九

築地へ行くと言って出かけたきり行かなかつたことが後で知れてから、お庄は糺に電話できびしく小言を喰^くった。電話のかか^かつて来た時、客が立^たて込んでいて、お庄は落ちていて先の話^{はな}を聴くことも出来なかつたが、みんなおも^{おも}い^いのほか心配していることと、叔父や湯島のお婆さんの怒^いっていることだけは受け取れた。お庄は何^{なに}だか^かかるはずみ^{はずみ}軽^{かろ}い^いことをしたように思^{おも}つて、一日そのことが気^きにか^かつた。

「それじゃ二、三日の中にきつと行くね。たびたびそんなことをすると、しま^{しま}いに誰^{たれ}もかま^まつてくれなくな^なってしま^まうからね。」と、糺が念^{ねん}を押^おした^{した}ことば^{ことば}も、お庄の^お頭^{あたま}脳^{のう}をいらいらさせた。お庄は客のいない部屋^{へや}の壁^{かべ}のところに倚^よりか^かつて、腹立^{はらだ}たしいよ^ような心持^{こころもち}で、じつと考^{かん}え込^こんでいた。築地へはこれきり行^いかないこと^{こと}にしようかとも思^{おも}つた。一生誰^{たれ}の目^めにもか^かからないよ^ようなところへ行^いつてしま^まいたよ^ようにも思^{おも}つた。暮^{くれ}に田舎^{いんや}へ流^{なが}れて行^いつたお鳥^{おどり}のこと^{こと}などが想^{おも}い出^でされた。

「もし工合がいいようだったら知らしてあげるから、ことによつたらお前さんも来るといいわ。少しは^{ぜんしやく}前借も出来ようというんだからいいじゃないか。」

立つ少し前に、奥山で逢つた時、お鳥はこう言つて、その土地のことを話して聞かせた。それは^{いばらき}茨城の方で、以前関係のあつた男が、そこで^{うなぎや}鰻屋の板前をしていることも打ち明けた。

「お前さんなんざまだ^{うぶ}幼だから、行けばきつと^{はや}流行りますよ。」お鳥はこうも言つた。

お庄はおそろしいような心持で聴き流していたが、時々そうした暗い方へ向いて行くような気もしていた。

「お清さんお清さん。」と、廊下で自分呼んでいる^{ほうばい だる}朋輩の慵い声がした。（お庄はこの家ではお清と呼ばれている。）お庄は聞いて聞えない風をして黙っていた。するうちに^{ハンケチ}手で目を拭いて客の方へ出て行つた。

それから二、三日して、お庄は菓子折などを持って、築地の方を尋ねた。奥の方では叔母の^{つまび}爪弾きの音などが聞えて、静かな茶の間のランプの蔭に、母親が誰かの不断着を縫つていた。お庄がそつとその側へ寄つて行くと、母親は締りのない口元に^え笑みを見せて、娘の姿にじろじろ目をつけた。

「お前がここへ来ると言つて、それきり来ないもんだで、どうしたろうかと言つて、叔父さんも^{えら}豪い心配していなすつたに。」と言つて、今夜は同役のところへ碁を打ちに行つていることを話した。正雄も二、三日前田舎から出て来た叔母の弟をつれて銀座の方を見に行つて、いなかった。

お庄は、そこで二、三服ふかしてから奥の方へ叔母に挨拶に行つた。寒がりの叔母

は、炬燵のある四畳半に入り込んで、三味線を弄りながら、低い声で端唄を

くちずさ
口吟んでいたが、お庄の姿を見るとじきに罷めた。

「おやお庄ちゃんかい、しばらくでしたね。」と言つて振り顧つた。叔母はその晩気が面白そうに見えた。そして、堅苦しく闕のところにお辞儀をしているお庄に気軽に話をしかけながら、茶の間へ出て来た。

しばらくすると、叔母の弟が正雄と一緒に帰つて来た。色の白い目鼻立ちの優しいその弟は、いきなりそこにべたりと坐つて溜息を吐いた。

「ああ、魂^{たま}げてしまった。実に剛気なもんですね。」

「この人は銀座を見て驚いているんだよ。」弟は笑い出した。

部屋が急に陽気になった。お庄も晴れ晴れした顔をして、衆^{みんな}の話に調子を合わせた。

三十

「叔父さんはことによると今夜も帰つて来ないかしら。」叔母は柱時計を見あげながら気にしだした。時計はもう十二時近くであつた。

「あの人の碁も、このごろは一向当てにならないでね。」

茶箆筥から出した煎餅^{せんべい}も、弟たちが食い尽し、茶も出し殻^だになつてしまった。

母親は傍^{はた}の話を聞きながら時々針を持つたまま前へ突つ伏さるようになっては、また

重い目蓋^{まぶた}を開いて、機械的に手を動かした。お庄はその様子を見て腹から笑い出した。

「阿母さんは何ていうんでしょうね。そんなに眠かったら御免 ^{こうむ} 蒙 ^{やす} って寝 ^{やす} んだらい
いでしょう。」

「お寝みなさい。どうせ今夜は帰らないでしょうから。」叔母はその方を見ないように
して言った。

「いいえ、眠ってやしません。」

おそろしい ^{よい} 宵 ^ば 張りな母親は、居睡りをしながら、一時二時まで手から仕事を放さ
ない癖があつた。 ^{あたま} 頭 ^{あたま} 脳 ^{あたま} が悪いので、夜も深い睡りに陥ちてしまうなんということがな
かつた。

「僕はどうしても兄貴の世話にや何ぞならないで、きつと独りで ^や 行 ^や 通 ^や してみせる。」

と、 ^{きのう} 昨日 ^{あたま} から ^{あたま} 方々 ^{あたま} 東京 ^{あわ} を ^{あわ} 見 ^{あわ} て ^{あわ} ある ^{あわ} いて、 ^{あたま} 頭 ^{あたま} 脳 ^{あたま} が ^{あたま} 興 ^{あたま} 奮 ^{あたま} して ^{あたま} いる ^{あたま} の ^{あたま} で、 ^{あわ} 口 ^{あわ} から ^{あわ} 泡 ^{あわ} を ^{あわ} 飛

ばして ^{しやべ} 自 ^{しやべ} 分 ^{しやべ} の ^{しやべ} 事 ^{しやべ} ば ^{しやべ} かり ^{しやべ} 弁 ^{しやべ} っ ^{しやべ} て ^{しやべ} いた ^{しやべ} 叔 ^{しやべ} 母 ^{しやべ} の ^{しやべ} 弟 ^{しやべ} も、 ^{しやべ} 叔 ^{しやべ} 父 ^{しやべ} の ^{しやべ} 机 ^{しやべ} の ^{しやべ} と ^{しやべ} ころ ^{しやべ} から ^{しやべ} 持 ^{しやべ} っ ^{しやべ} て ^{しやべ} 来 ^{しやべ}
た、 ^{しやべ} 古 ^{しやべ} い ^{しやべ} 実 ^{しやべ} 業 ^{しやべ} 雑 ^{しやべ} 誌 ^{しやべ} を ^{しやべ} 見 ^{しやべ} て ^{しやべ} い ^{しやべ} な ^{しやべ} が ^{しやべ} ら、 ^{しやべ} だ ^{しやべ} ん ^{しやべ} だ ^{しやべ} ん ^{しやべ} 気 ^{しやべ} が ^{しやべ} 重 ^{しやべ} く ^{しやべ} な ^{しやべ} っ ^{しやべ} て ^{しやべ} 来 ^{しやべ} た。 ^{しやべ} この ^{しやべ} 少 ^{しやべ} 年 ^{しやべ} の ^{しやべ} 家 ^{しやべ} は、 ^{しやべ} 田 ^{しやべ}
舎 ^{しやべ} の ^{しやべ} 町 ^{しやべ} で ^{しやべ} 大 ^{しやべ} き ^{しやべ} な ^{しやべ} 雑 ^{しやべ} 貨 ^{しやべ} 店 ^{しやべ} を ^{しやべ} 出 ^{しやべ} っ ^{しやべ} て ^{しやべ} いた。 ^{しやべ} お ^{しやべ} 庄 ^{しやべ} は ^{しやべ} 時 ^{しやべ} 々 ^{しやべ} その ^{しやべ} ^{きちがい} 狂 ^{きちがい} 気 ^{きちがい} じ ^{きちがい} み ^{きちがい} た ^{きちがい} 調 ^{きちがい} 子 ^{きちがい} に ^{きちがい} 釣 ^{きちがい} り ^{きちがい} 込 ^{きちがい} ま ^{きちがい} れ
ながら、 ^{きれい} 妙 ^{きれい} な ^{きれい} 男 ^{きれい} が ^{きれい} 来 ^{きれい} た ^{きれい} も ^{きれい} の ^{きれい} だ ^{きれい} と ^{きれい} 思 ^{きれい} っ ^{きれい} て ^{きれい} 綺 ^{きれい} 麗 ^{きれい} な ^{きれい} その ^{きれい} 顔 ^{きれい} を ^{きれい} 眺 ^{きれい} め ^{きれい} て ^{きれい} いた。

「さあ、 ^{つるじ} 鶴 ^{つるじ} 二 ^{つるじ} も ^{つるじ} 正 ^{つるじ} ちゃん ^{つるじ} も ^{つるじ} お ^{つるじ} 寝 ^{つるじ} み ^{つるじ} な ^{つるじ} さい ^{つるじ} よ。」 ^{つるじ} と、 ^{つるじ} 広 ^{つるじ} い ^{つるじ} 座 ^{つるじ} 敷 ^{つるじ} の ^{つるじ} 方 ^{つるじ} へ ^{つるじ} 寝 ^{つるじ} 道 ^{つるじ} 具 ^{つるじ} を ^{つるじ} 取 ^{つるじ} り ^{つるじ} 出 ^{つるじ} し
て、 ^{つるじ} そ ^{つるじ} こ ^{つるじ} へ ^{つるじ} 二 ^{つるじ} 人 ^{つるじ} を ^{つるじ} 寝 ^{つるじ} か ^{つるじ} せ ^{つるじ} て ^{つるじ} しま ^{つるじ} う ^{つるじ} と、 ^{つるじ} 叔 ^{つるじ} 母 ^{つるじ} は ^{つるじ} 心 ^{つるじ} 配 ^{つるじ} そ ^{つるじ} う ^{つるじ} な ^{つるじ} 顔 ^{つるじ} を ^{つるじ} し ^{つるじ} て、 ^{つるじ} 火 ^{つるじ} 鉢 ^{つるじ} の ^{つるじ} 傍 ^{つるじ} へ ^{つるじ} 寄 ^{つるじ} っ ^{つるじ} て ^{つるじ} 来 ^{つるじ}
た。 ^{つるじ} 近 ^{つるじ} 所 ^{つるじ} は ^{つるじ} も ^{つるじ} う ^{つるじ} 寝 ^{つるじ} 静 ^{つるじ} ま ^{つるじ} っ ^{つるじ} て、 ^{つるじ} 外 ^{つるじ} は ^{つるじ} 人 ^{つるじ} 通 ^{つるじ} り ^{つるじ} も ^{つるじ} 絶 ^{つるじ} え ^{つるじ} て ^{つるじ} しま ^{つるじ} っ ^{つるじ} た。 ^{つるじ} ^{れいがんじま} 霊 ^{れいがんじま} 岸 ^{れいがんじま} 島 ^{れいがんじま} の ^{つるじ} 方 ^{つるじ} で、 ^{つるじ} 太 ^{つるじ} い
汽 ^{つるじ} 笛 ^{つるじ} の ^{つるじ} 声 ^{つるじ} な ^{つるじ} ど ^{つるじ} が ^{つるじ} 聞 ^{つるじ} え ^{つるじ} た。

叔母はその晩、 ^{くらしむ} し ^{くらしむ} み ^{くらしむ} じ ^{くらしむ} み ^{くらしむ} し ^{くらしむ} た ^{くらしむ} 調 ^{くらしむ} 子 ^{くらしむ} で、 ^{くらしむ} 家 ^{くらしむ} の ^{くらしむ} 生 ^{くらしむ} 活 ^{くらしむ} 向 ^{くらしむ} き ^{くらしむ} の ^{くらしむ} 事 ^{くらしむ} な ^{くらしむ} ど ^{くらしむ} を、 ^{くらしむ} お ^{くらしむ} 庄 ^{くらしむ} 母 ^{くらしむ} 子 ^{くらしむ} に ^{くらしむ} 話 ^{くらしむ}
して ^{くらしむ} 聞 ^{くらしむ} か ^{くらしむ} せ ^{くらしむ} た。 ^{くらしむ} 今 ^{くらしむ} の ^{くらしむ} 会 ^{くらしむ} 社 ^{くらしむ} で ^{くらしむ} い ^{くらしむ} く ^{くらしむ} ら ^{くらしむ} か ^{くらしむ} 信 ^{くらしむ} 用 ^{くらしむ} が ^{くらしむ} 出 ^{くらしむ} 来 ^{くらしむ} る ^{くらしむ} ま ^{くらしむ} で、 ^{くらしむ} 二 ^{くらしむ} 度 ^{くらしむ} も ^{くらしむ} 三 ^{くらしむ} 度 ^{くらしむ} も ^{くらしむ} ま ^{くらしむ} ご ^{くらしむ} つ ^{くらしむ} い ^{くらしむ} た ^{くらしむ} 事 ^{くらしむ}

や、堅くやつておりさえすれば、どうにかこうにか取り着いて行けそうな会社の方も、少し尻が暖まると、もうほかのことに手を出して、事務がお留守になりそうだということなどを気にしていた。叔父はそのころから株に手を出したり、^{こうざん} 礦山の売買に口を利いて、^{もう} 方々飛び歩いたりした。そして儲けた金で茶屋小屋入りをした。

^{うち} 「良人もあすこは、今年がちょうど三年目だでね、どうか巧い工合に^{しくじ} 失敗らないでやつてくれればいいと思つてね……三年目にはきつと^{しくじ} 失敗るのが、これまでのあの人の癖だもんですからね。」

母親は性のないような^{ゆびさき} 指頭に、やっぱり針を放さなかった。

「もう年が年だから、弟もちつとは考えていますらい。」と、^{びいき} 弟鬮の母親は眠そうな顔をあげた。

「それに私も、この年になるまで子がないもんですからね。」

「まだないという年でもござんすまいがね。弟だつて、四十には三年も間のあることだもんだから……。」

お庄はやがてこの叔母の傍へ寝かされた。叔母は床についてからも、折々寝返りをうって、表を通る俵や人の足音に耳を引き立てているようであつた。するうちお庄はふかふかした蒲団に暖められて快い眠りに沈んだ。

三十一

翌朝目がさめて見ると、叔父はまだ^{かえ} 復つていなかった。明け方近くに、ようやく寝入つたらしい叔母は、口と鼻の大きい、蒼白いその顔に、どこか苦悩の色を浮べて、優しい^{ほおぼね} 寝息をしながら、すやすやとねていた。頬骨が際立つて高く見えた。お庄は何

だか淋しい顔だと思つて眺めていた。

お庄は仮りて着て寝た叔母の^{ひとえもの}単衣物をきちんと畳んで蒲団の傍におくと、そつと
ふすま
襖を開けて、暗い座敷から茶の間の方へ出た。台所では、母親がもう働いていた。

七輪に火も^{おこ}興りかけていたし、鉄瓶にも湯を沸かす仕掛けがしてあつた。お庄も襷が
けになつて、長火鉢の掃除をしたり茶箆筒に雑巾をかけたたりした。

そこらが一ト片着き片着いてしまうと、^{みんな}衆は火鉢の傍へ寄つて、母親が^く汲んで出
す朝茶に^{のど}咽喉を^{うるお}潤した。鶴二も正雄も、もう朝飯の支度の出来た^{ちやぶだい}餉台の側に
新聞を拡げて、叔母の起きて出るのを待つていた。

するうちに座敷の方へ日がさして、朝の気分がようやく^{だら}惰けて来た。東京地図を畳
んだり拡げたりして、今日見て歩くところを^{もくさんだ}目算立てしてしていた鶴二は、気がいら
らしてきたように懐中時計を見ては、しきりに待ち遠しがつていた。母親も茶碗を手に
しながら^{あくび}欠をしだした。お庄は二人に飯を食べさしてから、正雄に小遣いを少し持
たして鶴二と一緒に出してやつた。正雄は暮から学校の方も^よ休していた。

^{あたま}「頭脳^しの悪いものは、強いて学問などさして苦しますより、いつそ商売を覚えさすか
職人にでもした方が早道だそうでね。」と母親は叔父の言つたことをお庄に話した。

「どつちにしても、叔父さんが今に^{もと}資本を^{おろ}卸して、店を出さしてやるというこんだから、何が正雄の得手だか、それが決まると口を見つけて、すぐそつちへ行くことになつ
ているだけれどね……。」

「正ちゃんは何がいていうんです。」

「それが自分にも解らないそうで……。」母親は茶の湯気で逆上^{のぼせめ}目を冷やしていた。

叔母が起きて来て、三人で飯を済ましてもまだ叔父は帰つて来なかった。叔母は出勤の時間を気にしながら、始終表の方へ耳を引き立てていた。顔に淡^{うす}く白粉などを塗つて、髪も綺麗に撫^なでつけ、神棚に榊^{さかき}をあげたり、座敷の薄端^{うすばた}の花活^{はないけ}に花を活けかえなどした。お庄はそんな手伝いをしながら、昼ごろまでずるずるにいた。

叔父は三時ごろにやつと帰つて来た。叔母は待ち^{くたび}億^億れて安火に入つて好きな講釈本を読んでいたし、お庄は帰ろう帰ろうと思ひながら、もう外へ出るのが億劫^{おつくう}になつて、暖かい日のあたる縁側で、雲脂^{ふけ}の多い母親の髪を^と積^すいて梳いてやっていた。

叔父はどこか酒の気もあるようであつた。細い首に襟捲きを捲いて、角帯の下から重い金時計^{ぶらさ}を垂^さげ、何事もなさそうな顔をして入つて来た。

「叔父さんの暮は大変長いつて、今もそう言っていたところだに。」と母親は笑いながらその方を振り^{かえ}顧^顧つた。

叔父は黙つて火鉢の傍に坐ると、赤く充血したような目をして、そこにあつた新聞を長い膝の上で拵けて見ていたが、奥で叔母に床を延べさせて大欠をしながら寝てしまつた。

「お庄ちゃんも昨^{ゆうべ}宵から来て待つていますのに……。」と、叔母は言いかけたが、叔父は深く気にも留めなかった。

お庄は座敷で叔父の脱^{ぬぎす}棄^すてを畳みながら今日も夜まで引つかかっているのかと思つた。叔母は箆筒の上に置いた紙入れのなかを^{しら}検^検べなどしていた。

夜になつても、叔父の目は覚めそうにもなかった。

三十二

晩飯の時、叔母は叔父の好きな取っておきの干物^{ひもの}などを炙^{あぶ}り、酒もいほど

ちょうし ちょうし どうこ つ ねま まくらもと
銚子に移して銅壺に浸けて、自身寝室へ行って、二度も枕頭で声をかけて

見たが、叔父は起きても来なかった。ランプに火を点^つけてお庄が呼び起しに行くと、叔

父は顎^{あご}の骨をガクガク動かして、細長い筋張った手を蒲団の外へ延ばして、ぐったり
寝込んでいた。お庄は「厭な叔父さんね。」とげらげら笑いながら出て来た。

「あんなに疲れるまで遊んであるいて、体に障^{さわ}らにやいいが……。」

叔母は拍子ぬけがして、自分で猪口^{ちよく}に二、三杯酒を注いで飲んだ。叔母と叔父と
は、年がそんなに違っていないかった。

お庄は叔父の寝相^{ねぞう}を真似をしながら、「どうすればあんなに正体なくなるんでしょ
う。」と行ってまだ笑っていた。

飯を済ましたところへ、小原という会社の男が遊びに来た。三十少し出たくらいの、
色の蒼白い、敏捷^{はしつ}こそうな目をした小柄の男で、給仕から仕上げたのだということ
を、お庄は後で聞いた。

「小崎さん今日は見えませんでしたね。」と小原は叔母が火を入れて出す手炙^{てあぶ}りの側

へ、お庄が奥から持つて来た座蒲団を敷いて、小綺麗な指頭^{ゆびさき}で両切りの短く切った

のを、象牙^{ぞうげ}のパイプに嵌^はめて喫^のみはじめた。お庄は古^{ふる}こびれたようなその顔を横か

ら見ながら、時々傍^{わき}を向いて何やら思い出し笑いをしていた。するうちに叔母に睨^{にら}

まれて奥の方へ逃げ込んで行った。

小原は^{ふくさ}襦紗に包んだ紙入れのなかから、女持ちの金時計を一つ鎖ごと取り出して、ランプの心を掻き立て、鎖の目方を引いたり型の説明をしたりして叔母に勧めていた。お庄も傍へ行って見た。その時計は同じ会社の上役の某という人の細君の持物であった。その女が花に負けて、一時の融通に質屋へ預けてあったのを、今度厭気がさして、質の直で^ね売るといふことを、小原は^{でどころ}繰り返して、^{出所}の正しいことを証明した。

叔母はさんざん^{いじく}弄りまわした果てに、気乗りのしない顔をして男の手へ品物を返した。

「また^{よそ}余所へお売りになればつたつて、決して御損の行く品物じゃありません。」小原は傍に手を突いて覗いているお庄と叔母との顔を七分三分に見比べながら言い立てた。お庄はまた顔に袖を当てて笑い出した。

「いや^{ほんとう}真実に。」と、その男も笑い出した。そして一順人々の手を^{へめぐ}経廻つて来た時計を、そつと懐へしまいこんだ。

やがてランプの^つ釣り手を掛けかえて、この男と叔母と母親とで、花が始まった。

「あなたもお入りなさいな。」と、お庄も仲間に引き入れられた。お庄は身幅の狭い着物の膝を掻き合わせながら、目にちらちらする花札を手にした。鶴二は後の方で今日の日記を小さい手帳に書きつけていた。

叔父が奥から、のそりと起き出して来たころには、花も大分進んでいた。

叔父はお庄の^{うしろ}背後の方に坐り込むと、時計を見あげて^{だる}懈い欠をしていた。時計はもう九時を過ぎていた。

「そんな手が出るというのがあるものか、お庄は花を知らないかい。」叔父はお庄の肩

越しに覗き込んで、煙管を^{くわ}咬えながら一ト勝負後見した。

やがて叔父が^{どてら}褌袍を羽織って、連中の間へ割り込むと、お庄は席をはずれて、酒の
^{かん}爛をしたり、弟と二人で寒い通りへ^{みんな}衆の食べる物を^{あつら}誂えに走ったりした。

花札の音が夜遅くまで、^{こも}籠った部屋に響いた。

三十三

去年葉くさい日本橋で過した^{はつなつ}初夏を、お庄は今年築地の家で迎えた。浅草から荷物を引き揚げて来たところから見ると、叔父の体は一層忙しくなっていたし、家も景気づいていたのだ。お庄も叔父が見立ててくれた新しい^{ゆかた}浴衣などを着せられて、夕化粧をして、叔母と一緒に^{てつぼうず いなり}鉄砲洲の稲荷の縁日などへ出かけた。

叔母はどこへ行っても、気の浮き立つというようなことはなかった。好きな芝居を見に行っても、始終家のことを気にかけていた。お庄は^{しまりや}儉約家の叔母が、好きな狂言があるとわざわざ横浜まで出向いてまで見に行くのを不思議に思った。たび重なると叔母は袋へ食べ物などを仕入れて行ってお庄と二人で大入り場で済まして来ることもあった。

家にいると、仕立てものをするか、三味線^ひを弾くかして、やつと日を暮したが、そうしていてもやはり心が淋しそうであった。

「私は子がないので^{ほんとう}真実につまらない。」お庄と二人で^{たちものいた}裁物板に坐っている

時、叔母は気が^{ふさ}鬱いで来るとしみじみ言い出した。

「お庄ちゃんを貰って養子でもしようかね。」叔母は時々そんなことも考えた。そして

しんみ
親身しんみになって着物の裁ち方や縫い方を教えた。少しは糸道が明いているのだからとい

って、三味線も教えてくれた。お庄は体の大きい叔母と膝を突き合わせて、湯島の

けいこや かじ
稽古屋けいこやで 嘯かじったことのある夕立の雨や春景色などを時々一緒に 謳うたった。叔母の知

っている 端唄はうたなども教わったが、声がそんなものには太過ぎたし、手もしなやかに動
く方ではなかつたので、自分でも気がはずまなかつた。

「わたし叔母さん駄目よ。」と、お庄は叔母が三味線を取り出すと、次の室まへ逃げて行
った。叔母は田舎風の節廻しで、独りで謳うたっていた。

叔母はお庄の欲しがるような大きな人形を買って来て、それに好みの 衣裳いしょうを縫つ

て着せなどした。向うの子供を呼び込んで、玩具おもちゃを買って 懐なつかしたり芝居の真似

をさしておかしがったりしていたが、厭味なほどませたその子供は、お庄に 馴染なじんで、

夜も一緒に抱かれて寝た。お庄は子供を 負おぶって日に幾度となく自分の家と向うの家と
を往復した。

こんびら
金毘羅こんびらで講元をしていた大きな無尽の掛け金を持って、お庄は取り 縫すがるこの子供

を 負おぶいながら、夕方から出かけて行つた。ここから金毘羅まではかなりの 道程みちのりで

あつた。お庄は鉄道馬車で行けるところまで乗って、それからえつちらおつちら歩いて
行つた。その晩は銀座の地藏の縁日であつた。お庄は帰りにそつちへ廻つて、人込みの

なかを子供を負おぶつたり歩かせたりして 彷徨ぶらついていた。土の 臭においと油煙と 人瘟ひといきれ気

とで、呼吸のつまりそうな通りをおりおり涼しい風が流れた。お庄は 背せなかや 股もものあ

たりにびつしより汗を掻きながら、時々蓄音機の前や、風鈴屋の前で足を休めて、

せなか
背で眠りかける子供を揺り起した。汚い三尺に草履ぞうりを突っかけた職人などが、幾度となくお庄の顔を覗いて行つた。「こんなに若くて子持ちかい。」などと大声に言つて、後から押して来る連中もあつた。

おろ たもと いたずら
帰つて子供を卸してから、お庄は袂たもとのなかに悪戯いたずらされたことにやつと気がついた。

翌日お庄は、涼しい朝のうちに、水口の外へたらい盥たらいを持ち出して、外の浴衣と一緒に

ゆうべ
昨夜の汚れものの洗濯をしていた。手拭を姉さんかぶ冠かぶりにして着物を膝までまくつ

て、水を取り替え取り替えすす滌すすいでいた。そこへ腹掛けにはんてん半纏はんてんを着込んだ十三、四の子供が、封書のようなものを持って来た。そして、「……公が、ちよつとこれを見て下さいッて。」と言つてお庄に手渡した。

「変な小僧さんが、こんなものをくれましたよ。」とお庄は前垂で手を拭き拭き上へあがつて、叔父の前へ差し出した。そしてその小僧の様子をしながら、笑い出した。封書のなかには、汚い墨で妙なことが書いてあつた。叔父はにっこりもしないで、袋ごと丸めてそこへ棄てた。

あか
お庄は赧あかい顔をして、また水口へ降りて行つた。胸がしばらくときどきしていた。

三十四

はしや ひさし
燥はしやぎきつた 廂ひさしにぱちぱちと音がして、二時ごろ雨が降つて来た。その音にお

庄は目をさまして、急いで高い物干竿ものほしざおにかかつていた洗濯物を取り入れた。中に

じめじめ
はまだ湿じめじめ々しているのもあつた。お庄はそれを縁側の方へ取り入れてから、障子に

だる　もた　しぶき　ほて
懈い体を凭せて、外の方を眺めていた。水沫と一緒に冷たい風が、熱った顔や
手足に心持よく当って、土の臭いが強く鼻に通った。お庄は遅い昼飯がすむと間もな
く、四畳半の方で針を持ちながら居睡りをしていた。

座敷の方では、暑さに弱い叔母が　あか　かんとんまくら　うちわ
赭い広東枕をしながら、新聞と団扇と
ひるね
を持つたまま午睡をしていた。叔母は夏に入ってから、手足にいくらか水気をもった
だる
気味で、肥った体が一層懶かった。飯も茶をかけて、やつと流し込んでいるくらい
で、そつちへ行つてはばツたり、こつちへ来てはばツたりたおれていた。それに　しも
下の
方の病気などがあつて、日本橋の婦人科の病院に通いはじめてから、もう二週間の余に
もなつていた。神経も過敏になつて、ちよつとした新聞の三面記事にもひどく気を悩ま
めかけぐる
した。人殺し、夫婦別れ、亭主の妾狂いというようなものを読むと、「厭なこと
しか
だね。」と言つてつくづく顔を顰めていた。

三、四日叔父がまたどこかに引つかかっていた。晩に家で酒を飲んでみると、向島の
社長の家から電話がかかつて来たと言つて、酒屋の小僧が取り次いでくれた。お庄がそ
とば
の酒屋へ行つて聞き取つてみると、社長の夫人が例の賭場を開いているのだということ
が、じきに解つた。こんな連中は用心深い屋敷の奥の室へ立て籠つて、おそろしい大き
ま
な花を引くということをお庄も叔母から聞いて知つていた。その見張りには巡査が備
やと
われるといふこともあながち嘘ではないらしかった。

叔父は着物を着換えると　くるま
俥に乗つて急いで出かけて行つたが、それきり家へ帰つ
て来なかつた。向島へ聞き合はしても、社へ問合はしても、叔父のその後の居所が解

らなかつた。

「あの晩の電話だって、どこからかかって来たのだから解りやしない、お庄ちゃんこの間の紙入れを貰って、それで叔父さんと共謀ぐるになっていやませんか。」猜疑うたぐりぶか深い

叔母は淋しい顔にヒステリー性の笑えみを洩もらした。

お庄は呆あきれた顔をしていた。そうしてから笑い出した。

「そうですね。」叔母は火鉢の縁を拭きながら言った。

「私そんなことしやしませんよ。あの時はもう確かに社長さんのお宅だったんですもの。」お庄は真顔になった。

「それじゃそうかも知れない。」叔母は苦笑した。

それからお庄は、また方々電話で聞き合わたした。近いところは歩いて尋ねて見た。終

いには洲崎すさきの引手茶屋へ問い合わせしてみると、そこでは返事が少し曖昧であった。お庄はそれから叔母に相談して、俵でそこまで出かけて行つた。その晩会社の方では叔父がいなければ解らないような用事が出来ていた。

お庄を載せた俵は、だんだん明るい通りを離れて暗いしつとりした町へ入つて行つ

た。舟や材木のぎつしり詰つた黒い堀割りの水に架かかつた小橋を幾いくつ個となく渡ると、

そこにまた賑やかな一区画があつた。川縁の柳の蔭には、俵屋の看板が幾いくつ個となく見

えて、片側には食物屋たべものやがぎつしり並んでいた。

広々した廓内くるわうちはシンとしていた。じめじめした汐風しおかぜに、尺八の音の顫ねふる

が夢のように通つて来て、両側の柳や桜の下の暗い蔭から、行燈あんどんの出た低い軒のな

かに人の動いているさまが見透みすかされた。

三十五

お庄は芝居の書割りのなかに^{おび}誘き入れられたような心持で、走る俵の上にじつと坐つていられなくなつた。ふわふわするような胸の血が軽く^{おど}躍つていた。

叔父が行きつけの福本という茶屋は、軒並びでは比較的大きくて綺麗な方であつた。お庄はその少し手前のところで俵を降りて、そこから薄明るい店へ入つて行つた。端の方に肥つた二十三、四の色の浅黒い女が、^{ほおずき}酸漿を鳴らしながら、膝を崩して坐つていたので、お庄はそつとその傍へ行つて聞いてみた。

「今ちょつと電話で伺つたんですがね、こちらに小崎という人が来ておりませんか。」

女は軽く頷いてみせて、「石川島の小崎さんでしょう、それならば、もう少し前にお連れの方と御一緒にお帰りになりましてすよ。」

「そうですか。」と、お庄は考えていた。

「まアお上んなさいまし。」長火鉢の方に坐つていた四十四、五の、これも色の黒い女が奥から声かけた。

「小崎さんは、かれこれもうお宅へお着きの時分でございますよ。」

お庄は何だか嘘のような気がした。

「急に用事が出来たものですからね、今夜もし帰らないようだと家で大変困るんです。」

^{かみ}内儀さんはそれぎりほかの方へ気をとられていた。若い女も酸漿を鳴らしはじめた。

お庄は叔母から、叔父の上^{うち}楼まで行つて突き留めなければ駄目だと言われたことを

^{おも}憶い出して、しばらく押し問答していた。

「それじゃ念晴しに行つてごらんなさいまし。御案内しますから。」と女は笑いながら

言い出した。

「それがいいでしょうよ。花魁^{おいらん}の部屋もちつと見ておおきなさいまし。」内儀さん
も言った。

お庄は店頭^{みせさき}へ出してくれた出花^{でばな}も飲まずにまた俵に乗った。

家へ帰ると、叔父はもう着いていた。奥の四畳半で、一ト捫^{もんちやく}着^{まぶち}した後で、叔父
の羽織がくしゃくしゃになって隅の方に束^{つく}ねてあった。叔母は赤い目縁^{まぶち}をして、お
庄が上つて行つても、口も利かなかつた。その晩叔父は按摩^{あんま}などを取つて、宵のうち
から寢床へ入った。お庄らも、早く戸締りをして寝かされた。

その翌日の今朝、叔父は早めに社の方へ出て行つた。朝飯の時、お庄が洲崎へ迎えに
行つた話が初めて出て、衆^{みんな}は大笑いした。

叔父が出て行くと、叔母はまたセツセと体を動かしていたが、長く続かなかつた。涼
しいところへ枕^{ねそべ}を移しては、寝臥^{ねそべ}っていた。

お庄は目につかぬほどの石炭の滓^{おり}のついた、白い洗濯物に霧を吐きかけては、皺^{しわ}
の熨^のしはじめた。雨はじきに霽^{あが}つて、また暑い日が簾^{すだれ}に差して来た。

「お庄ちゃん、私氷が飲みたいがね。」と、叔母は傍^{うな}から唸^{うな}つた。

お庄は洗濯ものに押しをしておいて、それから近所の氷屋へ走つた。

氷が来た時分に、表から風の吹き通す茶の間の入口の、簾^{すだれ}屏^{びょうぶ}風^ねの蔭^ねに眠てい
た正雄も、やつと目を覚ましかけて来た。正雄はそのころ、叔父の知っている

やえすがし
八重洲河岸の洋服屋へ行つていた。東京で一番古いその洋服屋は、外国へ行つて来た最

初の職人であつた。お庄は外から帰りがけに、正体なく寝込んでいる弟の二の腕に彫りかけた入れ墨のあるのに目を着けた。

「正ちゃんは大変なことをしていますよ。」お庄が叔母に言いつけると、叔母もびつくりして出て来て見た。弟の腕には、牡丹ぼたんのような花が、碧黒あおぐろく黛すみを入れられてあつた。

「誰にそんなことをされたんです。こんなもの早く取っておしまいなさい。正ちゃんは自分の体を何と思つているの。」と、お庄は叔母と一緒になつて小言を言つた。

夕方に弟はすごすご帰つて行つた。お庄はまた釜かまの下へ火を焚たきつけて、行水の湯を沸かしにかかつた。

三十六

少し涼すずけ気が立つてから、叔母が上州の温泉へ行つた留守に、しばらく田舎へ行つていた母親がまた戻つて来て、お庄と一緒に留守をすることになつた。夏の中ごろに年取つた伯母の老病を見舞いに行つた母親は、そのころまでも伯母の傍に附いていた。伯母の病氣は長い間の腎臓やリュウマチでこの幾年というもの床に就きづめであつた。周囲の人たちも介抱うに倦んで病人は自分の業ごうをはかなんだ。いつ死ぬか解らないその病人の臭い寢所の側に、母親も際限なく附いていられなかつた。それに久しく東京で母子おやこともまごつている母親は、村の表通りを晴れて通ることすら出来なかつた。身装みなりが見すばらしいので久しぶりで墓参をするにも、そつと裏山の裾すそを伝つて行かなければならなかつた。母親はどんなことをしても、広々した東京の方がやはり住みよいと思つた。

母親が帰つて来ると、父親の近ごろの様子もほぼ解つた。父親は本家の方の家の世話

をしたり、町で長く公立の病院長をしていて、金を^{こしら}拵^えて村へ引つ込んでから、間もなく腐骨症の脚を切つて死んだ親類の、妾と、独り取り残されたその祖母との家を見たりして日を暮していた。田舎で見聞きして来た厭な出来事を、母親から話を聞かされると、お庄は十一の年に出たばかりの自分の家や周囲の暗い記憶が、また胸に浮んだ。

「あのお祖母さんも、若い時分にどこのものか知れない庭男と私^{くつつ}通^ついて院長のお父さん……つまりお祖母さんの^{つれあ}添^あ合^あいに髪を切られた騒ぎもあつたでね。その庭男が

らいびょうすじ癩^{うわさ}病^{うわさ}筋^{うわさ}だつたというこんで院長の脚の病気も何だか知れやしないう^{うわさ}風^{うわさ}評^{うわさ}をする人もあるそうで……。」と、母親は帰つた晩に弟夫婦やお庄の前で話した。

「そんな^{ばか}莫^{ばか}迦^{ばか}なことがあるもんで。」と、叔父は笑つた。

「そうすれば、院長の祖母さんところへ入り浸^{あに}つている義^{あに}兄^{あに}さんなぞも危^{あに}いわけじゃないか。」

「それだで私も気味が悪くて、帰っているうちに一度もあの人と行き逢わずしまつたに。」と母親は親のようなその婆さんのところへ^{つか}浸^{つか}つている良人のことを悪く言い立てた。

お庄は父親が、いつのまにあのお婆さんとそんな関係になつたものかと、恥じもし^{あき}憫^{あき}れもして聞いていた。

「お庄も、野口屋で貰いたいなどという話もあつたけれども、あすこへくれるくらいなら、まだやるどころもあろうと思つてね。」と、母親はお庄の顔をまじまじ見ながら言い出した。その家は、村で呉服物などを商う家だということを、お庄も思い出した。お庄は自分の帯など買う時に、その店から板に捲いたなりの長い^{ゆうぜんざれ}友^{ゆう}禅^{ぜん}片^{ざれ}などを、そ

この亭主が担ぎ込んで来て、^{なんど}納^{なんど}戸^{なんど}で母親があれこれと柄を見立てていたことなどを想

い出すと、ばかばかしいような気がした。

「あすこも近ごろは ^{しんしょう}身 ^{おやじ}上 を作ったそうで、良人からお庄をくれてやろうかなんて言つてよこしましたけれど、私は返事もしましねえ。」母親が父親のことを怒っている風がお庄にもおかしく思われた。

「お庄はまた会社の方で、くれろと言うものもあるで、少し裁縫でも上手になったら、^{わし}私 が東京で片づける。」と、叔父は自分の目算を話した。

お庄の縁談は、そのころもないことではなかつた。小原という男なども、その ^{きもい}胆 煎りの一人であつた。お庄を見に、小原と一緒に花など引きに来る男も一人二人あつた。

叔母が湯治に行く時、叔父も湯治場まで送つて行つて二、三日 ^{とうりゆう}逗 留 した。

叔母がいなくなると、その日その日の経営を、お庄は叔父から ^{まか}委 されることになつた。

お庄は長火鉢のところに坐つて、世帯女のような気取りで、時々小遣い帳を拵けて ^{まず}拙 い字でいろいろの出銭を書きつけた。

三十七

叔母は ^{さび}荒 れた秋口の湯治場に、長く独りで留まつていられなかつた。宿はめつきり ^{ひま}閑 になつて、広くて見晴しのよい部屋が ^{いくつ}幾 個 も空いていた。経費も何ほどもかからなかつたので、叔父はその一つに病気のある妻を入れておいて帰つたのであつたが、叔母はそこが寂しいと言つて、^{こぼ}端書で 零 して来た。そのたんびに家のことを気にかけてあつた。戸締りや火の元の用心、毎日の小遣いのことなどがきつと書いてあつた。

「こんなくらいなら、湯治に行つたつて効^{ききめ}験がありやしない。」と言つて、叔父は笑つていたが、するうちに叔母は二十日^{はつか}もいないで帰つて来た。

叔父は留守の間もよく家を明けた。時とすると五、六日も家へ寄り着かないことがあつた。洲崎の女^{ひか}を落籍すとか、落籍して困つてあるとかいう風^{うわさ}評が、お庄らの耳へも伝わつた。どつちにしても叔父が女に夢中になつてゐることだけは確かであつた。母親がそつと小原に様子を訊いてみると、小^{こざか}賢しい小原はえへら笑いばかりしていて容易に話さなかつた。

「どんな女でござんすかね。」母親は女のことをしきりに聞いたがつた。

「なに、女はそれほどよかありませんよ。けどなかなか如才のない女です。まア手取りでしょう。小崎さんも大分お使いになつたようです。」

叔母に隠して、叔父が無理算段をしては入れ揚げてゐることが、この男の話でも解つた。叔父の持ち株で、近ごろ小原の手で、他へ譲り渡された口^{いくつ}の幾個もあることも、その口から洩れた。そのなかで女の身に着くものも少くなかつた。お庄は話を聞いただけでも惜しいと思つた。ここへ来てからお庄はまだこれと言つて、纏^{まと}まつて叔父に拵えてもらつたようなものもなかつた。

「お^{この}此^つさんもあんまり家を約めるもんだで、かえつて大きい金が外へ出るらね。」と

母親は後で弟嫁のことを非^{くさ}しはじめた。母親はお庄が叔母から譲り受けた小袖の薄らいだようなところに、丹精して色^{しきし}紙を当てながら、ちよくちよく着の羽織に縫い直す見積りをしてゐた。お庄はその柄を、田舎くさいと思つて眺めていた。

「お前たちのお父さんが、親譲りの身上を飲み潰したことを考えれア、叔父さんのは自分で取つて使うのだから、まアまアいいとしておかにやならん。」母親はこうも言つた。

また母親の長たらしい愚痴が始まった。二人は色紙ものを^{いじ}弄ながらいつまでも目が
さ
冴えていた。腹がすいて口が水つぽくなって来ると、お庄は昼間しまっておいた、蒸し

^{しんいも}
た新芋の冷たいのを盆ごと茶箆筒から取り出して来て、また茶をいれかえなどし
た。もうお終いものの枝豆なども持って来た。

叔父はその晩も帰って来なかった。お庄は汚れた茶道具や、食べ残しの芋を流しへ出
しておいて、それから寝しなに、戸棚のなかから^す醋を茶碗に汲んで、暗いところで顔を
しか
顰めながら飲んだ。

^{くりぼん} ^{みやげもの}
刳盆や糸捲きのような土産物を、こてこて持ち込んで、湯治から帰って来た
叔母は、行った時から見ると、血色が多少よくなっていた。体の肉にも締りが出来て帰
った当座は食も進み夜も心持よく眠れた。

叔父がまた旅へ出ることになった。^{レール}線路の枕木を切り出す^{やま}山林を見に、^{くりやま}栗山の方
へ、仲間と一緒に出向いて行った。大分^{つか}費い込みの出来た叔父は^{もう}一層儲け口を
みのが
見脱^{あせ}すまいとして燥っていた。

「これが当れば、お前にだつて水仕はさしちやおかん。」と、叔父はお庄にも悦ばせ
た。

叔父は行ったきり、いつまでも^{いまいち}今市の方に引つかかっていた。一行はそこから馬
に乗って、栗山の方へ深く入って行かなければならなかった。日光で遊んでいるような
噂も伝わった。

^{ながあめ} ^{だいやがわ}
霖雨で、大谷川の激流に水が出たということが、新聞で解った時、叔母は蒼
くなって心配した。そしてお庄と一緒に良人の安否を八方へ聴き合わした。

十月の末に、家から電報で取り寄せた旅費で、からがら帰つて来た叔父はひどい
こうがんえん
擧丸炎で身動きもならなかつた。

三十八

お浜という茶屋の女中をつれ出して、近所の料理屋へ行つた叔父を送り出してから、
叔母は^{くつたく}屈^た托^{そう} そうな顔をして、今紙入れを出してやつた手筆筒の^{かぎ}鍵^{いじ}を^弄りなが
ら、そこに^がつかり^落胆^{して}して坐つた。

「私がセツセと骨を折つて、家を始末したつて、これじゃ何にもなりやしないわね。」
と、叔母は散らかつたそこらを取り片着けているお庄に^{こぼ}零^すすともなく溜息をついた。

お庄は^{ぜん}前^{みせ}に茶屋の^{みせ}店^{さき}頭^でちよつと口を利いたことのあるその女が、手土産に持
つて来てくれた^{はん}半^{えり}衿^を、しみじみ見ることすら出来ずにいた。半衿は十六のお庄に
は^もな^か過ぎるくらいであつたので、お浜は、^もな^か最^中の折と一緒に取次ぎをしてくれたお庄
の前に差し出してから、年を聞いて^あき^れていた。

「それじゃいけませんでしたわね。」と、お浜は幾度もいいわけをしていた。

日光の方でさんざんの失敗を演じてから、叔父は借りの溜つている洲崎の方へは寄り
着きもしなかつた。女にも厭気がさしていたので、^かし^り河岸^をかえてちよくちよく
からすもり
烏^森の方へ足を運びはじめていた。

「お立替えの分なぞはどうでもよござんすから、ちつと入らして下さいよ。このごろま
たいい^お花^{いらん}魁^が出ましたから。」と女は如才なく店の^ひま^な閑^こなことを^零した。

叔父は自分の病気のことや、暮で会社の忙しいことなどを大げさに言い立てていた。

お浜はお庄にも、いろいろの話をしかけて、今度遊びに来るなら、大八幡^{おおやはた}を案内して見せるなどと、愛想を言いながら出て行った。叔父は奥へ引っ込んで、叔母に紙入れを出さすと、余所行き^{よそゆ}の羽織を引っかけて、ぶらりと女をつれ出した。

暮の決算報告などに忙しい時期であったが、叔父は会社の方もあまり顔出ししなかった。出にくい事情のあるらしいことだけは叔母にも解っていたが、それを訊^きこうとしても、無口な叔父はにやにや笑っていて、何事をも語らなかつた。戦捷^{せんしょうご}後持ちあがったいろいろの事業熱が、そろそろ下火になって、一時浮き立った人の心がまた沈んでいた。叔父もそんなような波動に漂わされた端くれの一人であることが、お庄の胸にもおぼ^{おぼ}朧^{ろうげ}ろげに感ぜられた。

会社の提^{ちようちん}灯^{ちん}を持った爺さんが、叔父の居所を捜しに来た。お庄はへどもどして奥へ駈け込んだ。

「困るね。」と、叔母は厭な顔をして、玄関口へ現われた。

「何、小崎さんがお預かりになっている鍵さえあれば解ることなのです。別に御心配なことじゃありませんでしょう。けど、いよいよ鍵がないとなると、今夜中に金庫^ぶを打ち^ぶこわ^{こわ}壊^{くわ}さんけれアならんそうですからな。」

じつてい^{じつてい}実^{じつ}体^{たい} そうなその爺さんは、あが^{あが}かまち^{かまち}のところに腰をかけ込んで、脱^ぬめ^め目^めのな^ない^い目^めで奥口を覗^{のぞ}き込んだ。

側に聞いている母親もお庄も、胸がときどきしていた。

「まさか弟が費^{つかい}消^{こみ}をするようなことはありやしまいと思うがね。」母親は目を

こす
擦りながら、傍から つぶや
呟いた。

「いずれ小崎さん一人の責任というんでもござんすまい。」爺さんは、小倉の洋服の

かくし たばこ
衣兜から 蓑を出して吸いながら、いつまでもそこを動かなかつた。

お庄はまた くるま
俥で、夜遅く叔父を迎いに出かけた。叔父の居所はじきに解つた。そ

こは烏森のある小さい待合で、叔父はその奥まった小室に閉じ籠つて女ぬきで、酒を飲

みながら花に ふけ
耽つていた。一座はお庄の知らない顔ばかりであつた。 あごひげ
顎鬚の延び

た叔父の顔は、蒼白い電燈の光に やつ
窺れて見えた。

三十九

叔母の健康が、またよ
縋りが戻つたように悪い方へ引き戻されて来た。暮から春へかけ
ての叔父の一身の動揺が、一家の人々にも差し響きを起さずにはいなかつた。

責めを引いて会社をや
罷めてから、叔父は閉じ籠つて毎日暮ばかり打つていた。叔父の
かなり使えることを知っている人たちは、他へ周旋しようと言つて勧めてくれたが、
叔父は当分遊ぶつもりだと言つて応じなかつた。

「何を計 もくろ
画んでいるだか知らないが、月給はちつと下つても、やっぱり出た方がいい
かと思うがね。」と、母親は弟嫁と一緒になつて、叔父の心を動かそうとしたが、叔父
は姉や妻にも、へこたれたような顔を見せるのが、 いまいま
忌々しかつた。

株屋仲間といったような連中が、時々遊びに来た。一緒に会社を退いた人たちも、そ
の当座寄ると さわ
かると儲け口を嗅ぎつけようとして、花を引いていても目の色が変わつて

いたが、そんな人たちも長くこの家を賑わしてはいなかった。会社で引き立ててやったような人たちや、一緒に遊んであるいた仲間も姿を見せなくなった。

「あれほどしげしげ 繁々来た小原さんも、近ごろはかんぎらともしないね。」と、叔母は、お庄や母親を奥へ呼んで、内輪だけで花札を調べながら、時々そのころの賑やかだつたことを思い出していた。そうして花を引いても気のはず 興むということがなかった。やがて母親の巾着から捲き揚げた小銭をそこへほう 投り出して、叔母は張りが抜けたように、札を引き散らかした。

始終眠っているような母親は、自分の番が来たのも知らずにいては、お庄に笑われた。

「阿母さんは誰にお辞儀しているんでしょう。」と、お庄は下から覗き込んで、げらげら笑い出した。

母親は、そうしていながら、いつまでも札を手から棄てなかった。

「もう済んだのよ。堪忍してあげますよ。」

「姉さまも花はどのくらい好きだか……。」と、叔母もごうはら 業腹のような笑い方をした。

「好きというでもないけれど……。」と、母親はやつと性がついたような顔をあげた。

お庄はセツセと札をはこ 匣へしまい込んで、蒲団ふとんの上に置いた。まだ寝るには早かつた。三人は別の部屋へ散って行った。

母親は、茶の間の方で、また針箱を拡げはじめた。するうちに、叔父が講釈よせの寄席から帰って来た。

淋しくなると、叔父はよくお庄を引つ張り出して、銀座の通りへ散歩に出かけた。芝居や寄席のような、人の集まりのなかへも入って行ったが、傷てを負つたようなその心は、何に触れても、深く物を考えさせられるようであつた。お庄は高座の方へ引き牽け

られている叔父の様子を眺めると、いたましいような気がしてならなかった。叔父の横顔には、四十前とは思えぬくらい、肉の衰えが目立つた。

「私も、もう一度は盛り返してみせるで、その時は、お前にだつて立派な支度をしてくれる。」と、叔父は通りの陳列などを見て行きながらいいわけらしくお庄に言つて聴かせた。

築地で掛りつけの医師に、局部を洗つてもらつていた叔母の妊娠だということが、間もなくその医師にも感づけて来た。叔母はまた日本橋の婦人科の医師に診^みてもらつた。

「こんなものをむやみと洗つちやたまらない。確かに妊娠です。もう四カ月になっています。」その医師は断言した。

去年の夏のような水気が、また叔母の手足に張つて来た。陽気が暖かくなるにつれて、体がだんだん重くなつて来た。産をするまでは、荒い療治もしかねる局部の爛^{ただ}れが、拡がつて来るばかりであつた。叔母は聞いていても切なそうな呻^{うなりごえ}吟^{ごえ}声を挙げ、夜も寝られない大きな体を床の上に転がっていた。

四十

たんす ひきだし
箆^{たんす}笥^{ひきだし}の抽斗^{ひきだし}のなかに、赤子に着せる白や赤や黄のような着物が、一枚一枚数が殖えて来る時分に、叔母の体もだんだん重くなつて来た。叔母はほとんど十年目で三度目の出産に逢うのであつた。始末のよい叔母は、田舎住居^{いなかずまい}のそのころから持ち越し
て来た、茜木綿^{あかねもめん}や麻の葉の型のついた着物をまた古葛籠^{ふるつづら}の底から引つ張り出して来て眺めた。産れて百日生きていた子供のために拵えたという、節の多い田舎織り
の黒斜子^{くろななこ}の紋附などもあつた。こんな子供の顔は、今思い出そうとしても何の印象も残つていなかった。お庄はその着物を見ながら、げらげら笑い出した。三十にもなつ

て、まだ初産ういざんのような騒ぎをしている叔母の様子がおかしかった。

「四十になって初産する人だつて、世間には随分ありますよ。お庄ちゃんだつてなにかと言つてるうちに、もうじき三十ですよ。」

「三十ですつて……。」お庄はあまり嵩高かさだかなような気がして、そんな年数としかずの考
えが、どうしても頭脳あたまへ入らなかつた。

「私三十なんて厭ですね。」

「厭だつてしかたがない、もう目擦めこする間まだから。それにお嫁にでも行つて自分で世帯
を持つてごらん、それこそすることは多くなつて来るし、苦勞は殖えるばかりだし、年
を捨うのがおかしいくらい早いものですよ。」

産婆てさげが、手提鞆てさげをさげてやつて来ると、叔母は四畳半の方へ自分で蒲団を延べて、診
てもらつた。

「男か女か、まだ解りませんかね。」叔母は腹さすを擦さすっている産婆きづかに氣遣きわしげに訊
いた。

お庄は手洗い水を持つて行つて、襖ふすまの蔭で聞いていた。

「そうね、解らないこともありませんよ、まア男と思つていらつして下さいませ。何し
る大きゅうございますからね。おおこの動くこと。」と、九州きゅうしゅうなま訛りのあるそ
の産婆は、これが手、これが肩などと言つて、一々妊婦の手に触らせていた。

「六月むつきやそこいらで、そう育っているのでは、お産がさぞ重いでしょうね。」叔母は
また自分の年取つていることを気にした。

「そんなことがあるもんですか。少しぐらい体が弱つていたつて、私が大丈夫うまく産

ませておあげ申しますから……それにあなたは初産ういざんじゃないのですからね。年取つ

てからの初産は少し^{つろ}辛うございますよ。」

産婆は^{ぞうげ}象牙に^{あか}赭く^{あぶら}脂の染み込んだ聴診器を靴にしまい込むと、いろいろのお

産の場合などを話して聴かせた。^{かたわ}畸形や^{ふたご}双児を無事に産ませた話や、自分で子宮出血を止めたという手柄話などが出た。

叔父は苦い顔をして、座敷の縁の方に新聞を見ていた。叔母が妊娠と解つてから、夫婦はまだ見ない子のことを、いろいろに考えていた。が、叔父は時々自分の年とその子の年とを繰って見たりなどした。

「もう^{おそ}晩い、私が^{はたち}五十七になってやつと二十だで。」

叔母はまた死んだ子の年など数えはじめた。

去年の夏よりも一層、叔母は冷たい物を欲しがった。氷や水菓子を、叔父に^{ないしょ}秘密でちよくちよくお庄に取りに走らせた。暑い日は、半病人のような体を、風通しのよい

台所口へ^は這い出して来て、^{はぎ}脛の^{むく}脹んだ重い足を、冷たい板敷きの上へ投げ出さずに

はいなかつた。^{しも}下の方も始終苦しそうであつた。婦人科の若い医者が時々廻つて来ては、その方の手当てをしていた。腹に子があるので、思いきつた療治もできなかつた。

^{いたがゆ}痛痒くなつて来ると、叔母は苦しがつて泣いていた。それが堪えられなくなる

と、近所から呼んで来た^{あんま}按摩を^{かや}蚊帳のなかへ呼び込んで、^{あずき}小豆の入った袋で、患

^{たた}部を敲かせた。

お庄が朝目をさますと、^{うすのろ}薄野呂のようなその按摩は、じつと坐つたきりまだ機械的に疲れた手を動かしていた。明け方から眠つたらしい叔母の蒼白い顔に、蚊帳の影が涼

しく ^{そよ}戦いでいた。

四十一

やがて胎児の死んでいることが、出産前^{いしや}から医師や産婆に解つて来た。しばらく床に就きつきりであつた叔母が産気づいて来たのは、それから間もないある日の夕方であつた。奥で腹痛を訴える産婦の声を聞きながらお庄はその時食べかけていた晩飯を急いで済ました。

産婆はじきに駈けつけて来た。

「ちつと早く出るかも知れませんよ。」と、産婆はすぐに白い手術着^きを被^きて産婦の側へ寄つて行つた。産婦は ^{あおぶく}蒼 ^{あおぶく}脹れたような顔を ^{しか}顰^{しか}めて、平日^{いつも}よりは一層^{せつ}切^{せつ}なげなうな ^{うな}唸^{うな}り声を洩らしていた。そのうちに、電話^{しらせ}で報^{しらせ}知^{しらせ}を受けた ^{いしや}医師^{いしや}が、助手を連れてやつて来た。

叔父は客と一緒に、座敷で碁を打つていた。

「どうせ死んだ ^{かたまり}塊^{かたまり} を引^{かたまり}つ張^{かたまり}り出すだけのものだからね、素^{しろうと}人^{しろうと}が騒^{しろうと}いだつて何にもなりやしない。」と言つて、平気でぱちりぱちりやつていた。

二、三度腹が痛んだかと思うと、死んだ胎児はじきに押し出された。死児はふやけた ^{あたま}ような頭^{あたま} 顱^{あたま}が、ところどころ海綿^{びらん}のように赭^{びらん}く糜^{びらん}爛^{びらん}して、唇にも紅い血の色がなかつた。

「男の子ですかね、女の子ですかね。」産婦は ^{のちざん}後^{のちざん} 産^{のちざん} の始末^{のちざん}をしてもらうと、ぐつた ^{しば}り^{しば} 疲^{しば}れてそのまま ^{しば}凋^{しば}んで行きそうな鈍い目で医師や産婆の顔を眺めて不安そうに尋ね

でした。そして落ち入りそうな細い喘ぐような呼吸遣いをしていた。

「赤さんは大きな男のお見ですよ。」と、産婆は死児をそつと次の室へ持ち出した。そ

こには母親が、畳の上に桐油を敷き詰めて、盥に初湯か湯灌かの加減を見ていた。どの部屋も、人が動くばかりで、誰も声を立てるものはなかった。

死んだ赤子は、やがて真白い産着を着せられて、二枚折りの屏風の蔭に臥かされた。医師や産婆の帰る時分には長い悩みのあと産婦も安静な眠りに沈んでいた。

「あまり気を揉まして、後で力を落さしても悪いですから、少し落ち着いたら子供の死んでいることをお話しなすつた方がいいでしょう。」医師は叔父に注意して引き揚げて行った。

産婆の指図で、その夜のうちに、子供は壺のなかへ入れられた。何か事があると来てもらうことに決まっている植木屋の幸さんという男が、通りから火消し壺を買って来て、自分で小さいその死骸を中へ収めた。その上へ白い片が被けられた。

「そんなことだろうと思つた。どうせ私には子に縁がないのだでね。」

叔父と母親とが、赤子の死んで出たことを話して聞かすと、叔母は片頬に淋しい笑みを見せて、目に冷たい涙を浮べた。

その一夜は、何となく家が寂しかった。母親と幸さんとは、壺の前に時々線香を立てたり、檜に湿いをくれたりしていたが、お庄は爛れた頭顱を見てから、気味が悪いようで、傍へ寄つて行く気になれなかった。

「お此さんは、あまり氷や水菓子が過ぎたもので、それで腹が冷えて、赤子があんな

になつたろうえね。」と母親は、夜更けてから、茶の間で ^{みんな} 衆 ^{すし} が ^{つま} 鮎 を 摘 んで茶を飲んでいる時言い出した。

叔父はそこへ ^ね 臥そべりながら、黙っていた。長いあいだ叔母の体が根底から壊されていることや、血の汚れていることが、深く ^{あたま} 頭 脳 に考えられた。

叔父はやがて、すごすごと座敷へ入って寝てしまった。

蒸し暑いような、薬くさいような産室の蚊帳のなかから、また産婦の ^{うめきごえ} 呻 吟 声 が洩れた。お庄と一緒に、そこいらの後片着けをしていた母親は、急いでその部屋へ入って行った。

四十二

叔父にお庄と植木屋と、この三人が翌日に死んだ赤子を ^{やなか} 谷 中 の寺へ送って、^{ひるす} 午 過ぎに帰って来ると、母親は産婦に熱が出たと言つて、心配そうに一同を待っていた。

「……それに ^{ゆうべ} 昨 夜 から見ると、また今朝水気が出たようでね。重い病が体があれば、かえつてお産が軽いと言うくらいのもものだから、まだまだ安心は出来まいよ。」

母親は叔父の着換えなどを、そつと奥から取り出して来て、そこへ脱ぎ棄てられた白 ^{あかつち} 足袋の 赭 土 を、^{はけ} 早速刷毛で落としなどした。

産婦は疲れた顔をこつちへ向けて、縁側へ出て羽織の埃を払つたり、汗ばんだ ^{じゅばん} 襦 袢 を軒に干したりしている人々の姿を、じろじろと眺めていた。

「皆さん御苦労でしたね。」と、その口から ^{うめ} 呻 吟 声 みたいな声も洩れた。

「それでお庄ちゃんどうでした、坊さんはよくお経を読んでもくれましたか。」産婦はお

のぞ
庄の 覗く顔に、淋しく 微 笑 んで見せたが、目に涙が浮んでいた。

「ええ、もう長いあいだ……。」と、お庄は 浴衣 に着換えながら、ぼきぼきした顔を
して、紅入りメリンスの帯を締めていた。

「お墓はどんどこだかね…… 癒 ったらお庄ちゃんに連れてつてもらって、お 詣り
をしてやりましょうよ。そして小さい石塔を建ってやりましょう。 闇 から闇って言う
のは、ほんとうにあのことだわね。」産婦は泣くような声で言っていた。

壺は植木屋の幸さんが、 紐 で首から下げて持って行った。その後へ叔父とお庄の傳
が続いた。三人は帰りに 蓮 の咲いている池の 畔 を 彷徨 きながら、広小路で手軽に
昼飯などを食ったのであった。お庄は久しぶりで、こんな 晴 々 したところを見るこ
とが出来た。

二時ごろに、昨 夜 の 医 師 が来て診て行った。医師は首を 傾 げながら、 叮 寧
な診察のしかたをしていたが、別に深い話もしなかった。少し 血脚 氣 の気味もあるよ
うだし、 産 褥 熱 の出たのも気にくわぬが、これでどうかこうか余病さえ 惹き起
さなければ、大して心配することもなさそうだと行って局部へ手当てを施し、新しい処
方などを書きつけて置いて行った。

この 医 師 から、病人が見放されたのは、それから八日目であった。叔母の体は、手
をかければ崩れでもしように、顔も手足も黄色く 脹 ついて来た。時々差し引きのある
熱も退かなかつた。 下 の方からは厭な 臭 氣 が立って、 爪 や唇に血の色がなかつ

た。腹膜、心臓、そんなような余病も加わって来た。

「こう何も彼も一時になって来ては、とても手のつけようがありませんな。何なら大学へでも入れて御覧になりますか。」医師は絶望的に言い断^きった。

その日の暮れ方に、湯島の^{ただす} 糺^{ただす}の方へ大学の病室の都合を訊いてもらいに駆けつけたお庄は、九時ごろに糺と一緒に戻って来た。大学の方は明きがなかった。糺は方々駆けずりまわった果てに、前に下宿していたことのある友達が助手をしている、^{するがだい} 駿河台^{するがだい}の病院の方へようやく掛け合ってくれた。

「どつちにしたって死ぬ病人だもんだで、病院に望みはない。」叔父はこう言っただけで、入院の準備に取りかかった。

体の重い病人は、床のなかで着替えをさせられると、母親や叔父や、多勢の手で上り口へ掻き据えられた^つ 吊り台^つの上にやっとなんか運ばれた。そんなにまでして病院へ^{かつ} 担^{かつ}ぎ込まれるのを、病人はあまり好まなかった。

「どうか早く癒って帰るようになっておくれよ。」母親は目に涙をためながら、門まで出て、担ぎ出される吊り台の中を覗き込んだ。

「留守を何分お願い申します。」と叔母は喘ぐような声で言った。

叔父と糺とは、^{ちょうちん} 提^{ちょうちん}灯^{ちょうちん}をさげた植木屋と一緒に、黙って吊り台の傍へ付き添ったが、その灯影にちらちら見える人々の姿の見えなくなるまで、母親とお庄は門に立って見送っていた。静かな夜であった。

四十三

この病人には、おもにお庄と、田舎から出て来た病人の母親とが、付き添うことになった。

田舎の母親の出て来たのは、入院した^{あくるひ}翌^{あくるひ}日の晩方であった。お庄はその日、朝は

やく手廻りのものを少し取り纏^{まと}めて、それを持って病院へ行った。病室には、糺が知
合いの医員に話して、自由を利^きかせて、特別に取り入れた寝台のうえに、叔父が一人、
毛布を着てごろりと転がっていた。床の上には、蘆^{よか}を敷いて幸さんも寝ていた。看
護婦と雑仕婦とが、体温を取ったり、氷の世話をしたりしている。朝の病院は、どの部
屋もまだ静かであった。

叔父と幸さんとは、食堂の方で、賄^{まかな}いから取った朝飯を済ましたり、お庄が持ち
込んで行ったお茶や菓子を食べたりしてから、やがて十時ごろに帰って行った。

「それじゃ私はまた来るから……。」と、叔父は深いパナマの帽子をかぶ^{かぶ}って、うとう
としている病人の枕^{まくらもと}頭^{こごえ}へ寄ると、低^ひ声^{こごえ}に声をかけた。

体を動かすことの出来ない病人は昨夜^{ゆうべ}初めて特に院長の診察を受ける時、手を通し
やすいように、潤^{ひろ}くほどかれた白地の寝衣^{ねまき}の広袖から、力ない手を良人の方へ延ば
した。「私もこんな体になつて、いつどんなことがあるか知れないで、夜分だけはどこ
へもお出なされないようにね。」と、水ツぽいような目で叔父の顔を眺めながら言っ
た。

叔父はうなず^{うなず}頷^{うなず}いて見せた。

「そのうちには阿母さんもきつと出て来るで。電報は遅くも昨夜^{ゆうべ}のうちに着いている
はずだからね。」

お庄は母親の来るまで、病人の側に一人でいた。そして雑仕婦に手伝つて、時々氷を
取り換えたり、下^{しも}の方の始末をしたりした。氷は頭^{くち}と言わず、胸^{むね}といわず幾個^{いくつ}も当

てられてあつた。もう長いあいだの^{とこず}床摺れも出来ていた。

「重い患者さんね。」と、雑仕婦は^{しり}臀へ^あ油紙を宛てがうときお庄に話しかけながら笑つた。

^{ゆうべ}「昨夜寝台へお載せ申すのが、大変でしたよ。」

患者もきまりわるそうに力ない笑い方をした。

家に箆筒にしまつてある着物の話が出た。まだ仕立てたばかりで、^{しつ}仕着けも取らない

夏帯のことなどを、病人は寝ていて気にしはじめた。^{はくぼたん}白牡丹で買ったばかりの

^{こわた}古渡りの^{さんご}珊瑚の^{ついしゆ}根掛けや、^{なかざ}堆朱の中挿しを、いつかけるような体になられることやらと、そんなことまで心細そうに言い出した。

お庄はこの叔母が、長いあいだ自分の物ばかりに金をかけて来たことを^{おも}憶い出していた。母親の物を、叔父も父親と一緒に田舎の町で遊びに^{ふけ}耽つていた時分、取り出して行つた。叔父の学資を、父親は少しは^す助けたこともあつた。昔から油を絞つて暮して

来た母親の^{さと}実家は、その時分村の大火に逢つて、家も^{どぞう}帑蔵も灰になつてから、叔父は残つていた少しばかりの田地を売つて、やつと学校へ通つていたのであつた。その代りにお庄の支度を叔父が引き受けることになつていた。叔父は時々それを言い立てては、お庄の身につく物を買おうとした。そのたびに叔母はいい顔をしなかつた。

話に疲れると病人は、長い溜息を吐いて、水蒸気の立つ氷枕に、^{しび}痺れたような重い^{あたま}頭顱を動かした。

「私も永いあいだ、世帯の苦勞ばかりして来て、今死んで行つては^{ほんとう}真実につまらな

い。」叔母は唸るように独り ^{ごと} 語 を言った。

お庄は心から憎いと思つて、その顔を眺めた。

部屋に電気がついてから間もなく、叔母の母親が幸さんに連れられてやつて来た。母

親は五十五、六の背の高い女であつた。田舎にしては ^{しやれ} 洒落た風をしているのが、まずお庄の目に着いた。

「私もこんな体になつてしまつてね。」と叔母は母親の顔を見ると、めそめそと泣き出した。

母親の優しい小さい目にも、一時に涙が ^わ 湧き立つた。そして何にも言わずに、

^{ハンケチ} 手 巾 で面を ^{おさ} 抑 えた。お庄も傍で目 ^{うる} を 曇 ませながら、 ^{くすぐ} 擦 ツたいような気がした。

四十四

「私は、それじゃお庄さんに後をお願い申して、ちよつと髪を結いに帰つて来ますわ

ね。」と、洒落ものの母親は、来た晩から気にしていた小さい ^{まるまげ} 丸 髻 を撫でながら言

い出した。二、三日側についていると、母子の間にもう大分話の種がなくなつてしまつ

た。来ると早々窮屈な病室の寝台などに ^ね 臥かされて、まだろくろく帯 ^と を ^{つかれ} 積いて汽車の 疲 勞 を休めることすら出来なかつた。

牛乳とスープだけで活きている叔母が時々、「ああ、おいしいおこうこでお茶漬が食

べたいね。」と唸ると、 ^{としより} 老 婦 は傍からもどかしがつて、看護婦に尋ねてみたが、看護婦やお庄は笑つていて取り合わなかつた。

「院長さんに伺つてみましょう。」看護婦はその場のがれに言つて出て行つた。

「それでも、ちつとは何か食べさすものの工夫がつきそうなものだね。」と、母親は隅の方で、お庄が運び込んで来ておいた、細かいかき餅の^{かん} 籠を見つけて振って見たり、^{かご} 籠のなかの^{りんご} 林檎を取り出して眺めたりした。そして口淋しくなると、自分でポリポリ摘んで食べては、お庄に田舎の嫁の話などをして聞かせた。その嫁の荷のたくさんあることが母親の自慢であった。夜になると、母親はまた腹をすかして、お庄に近所で^{すし} 鮓を^{あつら} 誂えさせ、そつと茶盆を持ち込ませなどして、少しの間も食ったり飲んだり、^{しゃべり} お饒舌をしていなければ気が済まなかった。

「私の病気がよくなったら、阿母さんもゆつくり東京見物でもして下さいよ。」病人は寝台のうえから話しかけた。

「私もこんなことでもなければ、めつたに出て来るようなこともないでね。」母親は、^{ぎせる} 銀の延べ煙管に^{たばこ} 煙草をつめて、マツチで内輪に煙草を吸っていた。

このごろ田舎で見た、東京役者の芝居の話などが始まった。東京で聞えた役者のことをこの母親もなにかとなく知っていて、独りで調子に乗って^{しゃべ} 弁つた。

母親が出て行くと、病室はにわかに淋しくなった。暑い日中、熱に浮かされたような患者は、時々^{ゆか} 床の敷物のうえに^{いねむ} 疲れて居寝りをしているお庄を、幾度となく呼ん

だ。お庄があわてて^{まくらもと} 枕頭へ顔を持って行くと、叔母は鈍いうつとりした目を開いて、一両日姿を見せない叔父のことを気にかけて訊いた。

「叔父さんに急いで来てもらうように、電話でそう言つてね……。」と、患者は^{うわごと} 嚚言のように^{つぶや} 呟いた。

患者も^う 附添いも^{まどかけ} 倦んだように黙つて、離れていた。埃深い窓帷には、二時ごろの

暑い日がさして来た。そこへ院長が、助手を二人つれて入って来た。

院長が先の見えすいている患者の体に綿密な診察をしている間、叔母は傍に立っている、髭ひげのちょんぶりした、愛あい嬌きょうのある若い助手の顔を、下からまじまじ眺めていた。

「この助手さんは別品だねえ——。」と言って、狂きちがい気きじみた笑い方をした。

お庄も看護婦も、後の方でくすくす笑い出した。

厳肅な院長は、につこりもしないで、じつと聴診器に耳を当てていた。披はだけた患者の大きい下腹が、呼吸いきをするたびにひこひこして、疲れた内臓の喘ぐ音が、静かな病室の空気に聞えるのであった。

院長は、物慣れた独逸語ドイツごで、低こごえ声こごえで助手に何やら話しかけると、やがて静かに出て行った。

お庄は後でしばらく笑いが止らなかつた。

夕方になると、叔母はまた叔父の来ないのに、気いらだを焦だ立たせた。お庄は幾度となく家へ電話をかけた。

四十五

六尺ばかり隔てをおいて、寝台ねのう上にね臥ふていながら、叔母と叔父とはやきもちげんかやきもちげんか ゆうべゆうべ嫉あ妬い喧あ嘩いをした。昨夜ああののくらいい電話でんわををかかけてて来きてももくくれれななかつたたとか、きづまきづま気き塞さりりなな病院びやういんよりよりもも他たにに面め白はくいいとところろががああるるからから来きななかつたたのだだとか、愚おろにももつつかかぬぬことをを言いいい出でして、叔母は終いに泣いた。

「どこも行くところなぞありやしない。私^{わし}ア丸山さんのところで^{つかま}捕^{つかま}って花を引いていたんだ。」と、叔父は小川町の通りで買って来たばかりのウイスキーの口を開けて、メートルグラスに^つ注いで飲んでいた。

「それは何でござんすね。」と、叔母は^{うす}淡^{うす}い^{オレンジいろ}橙^{いろ}色^のの^{その}その^{コップ}蓋^をを遠くから^{すか}透^透して見た。

「自分ばかり飲まないで、私にも少し飲まして下さいよ。」叔母は水張った蒼白い手を延ばした。

「こんなもの飲めば死んじまう。」叔父は渋い顔をして、瓶に口をさすと、それを寝台の端の方へ隠した。そして、ごろりと^{うしろむ}背後^む向き^{だる}になって^{つぶ}懈^{つぶ}い^{つぶ}目を^{つぶ}瞑^{つぶ}ろうとした。

「いやな人だね、後向きなぞになって……病気をするものはどのくらい割りがわるいか。」叔母はじろじろ叔父の寝姿を見ながら溜息を吐いた。昼眠れば夜は眠れないのが自分には苦しかった。

昼からお庄は、汚れた病人の^{ねまき}寝^{ねまき}衣^{ねまき}や下の帯のようなものを一包み蹴込みに入れて家に帰って行った。

叔母はまた家のことをいろいろ頼んだ。

「田舎の^{おつか}阿^{おつか}母^{おつか}さんも、^{なお}疲れ^{なお}が^{なお}癒^{なお}つたらまた少しお出でなすつて下さいってね。そしてあの帯が重いようなら、私の不断帯でもおしめなすつてね、着物もじみなのがいくらもありますから……。」病人は自分の母のことばかり心配した。

お庄はその顔を眺めて立っていた。

「お庄ちゃんも、行ったり来たりするんだから、私の^{せった}雪^{せった}駄^{せった}でも出してはいたらどうだね。」病人はくつつけたようにお愛想を言った。「私は癒ればまた買いますわね。」

お庄は隅の方で帯を締め直したり、顔を直したりして、それから出て行った。

田舎の母親が、もう片身分けの見立てでもするように、座敷でいろいろなものを広げて見ていた。大抵は叔母がこの三、四年に丹精して拵えたものばかりで、ついこの春に裾廻しを取り替えてから、まだ手を通したことの無い、淡色の模様の三枚襲などもあった。お庄は嫁に行くとき、この古い方の紋附を叔母から譲ってもらうことになっていたことを思い出した。

しょうのう 樟 脳の匂いの ぶんぶん 芬々するなかで、母親を相手に、としより 老婦 はまたお しゃべり 饒舌 を始めていた。

やがて母親は済まぬ顔をして、茶の室の方へ出て来た。

「あの人は妙なことを言う人だえ。」母親は白い目をしてお庄に呟いた。

「何でも彼でも、自分の家で拵えてやったようなことばかり言うでね。それもいいけれど、あの紋附を、もうお此さんには派手だで、帰るとき田舎へ持って行ってお花さんに着せるそうだよ。」

「いいわねそんなこと……私は叔父さんにまた拵えてもらうから。」お庄は日焼けのしたような顔をハンケチで拭いた。

「どこから捜して来たか、あの碧い石の入った大きい指環まで出して来て、指環というものはまだ嵌めたことがないで、少しお借り申したいなんてね。」と、母親ははぐき 歯茎に泡を溜めながら言い立てた。

きのう 昨日から家中引つ掻き廻している、としより 老婦の仕打ちが、母親にはくやしくもあつた。

「どれさ。」と、お庄は じゃけん 邪慳 そうに訊いた。

「ほれ、あの……いつか丸山さんとお^{つい}対に、叔父さんが拵えたのがあるじゃないか
え。」母親は急^せき込んで、同じようなことを幾度も繰り返した。

四時ごろに、老^{としより}婦は娘の意気な^{くし}櫛などを挿し込んで、箆笥にきちんと錠を^{おろ}卸
して、また病院の方へ出かけて行った。

四十六

三週間も経った。そのころには、病人の体もただ薬の^{かんちよう}灌腸や注射で保^もたしてあ
るくらいであった。あ^{あたま}たまがぼんやりして、言^{つじつま}うことも辻褄が合わなかった。体が
冷えて、爪に血の色が^う亡せて来ると、医^{いしや}師がやって来て注射を施した。患者はしばら
くのまに^{みうち}渾身が暖まって来た。

「ことによると、今夜もたないかも知れませんよ。御親類へお^{しら}報せになった方がよろ
しいでしょう。」

と^{としより}しより老婦やお庄が、昏^{こんすい}睡状態にある患者の傍で、医師からこう言い渡されるの
も、もう二、三度になった。

息を吐^ふき返して来ると、患者は暗い穴の底から、^{ふち}縁に立っている人を見あげるよう
に、人々の顔を捜した。

「私だよ。」母親はその手を握って、娘の頬のところへ自分の顔を摺り寄せて行った。

患者は心から疲れたような、長い厭な唸り声を立てた。

「おお可哀そうだな。」と、母親は鼻を^{つま}塞^{つま}らせた。

病人の顔は少しずつはつきりして来た。

「その茶箆筒に、私の湯呑があつたかね。」患者はにちやにちやする口をもがもがさせた。

看護婦が、^{かわ} 渴きを止めるような薬を、^{くだ} 管で少しずつ口へ注いでやった。

「病気が癒つたら、床あげに^{べんまつ} 弁松からおいしいものをたくさん取つて、食べましょ
うね。」患者は思い出したように言い出して、^{みんな} 衆を笑わせた。

「ああ、それどころじゃない。どんなお金のかかることでもして上げるで、もう一度癒つておくれよ。」母親は泣くような声を出した。

集まつて来た人たちは、また寝台を離れて、^{ゆか} 床のうえに坐つた。

「この^{あんばい} 塩梅じゃ、また二、三日もちますかね。」

「お庄ちゃん、叔父さんは……。」患者はうとうとしたかと思うと、また訊きだした。
「叔母さん、いまじきですよ。」

お庄は叔父を見に行く風をして^む 蒸れるような病室を出て行つた。そして廊下の突当りにある医員の控え室に入った。

控え室は十畳ばかり敷ける^{にほんま} 日本室であつた。糺の知合いの医員を、お庄も湯島時代から知つていた。そして一緒に茶を呑んだり、菓子を摘んだりした。この部屋へよく遊びに来る、軽い脚気患者の、向うの写真屋のハイカラ娘とも、ちよくちよく口を利くようになった。お庄は叔父のいいつけで、この連中へ時々すしや^{そば} 蕎麦のようなものを贈つた。叔母が別品だと言つた助手が、西洋料理などを取り寄せて食べているのを見て、お庄は時々口に^{ハンケチ} 手を当てて思い出し笑いをした。

「ああ、何て暑い晩でしょう。」お庄はその入口に膝を崩して、ベツタリ坐つた。

「暑けアこの上の物干しへでもお上んなさい。」そこにワイシャツ一つになってね臥そべ
っていた知合いの医員は、はた からか 傍から擲掬うように言った。

紬の兄弟の噂が二人の間に始まった。紬に近ごろ女が出来たということも男がお庄に話して聞かした。

「そうですかね、私ちつとも知りません。」お庄は顔をあか 赧らめて、子猫のような低い鼻頭を気にして時々指で触った。

お庄は暗い物干しで、しばらく涼んでいた。中形のゆかた 浴衣に、夜露がしっとりして、肩のあたりが冷たくなって来た。

暑い病室へ入って行くと、患者のうめきごえ 呻吟声としより がまた耳についた。お庄は老婦に替
って、患者の傍の椅子に腰かけた。

夜明け方から、叔母の様子があやしくなつて来た。寝台によ 倚りかかつて、疲れてうとうとしていたお庄が目をさますと、看護婦が出たり入ったりしていた。助手も注射器を持って入つて来た。

お庄は外のしら 白むのを待つて、俵を築地へ走らせた。

四十七

家の戸がまだ締っていた。格子戸も板戸も開かなかつた。お庄は俵屋を表に待たしておいて、裏口へ廻つて、母親を呼んだ。母親は「おいおい。」と返辞をしながら出て来た。

「どうしたえ。お此さんの容体がまた悪いだか。」母親は台所のかまち 框に腰掛けて訊いた。

お庄も ^{だる} 懈い体を水口の柱に ^{もた} 凭せかけながら、叔母の容態を話した。

「それじゃとうとう駄目だかな。」と、母親はがっかりしたように言つて、天窗を引いたり、窓を開けたりした。

「それでもまあ保^もつた方さ。あのくらいにして駄目なのなら、よくよく寿命がないのだ……。」

叔父がまた家を開けていた。

「丸山さんへ行つて、花でも引いているら。」と母親は ^{ゆうべ} 昨夜も二時ごろまで待たされたことを話しながら、床をあげたり、板戸を開けたりした。

お庄は人気のない家のなかを、落ち着かぬ風であつちゆきこつち行きしていた。

とむらい ^{こつ} 葬式や骨あげに着て行く自分の着物のことなどが気にかかった。田舎から来る、

叔母の身内の人たちの前も、あまり見すばらしい ^{みなり} 身装はしたくないと ^{おも} 想つた。

母親とお庄は、奥座敷の箆笥の前に立っ^ていながら、そのことについていろいろと相談した。

「なあに間に合うて。今日の ^{ひるまえ} 午前に目を落したつて、^{とむらい} 葬式は ^{あさつて} 明後日だもんだで……それも紋を染めていたじゃ間に合いもすまいけれど、婚礼というじゃなし

^{こくむじ} 石無地でも用は十分足りるでね。それでなけれアお此さんの ^ろ 紹の方のを直すだけれどな。」

母親は落ち着きはらつて、いろいろの見積りを立てていた。

とにかくお庄は、叔父を捜しに出かけることにした。入舟町の方から渡つて行く中ノ橋あたりは、まだ ^{あさもや} 朝濛靄が深く、人通りも少かつた。その家では、女中と娘の子とが起きているぎりで、遊びに疲れた主人夫婦も叔父も、今ようやく寝たばかりのところ

あつた。叔父のたおれている座敷には、帯や時計や紙入れや飲食いした死骸^{から}などがだらしなく散らばっていた。

「まあいい、大丈夫今に行くで……。」正体なく眠っている叔父は、顎^{あご}をがくがくさせながら、お庄の顔をじろりと見たきりで、長い体をぐらりと横へ引つくら返つた。

お庄はそこへ俵をおいて、ついでに近所の髪結のところへちよつと声をかけてから家へ帰つた。

死んだという電報が、八時ごろにお庄の髪を結っているところへ舞い込んだ。

「それじゃやっぱりそうだったんだ。」と、母子は幾度も電報を読み返した。

母親は気忙しそうに立ち上つたが、さしあたって何をするという考えも思い浮ばなかつた。お庄は急いで合せ鏡をしながら、紙で^{えり}頸などを拭いて、また叔父のところへ駈けつけた。

その家では、^{みんな}衆がぞろぞろ起きて、^は脹れぼつたいような顔をして茶の^ま室へ集まつた。

叔父は^{かみ}内儀さんの^く汲んでくれた茶を飲みながら、電報の時間付けなどを見ていたが、するうちにお庄と一緒に家を出た。^{あるじ}主夫婦も、着換えをして後から続いた。

^{みんな}衆が病院へ駈けつけた時分には、死骸はもう死亡室の方へ移されてあつた。げつ

そり^{かさ}嵩の減つたような叔母の死骸には、白^{きれ}い布^かが被けられて、薄い寝台の敷物のう

えに、脚を押つ立てながら、安らかに^ね臥かされてあつた。母親は皆の顔を見ると、また

泣き出した。そして側へ寄つて死者の冷たい顔から、白^{きれ}い布を取り除けた。^{みんな}衆は寄つてその顔を覗き込んだ。

四十八

ほんとう
「真実にあつけないもんでござんした。」と、母親は目を^{こす}擦りながら言い立てた。

「すつと息を引き取つて行くところを、お医者さまたちは、傍に多勢立つて黙つて見ておいでなさるだけのものございましたよ。それでいよいよ目を落してしまつたところ

を見届けると、また黙つて、各々^{めいめい}すいと出ておいでなすつてね。それに平常^{いつも}はあ

んなに多勢入り交り立ち替り附いていて下すつたのに、あいにく今朝は^{ほん}真の私一人き

りでね。」と、母親は後の方に立つているお庄の結立ての^{あたま}頭髪や、お化粧をして来た顔に目をつけた。

「何のために使いをして下すつただか、こつちじゃ今日目を落すという騒ぎだのに、行け

^いば行たきりで、気長にお洒落^{しやれ}なぞなすつておいでなさるでね。」母親はお庄に繰り返し繰り返し厭味を言った。

^{のぼ}お庄も少し逆上せたようになっていた。そして自分は自分だけの理窟を言った。人中にいるのに、そう^{なりふ}姿振りにかまわないわけにも行かないと思つた。自分の身じんまくもする代りに、病人の看護も、長い間まだしもよくして来た方だとも思つた。

お庄は理も非も^{わか}判らないような^{としより}老婦の^{しま}愚痴に終いに笑い出した。

吊り台で、死骸が担ぎ出されるまでには、大分時間がかかつた。そのころにはまだ^{あたた}温^みか味の通つている死人の腹部も、だんだん冷えて来た。家を出るとき、声をかけて来た手伝いの人たちもそれぞれ集まつて来た。中には叔父も資本の幾分を卸して、車

を五、六十台ばかり持つて、^{ひきこ}挽子に貸し車をしている安という物馴れた男もいて真先

に働いた。

「小崎さん、患者さんの代りに、あなたの紀念の写真を一枚撮^とって下さいな。」中ごろから替^かつて来た気のやさしい上^{かみがたうま}方^産れの看護婦が、病室を取り片着けているお庄の傍へ寄^かつて来て言いかけた。お庄は夜も昼も聞かされた病人の唸り声が、まだ耳についているようであつた。

お庄は気忙しいなかで、叔父に断^つわつて看護婦と一緒に向うの写真屋へ行^いつた。看護婦の望^たみで、母親にも勸^{すす}めたが、母親の心はそれどころではなかつた。

やがてお庄は積^ためるだけの物を、蹴^か込み^みに積^たんで、母親と一緒に一と足先に病院を引^ひき揚^あげた。

格子戸や上り口の障子を外して、吊り台を家のなかまで持ち込んだのは、午後の三時過ぎであつた。叔父はこれまでに丸山の^{あるじ}主^{しらせ}や糺に手伝^たつてもらつて、死亡の報^{しらせ}知^{しらせ}を大方出してしまつた。病院の帰りに、電話や電報を出した口も少しはあつた。その中^なに、墨^{メキシコ}西^コ哥^シ公^コ使^コ館^コの通^い弁^とをしてい^{いとこ}るという^{いとこ}^{いとこ}の従^{いとこ}弟^{いとこ}に当^ある男^{いとこ}などもいた。

「すみませんが、六尺を一本ずつ切^きつて戴^かきたいもんで。」安公は座敷に^{ござ}藁^{ござ}を敷^かいて、^{おんなれん}女^{おんなれん}連^{おんなれん}の方^{おんなれん}へ声^{おんなれん}かけた。吊り台から移^{うつ}された

死^し骸^{がい}は屏^{びん}風^{ふう}の蔭^{かげ}に白^{しろ}い蒲^ぼ団^{たん}の上^{うへ}に臥^ふかされてあつた。

さらしもめん
晒^{さらしもめん}木^き綿^{めん}を買^かいに、幸^{さい}さんが表^{うら}へ飛^とび出^でして行^いつた。

女^{おんなれん}連^{おんなれん}は、別^{べつ}の部^ぶ屋^いの方^{かた}で、^{きょうかたびら}経^{きょうかたびら}帷^{かたびら}子^{かたびら}や^{ずたぶくろ}頭^{ずたぶくろ}陀^{ずたぶくろ}袋^{ぶくろ}のよう^{ぶくろ}な物^{ぶくろ}を縫^ぬうの^{ぶくろ}に急^{いそ}が

しかつた。母^{はは}親^{はは}はその傍^{そば}でまた臨^{りん}終^{しゆう}の^{しゆう}時^じのた^たよりな^{たより}な^{たより}か^かつた^かこと^{こと}を^{こと}零^{こぼ}し^{こぼ}は^{こぼ}じ^{こぼ}めた。

「田舎の人は^{ほんとう}真実^{ほんとう}に物が解らない。」と、お庄はまだ叔母の母親に言われたこと

が、^{あたま}頭脳^{あたま}にあった。

お庄は手伝いに来ている安公のところの、お留という十四、五の娘にいいつけて買わした、乾物や野菜ものをそこへ^{つや}拡げながら、お通夜^{つや}の人に出す食べ物の支度に取りかか

ろうとしていた。母親のお安も仕事の手を休めて、そこへ来て見ていた。お庄は^{はす}蓮^{はす}の

白煮を^{こしら}拵^{こしら}えるつもりで皮を^む剥きはじめた。傍には^{ささ}笹^{ささ}ばかり残った食べ荒しの^{すし}鮓^{すし}

の皿や^{から}空^{から}になった^{どんぶり}丼^{どんぶり}のようなものが^{ほう}投^{ほう}り出されてあった。

奥ではもう湯灌もすんで、仏の前にはいろいろの物が形のごとく飾られ、香の匂いが台所までも通つて来た。座敷の話し声^{しず}が鎮^{しず}まったと思うと、時々^{りん}鈴^{りん}の音などが聞えて来た。

「お婆さんたちは何にもしないで、病人の傍にめそめそ泣いてればいいと思つて。それは病人だつて、大切にしなければならぬけれど、そのために看護婦がつけてあるんじやないか。病院だつて、叔母さんだけが患者じゃないんだわ、お婆さんは^{ほんとう}真実^{ほんとう}に勝手が強いんだよ。」

「なにかと言つたつて、お此さんは^{しあわせ}幸福^{しあわせ}せえ。田舎じゃどうして、あんな手当ては出来るもんじやない。」母親も言つた。

「どういふものでしょうかね、^{あした}明日^{とむらい}の葬式^{あした}に小崎さんはおいでなさるでしょうね。」

丸山の^{あるじ}主^{あるじ}が、何やら長い帳面と筆とを持つて、白足袋を気にしながら、散らかつた台所口へ来てしゃがんだ。

「そうでござんすね。」と、母親は^{しいたけ}椎^つ茸を井で湯に浸けていながら、思案ぶかい

^{めいろ}目色をした。

「^{あと}後を貰うものとすれば、やっぱりお寺まで行くべきものでしょうかね、弟もまだ四十にや二、三年間^まのある体だもんですからね、これぎり貰わないっていうわけにも行きませんか知らんて。」

「それアそれどころじゃない。」

「それとも、田舎から^{しゅうとめ}姑も来ているものですから、お^{とむらい}葬式の時だけは遠慮すべきものでしょうか。」

「あらかじめ再婚を発表するようでもあまり感服しないでね。」丸山はこういつて、母親とお庄の顔を見比べた。

「それでお庄ちゃんは^{こうろも}香炉持ち、正ちゃんがお^{いはい}位牌、それアようござんすね。」

「まアそういった順ですかね。」

葬儀社が来たとか言つて、丸山は奥へ呼び込まれて行つた。

叔父はぼんやりしたような顔をして、時々そこいらへ姿を現わした。

「電報はもう届いていますらね。」と叔母の母親も、田舎の^{せがれ}伴夫婦の出て来るか来ぬかを気にしては、訊いていた。

この晩、お庄は^{ぼうず}経を^{ひま}読んでいる法師の傍へ来て坐る隙もなかつた。座敷の方が散らかつて来ると、丸山の^{かみ}内儀さんと一緒に、時々そこらを取り片着けて歩いた。そしてまた新しく酒や食べ物を持ち運んだ。

^ふ夜が更けてから、母親は昼間しかけておいた、お庄の^{じゅばん}襦袢などを、茶の間の隅の方で、また縫いにかかった。

「私はそれじゃ、御免 ^{こうむ} 蒙 ^{つて} 少し横にならしておもらい申しますわね。」

叔母の母親は、ひとしきり仏の前へ行って来ると、^は 脹 ^{ただ} 爛 ^{まぶち} れたような目縁を赤くして、茶の室 ^ま の方へ入って来た。そして母親と一緒に茶を飲んだり、煮物 ^{つま} を摘 ^{つま} んだりしていた。

「さあさあ明日もあるもんだて、一ト休みお休みなすつて……。」と、母親も眠い目をしながら、四畳半の方から ^{かいま} 掻 ^か 捲 ^ま きや蒲団を持ち出して来てやった。

静かになった座敷の方からは碁石の音などが響いて来た。

五十

「さあ皆さん打 ^ぶ っつけてしまいますよ。」葬儀屋の若いものと世話役の安公とが、大声に触れ立てると、^{みんな} 衆 ^は ぞろぞろと棺の側へ寄って行った。

細長い棺の中には、^{きれ} 布 ^{かぶ} の茶袋が一杯詰められてあった。冠 ^{もの} り物 ^{わらじ} や、草鞋のよ
うな物がその端の方から見えた。生前にいろいろの着物を縫って着せるのが楽しみであった人形を入れてやろうかやるまいかということについて、女の連中がまた ^{もんちやく} 捫 ^着 着
していた。

「入れないそうです。」と、誰やらが大分経ってから声かけた。

^{みんな} 衆 ^が 笑い出した。

「残しておいても何だか気味がわるいようですから入れて下さい。」とお庄は言ったが、母親は惜しがった。

^{わし} 私 ^{あれ} が 娘 の片身に田舎へ連れて帰らしておもらい申しますわね。」と、姑も言い出

した。安公がでこぼこの棺のなかを均^{なら}しながら、ぐいぐい^お押しつけると、「おい来た
よう。」と蓋^{ふた}がやがてぴたりと^{おろ}卸された。白^{しろ}襟^{えり}に淡色の紋附を着た姑は、その
側に立って泣いていた。母親も涙を拭きながら、口のなかにお題目を唱えていた。

田舎から来た人たちも、皆な着替えをすまして、そこらに^{うろつ}彷徨^{わづら}っていた。

お庄は今朝から、今日の着物のことで気が浮わついていた。昨日の昼過ぎにやつと注文した紋附が、一時出棺の間にあいそうにもなかった。

「やつぱりお此さんのをお前のに直した方が早手廻しだったかな。」今朝の九時ごろまでかかって、やつと家で縫えるようなものを縫いあげた母親は、そんな物を積み重ね

た、茶^まの室の隅の方で、お庄とひそひそ話し合っていた。田舎から出て来た叔母の弟嫁が良人と一緒に入って来た。そうして鞆からそこに出しておいた着物の包みをほどこきながら、良人の羽織や^{はかま}袴^わを取り別けて、着替えをさせに取りかかった。顔の綺麗なそ

の良人は、ごりごりした帯や袴の紐に金鎖を^{から}絡^{から}ませながら、ぬツとした顔をして出て

行った。嫁はそれから隅の方で、^{うしろむ}背後^{うしろ}向きになって自分の支度に取りかかろうとした。

「どうも濟んません、遅くなつて……。」お冬という叔母やお庄の結いつけの髪結が、ごたくさのなかへ、おずおず入つて来た。

「さあ、あなたからお結いなすつて……^後はお婆さんにお庄に私くらいなもので……。」

「そうですか。じゃお先へ御免蒙つて……東京でもやつぱり島田崩しに結いますかね。」と、嫁はそこへこてこて取り出した着替えをそつくり片寄せておいて、明るい

方へ出て来て坐つた。姑も側へやつて来て、嫁の着物の^{えりいと}衿^{えり}糸^{いと}を締めなどした。お庄

はそこへ鏡台や櫛^{くし}道具を持ち運んで来た。

「東京じゃもう、大抵毛捲きなんですがね。どうでしょうか。」髪結は油でごちごちした田舎の人の髪を、気味わるそうにほどいて梳^すきはじめた。

お庄も母親も、取り外したその髪^{かみ}の道具に側から目をつけていた。

とむらい
葬式にたつ人や、人夫に食べさすものを拵えている台所の方を、母親はその隙にまた見に行った。

「皆さんも、今のうち何か食べておおきなすつて……。」母親はそこらを片寄せて、ちやぶだい
餉台の上へ食べ物を持ち運んだ。

お庄は食べる気もしなかった。

「あの人たちは、あれでなかなか金^{かね}目のものを挿していますよ。」

「何しろある身^{しん}上^{しょう}だでね。」

お庄は隙になった茶^まの室で、今やつと裏口から届けて来た、着物の包みをほどきながら、母親と額^{あつ}を鳩めて話し合った。包みのなかには、正雄に着せる紋附や袴も入って

いた。二人は気忙しそうに、仕着^{しつ}け糸をりはじめた。母親はその中で、紋を一つ一つ

すか
透しては見ていた。

長く田舎に蟄居^{ひっこ}んでいる父親に物を亡^なくされた愚痴が、また言い出された。

五十一

「……後をお貰いなさればと言つても、私はまたちよくちよく寄せておもらい申します

わね。」と、^{しゅうとめ} 姑 ^{いとまご} が皆に 暇 乞 いして帰ってしまったてからは、叔父の家も急に

寂しくなった。弟夫婦は、^{とむらい} 葬 式 がすむと、じきに立って行った。

それまでに、姑は片見分けに自分の持つて帰るようなものを、母親と一緒に、すっかり
り箆筒のなかから^え 拭り分けた。中には叔母が田舎にいた時分から離さなかつた^{あたま} 頭 髪 の
ものなどもあつた。姑は自分がそれを拵えてやたころのことを言い出して、三十やそこ
いらで死んでしまった娘の不幸をまた^{こぼ} 零 しはじめた。

そんな物を拭り分けるに、二人は毎日毎日暇を^{つぶ} 潰 した。出して見てはしまつたり、
やつて見てはまた惜しくなつたりした。

「欲しいと言うものは何でも持つて行かした方がいい。姉さまやお庄には、どうせまた
拵えるで……。」と、叔父は蔭で母親をたしなめた。

姑はお庄に案内してもらつて、久しぶりで浅草や増上寺を見てあるいた。芝居や寄席
へも入つた。姑はそのたんびに、何かしら死んだ娘の持ちものを一つや二つは体に着け
て出ることにはしていたが、お庄も叔母の帯などを締めて、いつもめかしこんで出て行つ
た。四畳半にはまだ白い^{いはい} 位 牌 が飾つてあつた。姑は外から帰つて来ると、その側へ寄
つて、線香を立てたり鈴を鳴らしたりした。

^{あらぼとけ} 「新 仏 さまにまた線香が絶えておりましたに。」と言つて、姑は^{よそゆ} 余所行きのまま
で、茶の室^まへ来て坐つた。

「へ、そうでござんしたかね。」と、母親は^{こないだ} 此 間 中の疲れが出て、肩や腰が痛い

言つて、座敷の隅の方に蒲団を延べて^{あんま} 按 摩 に療治をさせながら、いい心持に寝入つて
いた。

叔父は明後日の初七日のことで、宵から丸山へ相談に行っていた。

「ああ、お蔭さまで、私もいい気保養をさしてもらいました。」と、姑は誰もいない部屋や、火の消えている火鉢のなかを寂しそうに眺めた。

二、三日めつきり涼^{すずけ}気が立って来たので、姑は単衣^{ひとえ}の上に娘の紋附の羽織などを着込んでいた。お庄も中形のうえに縞^{しま}の羽織を着て、白粉を塗った顔を撫^なでながら傍へ来て坐った。そして母親に小言をいいながら火を興しはじめた。

「たまに私^{わし}が按摩でも取れば、じきに口小言だでね。」と、母親は座敷の方から寝ぼけたような声で言った。

「自分は遊んであるいて、そう親ばかりいじめるもんじゃないよ。」

「またあんな解らないことを言うんだよ。いくら遊んであるいたって、帰ってお茶一つ飲まずにいられますかね。そのための留守じゃありませんか。」お庄もやり返した。

「まあいいわね。」と、姑は優しい調子で宥^{なだ}めた。「姉さまもお疲れなさんしたろうに、私でも帰ったら、またゆつくらと骨休めをなすって……。」

「そんなことを言や、病院で長いあいだ、夜の目も合わさずに看護したものはどうするでしょう。」お庄はまた母親をきめつけた。勝手の強い姑の伴^{とも}ばかりして、毎日行かせられるのを、お庄も飽き飽きしていた。口で言うほどでもない姑は、外へ出れば出た

で^{なまぐさ}腥^{なまぐさ}いものにも箸を着けていた。「気晴しに、御酒を一つ。」と言って

たべものや食物屋^{たべものや}で飯を食うとき銚子^{ちょうし}を^{あつら}誂^{あつら}えてお庄にも注いでくれた。

「自分が出不精のくせに、人が出ると機嫌^{ほんとう}がわるいのだよ。真実に妙な人。」お庄

は^{しま}終^{しま}いに笑った。

湯が沸く時分に姑は着替えをすましてまたそこへ坐った。母親も側へ来て、お愛想を

した。そうしてからまた、明後日のお寺詣りに着て行く、自分の襦袢の襟をつけにかかった。

五十二

姑が帰ってから二、三日の間、お庄母子は家の片着けにかかっていた。箆笥のひきだしぬ抽斗が残らず引き出され、錠おろの卸された用心籠や風を入れたことのないような行李が、押入れの奥から引張り出された。そんな物のなかから、むしばむしばんだ古いにしきえよみほん錦絵が出たり、妙な読本が現われたりした。母親は叔母が嫁入り当時の結納の目録しみのような汚点だらけの紙などを拡げて眺めていた。

「お此さんも、こんなにして嫁入りしたこともあつたにな。十年と一緒にいなかった。」

お庄は袋のなかから、こまこました叔母の細工物を取り出して見ていた。ちりめんちりめんの縮緬のこぎれものずき小片で叔母が好奇とうがらしに拵えた、蕃椒ほどの大きさの比翼の枕などがあつた。

それを見ても叔母の手頭てさきの器用なことが解つた。体の頑固な割りに、こうした女らしい優しい心をもっていたことが、荒く育つたお庄にもうらやましかつた。叔母の側にくつついていて、もう少し何かの手業てわざを教わっておくのだったとも考えた。

「叔母さんのすることは、少し厭味よ。」お庄はこ捻ねくつていた枕をまた袋の底へ押し込んだ。よく四畳半で端唄はうた うたを謳つていた叔母の艶つやつぽいような声が思い出され

た。

おつか
「阿母さんもそんなものを持って来て。」

お庄も目録を取り上げて畳の上に拡げた。

「阿母さんだつて、木曾へ行った時分はねえ。」と、母親は木曾^{きそ}の大百姓の家へ馬に乗って嫁に行ったことを思い出していた。

「あの家に辛抱しておりさえすれば、今になってまごつくようなことはなかつたに。」

「どうして辛抱しなかつたの。」

「どうしてつて、家の遠いのも厭だつたし、姑という人が、物がたくさんあり余る癖に
けち
吝くさくて、三年いても前垂一つ私の物と言つて拵えてくれたことせえなかつた。田

地もあつたが、種馬を何十匹となく飼つておいて、それから仔馬^{こうま}を取つて、馬市へも

出せば伯樂^{ばくろう}が買いにも来る——。」と、母親は重い口で、大構えなその暗い家の様子
子を話した。お庄は、そんなところにもいたのかと思つて、口に泡をためている母親の

みつ
顔を瞞めた。

「その家じゃ機^{はた}もどンドン織るし、飯田^{いいだ}あたりから反物を売りに来れば、小姑たち

にそれを買つて着せもしたが、私^{わし}には一枚だつて拵えてくれやしない。万事がそれだ

で私も欲しくはなかつたけれど、いい気持はしなかつた。それで初産^{ういざん}の時、駕籠で
かご
家へ帰つたきり行かずにしまつたというわけせえ。」

「その人はどんな人さ。」

「どんなつて、馬飼うような人だで、それはどうせ粗^{あら}いものせえ。それでも気は優し

い人だつた。今じゃ何でもよつぽどの身^{しんしょう}上^{じょう}を作つたろうえ。私はその時分は、身

上のことなぞ考えてもいなかったで、お産のあと子供が死んでから、どう言われても帰る気になれなかった。それでも、その子が育ってでもいれば、また帰る気になったかも知れないけれど。」

「そうすれば、私たちだつていかなかったかも知れないわ。」

「そうせえ。」と、母親は ^{ゆる}弛んだような口元に ^え笑みを浮かべながら、娘の顔を眺めた。

田舎の思い出 ^{ばなし}咄がいろいろ出た。お庄はべつたり体を崩して、いつまでも聴き

^{ふけ}耽っていた。するうちに疲れたような ^{あたま}頭 ^{だる}脳が ^な懈くなつて来た。

「叔父さんはまた ^{かみ}内儀さんを貰うでしょうか。」お庄は訊き出した。

「さあ、どうするだかね。先がまだ長いでね。」

お庄は ^う倦み疲れたような心持で、壁に ^{もた}凭かかつて、そこに取り散らかつたものを、うつとりと眺めていた。

五十三

四十九日の ^{むしもの}蒸物を、幸さんや安公に配ってもらってから、その ^{あくるひ}翌日母親とお

庄とは、^{やなか}谷中へ墓詣りに行つた。その日はおもに女連であつた。公使館の通訳の細君

に、^{かみ}丸山の内儀さんたちが家へ集まつて、それから一緒に出かけた。子供がよく遊びに

来るので、近しくしていた向うのある ^{おおだな}大店の ^{かみ}通い番頭の内儀さんも、その子供をつ

れてやつて来た。この内儀さんは、叔母が存命中ちよくちよく芝居を見に行つた。入院

中も時々来て見舞つてくれた。その子供は見て来た芝居の真似をして ^{みんな}衆を笑わせる

ほど、ませて来た。お庄は子を膝に抱いて ^{くるま} 俥 に乗った。

寺で ^{ぼうず} 法師がお経を読んでいる間も、一回はにやけた風をさせたその子供の仕草で始終笑わされ通しであった。お庄も母親もどこかに叔母の ^{のこ} 遺して行った物を体につけていた。お庄は小紋の紋附に、帯を締めて、指環で目立つ大きい手を気にしながら、
とうば ^{みんな} 塔婆を持って 衆 と一緒に墓場の方へ行つた。

「そんなに ^{なす} 塗くつてどうするつもりだ。まるで粉桶から飛び出したようだ。」と、出がけに叔父はお庄の顔を見て笑つたが、お庄は欲にかかつてやつぱり塗り立てて出た。

帰りに ^{みんな} 衆 は上野をぶらぶらした。池には蓮がすっかり枯れて、舟で ^{どろぶか} 泥深い根を掘り返している男などがあつた。森もやや黄ばみかけて、^{ひかけ} 日射が ^{まぶ} 目眩しいくらいであつた。学生風の通訳の細君が、そこから一ト足先に別れて行つてから、一同は広小路の方へ出て、それから ^{ばいげつ} 梅月で昼飯を食べた。大阪生れの丸山の内儀さんは、お庄に
そう言つて酒を一銚子誂えて、^{てんぷら} 天麩羅に箸をつけながら、^{ちよく} 猪口のやり取りをした。

^{しみ} 斑点の多い母親の ^{まぶち} 目縁が、少し ^{くろあか} 黝赭 くなつて来た時分に、お庄の顔もほんのりと染まつて来た。色の浅黒い、^や 痩せぎすな向うの内儀さんは、膝に広げた手拭の上で、飯を食べはじめた。

そこを出たのは、もう日の暮れ方であつた。

叔父がまた新たに成り立とうとしている会社のことで、家で仲間と相談会を開いていた。叔父は真面目な他の会社などへ勤めて、^{まだる} 間弛つこい事務など執つていられなかつた。子供に続いて、妻が ^{ながわずら} 長患いのあげくに死んでから、家というものを、あまり

考えなくなつた。それだけ心が安易にもなつていたし、^{ゆる}緩んでもいた。

しばらく絶えていた烏森の方へ、叔父はまたちよくちよく足を運び始めた。家にいる時は、寝ても起きても新しく企てられた会社のことを考えていた。

「どんな向きの会社だか知らないけれど、そんなことをやりはねて、また^{しくじ}失敗るようなことがあつては困るでね。それよりかやつぱり口を捜して、月給を取つていた方が気楽のように思うがね。」母親は時々弟に頼むように意見をした。これという資本もない考案中の会社が、どうせいかさまなものだということが、母親の^{あたま}頭脳にも不安に思われた。

「まあ黙つて見ておいでなさい。私も今となつて、^{まず}不味い弁当飯も食つていられないで。」

石川島へ出ている時分セメントの取引きをして親しくなつた男や、金貸しや地所売買の周旋屋をしている丸山などと一緒に叔父はその会社を盛り立てようとしていた。中には古い友達の中学の先生もあつた。

金六町の方に設けられたその事務所へ、やがて一家が引き移ることになつた。そこは灰問屋と舟宿との間に建つた^{かし}河岸に近いところであつた。

田舎から出た当時から、方々持ち廻つたお庄親子の古行李が、叔父の荷物に紛れて、またそこの二階へ積み込まれることになつた。

五十四

この家の格子先へ、叔父の能筆で書いた看板が^か掲げられたり、事務員募集の札が張られたりした。毎日寄つて来る人たちは、店にならべた椅子^{テーブル}卓子によつて、趣意書や規則書のような刷り物の原稿を書いたり、基金や会員募集の方法を講じたりした。基金

はまだ刷り物に書き入れてある額に達していなかった。会社のする仕事は、無尽のような性質を帯びた手軽な一種の相互保険であった。

二、三人の募集員が、汚い折り鞆を抱えて、時々格子戸を^{ではい}出入りした。昼になると、お庄はよく河岸の^{かし}鰻^{うなぎや}屋^{あつら}へ、井を^{あつら}誂^えにやられた。

ここに寝泊りしている、若い事務員がただ独り、新しい帳簿のならんだデスクの前に坐つて、退屈そうに、外を眺めたり、新聞を見たりしていた。そして時々思い出したように、会員名簿のようなものを繰つたり、^{といあわせ}照^{あわせ}会^{あわせ}の端書に返辞を書いたり、会費の集まり高を^{そろばん}算^{はじ}盤^{はじ}で弾^{はじ}いたりしていた。

事務員が、日当りの悪い三畳の^ま室^まに、薄い蒲団に^{くる}包^{くる}まって、まだ寝ているうちに、叔父は朝飯の箸も取らずに、蒼い顔をして出かけて行つた。

長いあいだ少し積んで来た貯金^さを^さ提^さげて仲間に加わつて来た中学の教師が、二階で^{ゆうべ}昨^{ゆうべ}夜^{ゆうべ}遅^{ゆうべ}く^{ゆうべ}まで、叔父と何やら争論めいた口を利き合つていたことが、お庄^{おやこ}母^{おやこ}子^{おやこ}も下で聞いていて気にかかった。後では一緒に碁など打つて、^{いつも}平^{いつも}常^{いつも}の^{いつも}よ^{いつも}う^{いつも}な^{いつも}調^{いつも}子^{いつも}で別れたが、叔父の顔色はよくなかつた。二人は事務員に帳簿を持つてこさして、長いあいだ細かいことを話し合つていた。

「あの人は、もう手を^ひ退^ひきたいとでも言うだか。」

ランプの下で、^{しろたび}白^{つづ}足^{つづ}袋^{つづ}を^{つづ}綴^{つづ}く^{つづ}つ^{つづ}て^{つづ}いた母親は、手の届かぬ^{せなか}背^{かゆ}の^{かゆ}痒^{かゆ}い^{かゆ}ところ^{かゆ}を^{かゆ}揺^{かゆ}り^{かゆ}ながら訊いた。

叔父はお庄の退いた火鉢の前の蒲団に坐つて、^{たばこ}菫^{ふか}を^{ふか}喫^{ふか}した。

「なあにそうでもない。あの男にとっては、大切な金だでやっぱり氣を揉むだ。」

「金を返せという話にでも来たろう。」

「それほど大した金でもない。」叔父はあくびをしながら言っていた。

お庄は剛愎なような叔父の顔を、傍からまじまじ見ていた。この会社の崩れかかっていることは、あれほど毎日集まって来た人が、にわかには足踏みをしなくなったことだけでも解ると思つた。頸筋や肩のあたりが、叔母のいたころから比べると、著しい痩せが目立って、影が薄いように思えた。

叔父が出て行くと、やがて母子は差し向いに朝飯の膳に向つた。

「昨夜の人に返す金の工面にでも行つたろうえ。」

二人は、また叔父の噂をしはじめた。叔父が遊んでいる女に費う金だけでも、このごろの収入では追つ着きそうなこともなかつた。応募者が、予期した十分の一もなかつたことが、女連にもだんだん呑み込めて来た。

事務員が、寝飽きたような腫れぼつたい顔をして、暗い三畳の開き戸を開けて出て来た。そして目眩しそうな目を擦つた。綻びた袖口からは綿が喰み出し、シャツの襟も垢や脂で黒く染まっていた。お庄はくすくす笑い出した。この男がここへ来てから、もう三月にもなつた。

「もう何時です。」事務員は目をつて時計を眺めた。

それから水口の方へ出て顔を洗うと、間もなく膳の側へ寄つて来た。紫色に爛れたような面皰が汚らしかつた。

飯がすむと、お庄は二階へあがって叔父の寝所^{ねどこ}を片着けにかかった。冬の薄日が部屋中^{ゆ わた}に行き遍^{わた}っていた。お庄は蒲団^{ねまき}や寝衣^{ねまき}を持ち出して手擦り^{てす}にかけながら、水に影の浸った灰問屋の庫^{くら}が並んだ向う河岸^{がし}をぼんやり眺めていた。

五十五

向う河岸は静かであった。倉庫で働いている男や、黙って荷積みをしている人夫の姿が、時々お庄の目に侘^{わび}しく映った。碧^{あおぐろ}黒くおどんだ水には白い建物の影が浸つて、荷船^{いくつ}が幾個^{さんばしぎわ}か棧橋^{つな}際に繫^{つな}がれてあった。お庄はもう暮が近いと思った。

部屋を掃除してから、雑巾バケツに水を張っていると店頭^{みせさき}で事務員と押し問答している、聞きなれぬ声が耳についた。会員から、会費の払い戻し請求を受けているのだからということがすぐに解った。台所^まを働いている母親も、茶の室^{きづか}へ出て、気遣^まわしそうに店の方へ耳を引き立てていた。勤め人とも商人ともつかぬようなその男は、社主に逢いたいと言って、物慣れぬ事務員を談じつけているらしかった。
「いやだいやだ、叔父さんは……。」と、お庄はこの前のことを思い出した。

「だって叔父さんが一人で引き被^{かぶ}るわけのものでもあるまいがね。」と、母親も台所の隅^つに突っ立って溜息^つを吐いていた。

お庄は、この家をいつ引き払うことになるか解らないと思った。拭き掃除をする気にもなれなかった。そしてバケツをそこへ投^{ほう}り出したまま、うんざりしていた。

叔父は出て行つたきり、二、三日家へ寄りつきもしなかった。

その間に中学の先生だという例の男が、二度も来て店へ入り込んでいた。お庄は色の

あ
褪せたインバネスに、硬い中折を冠ったその姿を見ると、またかと思つて奥へ引つ込ん

で行つた。火の気の少い^{みせさき}店頭で、事務員はこの男と日が暮れるまで向合つてい

た。男は近所の蕎麦屋^{そばや}へ行つて、空いた腹^すを満たして来ると、赤い顔をしてまたやつて来た。

「まだお帰りになりませんか。どこか心当りはありますまいかね。」男は楊枝^{ようじ}で口を

弄^{せせ}りながら、奥を覗^{のぞ}き込んで、晩飯を食べている三人の方へ声をかけた。

「ああして来て待つているのに、あんまりうつちやり放しておいてもね。」とお庄は晩飯をすますと、顔を直したり、着物を着替えたりして、仕立て直しの叔母の黒いコートを着込んで、叔父を捜しに出かけた。

しばらく出なかつた間に、町はそろそろ暮の景気がついていた。早手廻しに笹の立つた通りなどもあつた。賃餅の張り札や、カンテラの油煙を立てて乾鮭^{からざけ}を商っている大道店などが目についた。

やがて湯島の伯母の家の路次口に入つて行つたのが、九時近くであつた。

「私のところへは、小崎はまだ葬式^{とむらい}の挨拶にも廻つて来やしないぜ。」と、伯母は二階から降りて来て、火鉢の前に坐ると、めかし込んだお庄の様子をじろじろ眺めた。

「何だか会社を始めるとか、始めたとかいうことを聞いたが、そんな投機^{やま}をやつてまた

しくじ
失敗^{しくじ}らなけアいいが。」伯母は苦い顔をしてこうも言つた。

二階で糺の友達が多勢寄つて花を引いていた。お庄はしばらく、そんな音を聞いたことがなかつた。

「お前いくらか懐にあるだかい。」花には目のない伯母がにやにや笑いながら、段梯子を上つて行くお庄に言いかけた。

その晩おそくまで、お庄はそこで花を引いていた。取られ分を取り ^{かえ}復 ^{あせ}そうと焦心つ
ているうちに、夜が更けて来た。連中には古くから ^{なじ}昵 ^みみの男もあり、もう髭を生やし
て細君を持っているらしい顔もあつた。お庄はそんな中に交つて ^{はしや}燥 ^いだ調子で
^{しゃべ}弁 ^つたり笑つたりした。

^{あした}明日 ^{ゆうべ}昼ごろに、お庄は金六町の家へ帰つて来ると、昨 ^ひ夜 ^ひ帰つた叔父が二階にまだ
寝ていた。三和土に脱いである見なれぬ女の下駄がお庄の目を惹いた。
「……芸者だか何だか……。」と、母親は笑つていた。

五十六

^{おやこ}お庄らが ^{おやこ}母子の仕事として、ひっそりした下宿を出そうと思つたのは、この事
務所を畳んでから、一家が丸山の隣の小さい借家へ ^{ひっそく}逼 ^さ塞 ^{して}からであつた。それま
でに会社の方はパタパタになつていた。欠損を補うべき金や、下宿の ^{もと}資本 ^を拵 ^えると言
つて、叔父は暮に田舎へ逃げ出したきり、いつまでも帰つて来なかつた。
^{かし}河岸の家で、叔父が一、二度二階へ連れ込んで来た女が、丸山の田舎の ^{あによめ}嫂 ^の
^{めい}姪 ^{である}ことが、お庄母子にじきに解つた。その女はお照と言つて年はお庄からやつ
と一つ上の十九であつたが、もう処女ではなかつた。東京へ出るまでには ^き思 ^断つたこ
ともして来た。

丸山の隣へ引つ越して行つてから、この女とお庄はじきに ^{なか}近 ^い間 ^{にな}つた。女は

痩せぎすなような体つきで、始終黙つてはずかしげにしていたが、表に見えるほど

すなお

柔順ではなかつた。お庄にはどこか調子はずれのところがあるようにも思えた。叔父

は丸山へ行つて碁を打っているうちに、この女と親しくなつた。女は碁もかなり打て

たが、字なぞも^{うま}巧かつた。

一ト晩中、女は^{あんか}安火に当つて、お庄母子に自分のして来たことを話して聞かした。

田舎で親々が長いあいだ取り決めてあつた^{いいなずけ}許^{きら}婚の人を嫌つて北国の学校へ入っ

ている男を慕つて行つた時のことなどが詳しく話された。女は暑中休暇に帰省している

親類先のその男の家へ、養蚕の手助けに行っているうちに、男と^{あいし}相識るようになつ

た。

男が学校へ帰つて行つてから間もなく、女は目ぼしい衣類や持物を詰め込んだ^{いくつ}幾個かの行李をそつと停車場まで持ち出して、独りで長い旅に上つた。

「その時のことは、今から^{おも}想うとまったく小説のようよ。」と、女は汽車のない越後

から暗い森やおそろしい河ばかりの越中路を通るとき、男に跡を^つ尾けられたことや脅迫されたことなどを話した。

制裁の^{きび}厳しい寄宿に寝泊りしていた男は、一、二度女の足を止めている宿屋へ来て、自分の事情を話して帰つたきり、幾度訪ねても逢わなかつた。手紙を出しても来なかつた。

三月ほど経つて、兄が女を連れ戻しに行つたころには、女は金も持物もなくして、

みぞれ

霰の降る北国の寒空に、着るものもなく、下宿屋に下女働きをしていた。田舎へ

引き戻されてからも、町に落ち着いていることも出来なかつた。許婚先へ対しても、家にいるのがきまり悪かつた。

「どうせ私は田舎などへ帰りやしませんよ。嫁にだつて行きやしません。家で怒つてかまわなくなつたつて何でもありやしない。金沢で下宿の^{はばかり} 厠の掃除までしたことを思や、自分一人ぐらい何をしたつて食べて行かれますよ。」女は^{ふてくさ} 太腐れのような口を利いた。

「一人でやつて行くなら、暮会所でも出したらどうだ。」叔父はこの女に時々そんな心持も洩らした。

^{あいつ} 「彼奴も変だが、小崎さんも少しひどいや。」と丸山は、叔父の田舎へ行っている留守に、折々茶を呑みに来ては、お照の噂をして母親に厭味を言つた。

女はお庄の家へ来て、机に坐つて叔父へ長い手紙を書いた。手紙にはお庄に解らないようなむずかしいことが書いてあつた。女は小説でも読むような気取りで、母子にその文句を読んで聞かせた。お庄は^{きちがい} 狂氣じみたその顔を^{みつ} 瞞めながら笑い出した。

叔父から返事が来た。女は手紙の字が巧いと言つて、独りで感心していた。

^{ほんとう} 「あなたの叔父さんは 真実 に深切よ。」

「深切だか何だか知らないけれど、家の叔父さんはもうお爺さんよ。」

「お爺さんだつていいじゃないの。一生一つにいやしまいし……。」

五十七

繁三をつれて、三月の東京座を見に行つた叔父が、がちがち^{ふる} 顫えて帰つて来た。顔

^{まつさお} が 真青 になつて、唇に血の^け 気がなかつた。

叔父は田舎から帰つてからも、家に閉じ^{こも} 籠つて考えてばかりいたが、気が^{つま} 塞つて来ると、時々思い出したように、誰かを引つ張り出して芝居や寄席へ行つた。その日は

ちらちらと雪が降っていた。芝居のなかも暗く時雨しぐらんだようで、底冷えが強く、蒲団かを被けていても、膝ひざ頭がしらが寒かった。叔父は背筋へ水をかけられるようで、永く見
ていられなかった。

日の暮れ方に、俵で金助町の新しい家へ帰って来ると、襦どてら袍を引っかけ、火鉢の
傍に縮まっていた。

「どうしたというんだろう。」と、母親は会社ごたごたの紛擾から引き続いて、心配事ばかり
多い弟の体を気遣った。

「なあに感冒だ。へブリンの一服も飲めばなお癒るで。」叔父はそう言いながら、繁三を
相手に酒を飲んで芝居の話などしていた。

お照がしばらくここの家に隠れていた。あつちの家を引き払うころから、お照のこ
とで、叔父と丸山とは互いに気持を悪くしていたが、ここへ引越してからも、あまり
ゆきき
往来をしなかった。丸山が女を捜しに来ると、女は二階へあがって客の部屋に隠れて
いた。丸山はしま終いに女をかまいつけなくなった。

病院以来懇意になった糺の友達いしやの医師が、その晩もぶらりと遊びに来て、叔父と碁
を打ちはじめた。叔父は一勝負やつと済ますと、碁盤を押しやつて顔をしか顰めた。石持
っている間も時々ふる顫えていた。

「おかしいな。」と、いしや医師は繁三に糺の聴診器を取り寄せさして、叔父の体を見た。

医師は骨立った叔父の胸をそつちこつち当って見ているうちに、急に首をひね捻って肺
のところをとんとんと強くたた敲きはじめた。

「どうも少しおかしい。」医師は側を離れると、溜息を吐いて、急いで縁側へ手を洗いに行った。

「肺病にでもなっているのじゃないらか。」母親は傍から心配そうに言った。お照もお庄も、黙って叔父の顔を眺めていた。

「私の肺は、人に ^{すぐ}優れて丈夫だと言われたもんだが……。」

と、叔父は肩を入れながら ^{つぶや}呟いた。

医師も繁三も、じきに帰った。

「とにかく院長に一度診ておもらいなさい。うつちやつておいちやいけない。」^{いしや}医師は繰り返しそう言って出て行行った。

酔いのさめた叔父は、また酒でも飲まずにはいられなかった。

「そんなに酒を飲んでもいいらか。あの ^{いしや}医師がああ言うくらいだで、どこかよい医師に診てもらうまで、むやみなことをしない方がいい。」

「あの竹の子医師に何が解るもんで……。」

叔父はお照に ^{しゃく}酌をしいしい自分にも飲んだ。

湯島の伯母に引っ張り出されて、叔父はその ^{あくるひ}翌日駿河台の病院へ診てもらいに行った。

「結核も結核、ひどい結核だと言うでないかい。」と、伯母はお庄と母親が朝飯を食べているところへ飛び込んで来て顔を顰めた。

二人はびっくりして、箸を休めた。

^{ゆうべ}「昨夜のxxさんの話じゃ、片肺まるでないというこんだぞえ。」

叔父はまだ奥座敷に寝ていた。昨 ^{ゆうべ}夜二人でおそくまで起きていたらしいお照も、まだ目が覚めなかった。

叔父は院長からはつきりした診断を下されるのを怖れて、行くのを渋くった。
「やっぱり肺だということだぞえ。」と、昼ごろに叔父をつれて帰って来た伯母は、蔭
で母親に告げた。

治療に望みのないことが、診察をおわった叔父が帯を締めている背^{うしろ}後から、大きい
手と首を振って見せた院長の様子でも知れていた。

五十八

「叔父さんが帰って来たら、僕からよく話をする。」二階の部屋を借りて、ここから一
ツ橋の商業学校へ通っている磯^{いその}野という群馬県産れの書生が、薬師の縁日に手を引き
合って通りを歩いているときお庄に話しかけた。磯野は糺の友人の知合いで、糺とも知
っていた。そんな関係からこの二階を借りることになった。家は肥料問屋で磯野はそ
の時分からいろいろの遊び友達を持っていた。酒も飲んだり唄^{うた}も謳った。叔父とも碁
を打つたり、花を引いたりした。深川へ荷がつくと、母親が托^{あず}けてよこした着物や、
むぎこがし
麦粉菓子のようなものが届いて、着物のなかから可愛い末の子に心づけてくれた小遣
い銭などが出来たが、家をやっている兄の方にはあまり信用がなかった。磯野は一、
二の官立学校の試験を、いつも失敗して、今通っている学校は、学課の程度が低く、卒
業生の成績や気受^{かんば}けも香しい方ではなかった。磯野はそこへ学籍を置きながら、月
々の学費を取り寄せていた。

叔父は四月の末ごろから海辺へ行っていた。前の会社の用事でもと行きつけた浦賀か
ら、三浦三崎の方へ廻って、そこで病を養っていた。田舎から取って来た金も、会社の
跡始末に消えてしまって、この家へ引き移って来た時も、かけてあった取り残しの無尽
せ
を安く競って落したくらいであったので、病気になってからも思うような保養も出来な

かつた。母親の内職に出さした素人下宿も間^ま数^{かず}が少く、まだ整つてもいなかつた。

「生^な身^まの体はいつどんなことがあるか知れないで、それで私^{わし}が言わないことじやなかつた。いい加減に締つておくだつたい。」と、母親は弟に^{うら}怨^{うら}みを言つた。

叔父は立つ間際まで、お照を傍から離さなかつた。寝^ね衣^{まき}に重ねた白地の単^{ひとえ}衣^えがじつとり^{ねあせ}儉^{ねあせ}汗^{あせ}に黄ばんで蒲団をまくと熱くさい息がむれているくらいであつたが、痩せ我慢の強いお照は平気で叔父のところへ寄つて行つた。一緒に食べ物に箸を突つ込んだり、一つ^{ゆのみ}湯^{ゆのみ}呑^{のみ}で茶を呑んだりした。

「厭ねお照さんは。あんな中へ入つて行くと、伝染しますよ。」と、お庄は蔭^{まゆ}で眉^{まゆ}をひそ^{ひそ}顰^{ひそ}めた。

「大丈夫よ。私の体には病気が移りやしませんよ。」と、お照は黄色い、かさかさした顔に寝白粉を塗つて、色^あの褪^あせた紡績織りの寝衣に、派手な仕^し扱^{ごき}などを締めながら、火鉢の傍に立て膝をして寝しなに^す蓆^すを喫つていた。

「移るものなら、もうとつくに移つていますよ。今から用心したつて追つつきやしな^{とんが}い。」お庄は尖^{とんが}つたようなその顔を、まじまじ眺めていた。

「めつたに移る案じはないけれどね。」と、母親も、傍で茶を呑みながら言つた。

「それに叔父さんのは咳^{せき}も痰^{たん}も出ないもんだで、まだそれほど悪いのじやないとも思うがな。」

「それがな悪いのですよ。」お庄は打ち消した。

「どうしてあんな病気が出たものかな。家にや肺病の筋はなかつたがな。」

「いいえお女郎から^{うつ}伝染るといいますよ。お女郎にや随分あるんですつて。」

酒や女に^{ふけ}耽つていた弟のだらしない生活が、母親の胸に^{おも}想い^{かえ}回された。

「あれで^ね臥つきでもしたらどうするだか。」

「いいですよ。叔父さんだつて可哀そうじゃありませんか。私きつと叔父さんを見^み達^{とど}

けてあげますよ。」お照は瘦せこけた手で、豆ランプに火を^つ点けると、やがてずるずるした風をして、段梯子を上つて行つた。

「田舎へ帰れアあれでもちゃんとした家の娘でいられるに。」母親は後で呟いた。

やけ^{やけ}自棄になつたようなこの女の心持が、母親には呑み込めなかつた。

五十九

しまだまげ ひらうち ^{いきれ}
島田 鬻に平打をさして、こてこて白粉や紅を塗つて、瘧氣のする人込みの

なかを歩いているお庄の ^{みだ}猥らなような顔が、明るいところへ出ると、^{はじ}羞らわしげに

あか^{あか}赧らんだ。薬師裏を脱けた広場には、もう夏菊の株などが拵げられてあつた。

帰りに暗い路次のなかの家へ入つて、^{ついたて}衝立の蔭で一緒に麦とろなどを喰べた。酒も取つて飲んだ。そこを出たとき、お庄は紅い顔をしていた。

おつか
「阿母さんも行くなら行つておいでなさいよ。たまにや外へも出て見るといいのよ。」お庄は家へ帰つて行くと、今やつと行水から上つたばかりの母親を促した。母親はにやにやした顔で二人を見迎えたが、女中と一緒に買物がてらお庄から金を渡されて出て行くまでには、大分暇がかかつた。

中江という医学生のところへよく遊びに来る、お増という女が二階から降りて来ると、二人のなかへ割り込んで、辻占入りの細かい塩煎餅を摘みながら、間借りをしている自分の宿やここへ出入りする男の品評などを始めた。この女はもう二十六、七であつた。縁づいていた田舎医師の家で不都合なことがあつて、子供のあるなかを暇を出されてから、東京へ来て長い間まごついていたことを、お庄も中江などから聞いて知っていた。「お前のような女には手切れの金より着物の方が身について安全だろう。」と言つて、その良人から拵えてもらつた支度が亡くなつた時分には、もういろいろの男を亭主に持つて来たことを、女の口からもたびたび聞かされた。女はしみじみした調子で亭主運の悪いことをよく零した。行き詰つて、田舎の医師の家へまた詫を入れたとき、しゅうとめが頑張つていて、近所に取つていた宿から幾度逢いに行つても逢うことが出来なかつた。女は夜更けてから梯子をさして、そつと二階の主人の部屋の戸をたたいたが、やはり入ることが出来ずに、外から悪体を吐いて帰つて来た。

「私あんなくやしかつたことはありやしませんよ。」と、女は目に涙をにじませて、自分と自分の興味に耽りながら話していた。

「まあ聞いて下さいよお庄ちゃん——。」と、女は今度の試験を、長く一緒にいる男がまた取り外してしまつたことを零しはじめた。

「あんなに私が一生懸命になつて、図書館に通わしてやつても、駄目なものはやはり駄目なんではないか。これからまた一年、毎日毎日お弁当を拵えてやらなけアならないのかと思うと、私うんざりしちまいますよ。」お増は磯野に莩を吸いつけてやりながら、哀れな声で言つた。

「今度私磯野さんに芝居を奢つて頂きましょう。ねえお庄ちゃんいいでしょう。」お

増は帰りがけに、甘い調子で磯野に強請^{ねだ}った。

「あの人は芝居がどのくらい好きだか——。」と、お庄は後で磯野に話した。

「芳村さんには煮豆ばかり食べさせておいて、暇さえあると自分は芝居へ行つて
の。」

「ふとすると家の中江に乗り換えようとしているんかも知れないね。若い人から絞ると
いう話もあるぜ。」と、磯野は笑った。

「それでもしなくちゃ、芝居道楽が出来ないでしょう。」

磯野がお庄の詰めてくれた弁当を持って、朝おそく、学校へ出て行つた。

お庄は磯野の出たあとの部屋を自身綺麗に取り片着けながら、磯野の蒲団のうえに坐
つて、時計のオルゴールを鳴らして見たりした。

お庄は机の抽斗^{ひきだし}を開けて見た。抽斗からは、コスメチックや香水のような物が出
た。写真や手紙なども出た。手紙のなかには磯野がよく行つたことのある小塚から来た
らしいのもあつた。お庄はそれを読みながら、劇^{はげ}しい耳鳴りを感じた。舌も乾くよう
であつた。

昼過ぎに、軽い夏の雨が降つて来た。お庄は着物を着替えて、蝙蝠傘^{こうもりがさ}を持って

学校まで出かけて行つた。そして路傍^{みちわき}の柳蔭にたたずんで、磯野の出て来るのを待
つていた。

六十

盆時分に問屋の決算をしに出て来て小網町の方に宿を取つていた兄が帰る時、磯野も
一緒に田舎へ行くことになつた。磯野が兄の取引先から二十円三十円と時借りをした
金の額の少くないことが、その時すっかり解つた。お庄のところへ来たてに磯野はそん
な金で、軟かい着物を拵えたり、持物を買つたりして景気づいていたが、湯島^{かいわい}界隈

の料理屋にもちよちかづきいちよいい 昵 近 の女があつた。お庄と一緒に歩いている時、磯野は
みち
途 で知つた女に逢うと、こつちから声をかけて、お庄をそつち退のけに、片蔭でひそひ
そ話をすることがたびたびあつた。

「あれには僕が少し義理の悪い借金もある。いつか芸者の祝儀を立て替えさしてそれツ
放しさ。」と、磯野は何か思い出したような顔をして、またお庄と一緒に歩いた。

磯野がいろいろの女を知っていることが、お庄にも解つて来た。

部屋で机のなかから写真を出して見ていると、磯野は手切れまで取られて別れた一年
前の女をまた憶い出した。そしてお庄の見ている傍で急に思い着いて手紙を書きはじめ
た。

「厭な人ね。」と、お庄は机の端にりょうひじ両 肱 をついて目をつけていたが、いきなり手を
伸ばして巻紙を引たくつ 褌 った。

「何大丈夫だよ。どうしているかちよつと訊いて見るだけだ。」磯野はお庄をなだ宥 めて
おいてまた手紙を書きはじめた。

半分ほど書くと、お庄はまたべつたり墨を塗つた。

女は手紙で呼び出されて、それから三度ばかり遊びに来た。二度目には自家で拵うちえた
紙入れなどをお庄へ土産みやげに持つて来てくれて、二階で二、三時間ばかり遊んで帰つて

行つた。女の父親は袋物の職人で、家は新右衛門町の裏うら店 にあつた。磯野の郷里の

町へ旅芸者に出ていた時分からの馴染なじみで、土地でしばらく一緒に暮したこともある。

女は亡くなつた磯野の父親の気に入りで、町でも評判のよい素人くさい芸者であつた。

磯野はその女を一、二度引つ張りまわすと、またふつつりと忘れてしまつた。

亡くなつた叔母の弟が田舎へ帰省するときお庄はその男と約束しておいて、自分で路

費を少しばかり拵えて、叔父にも母親にも^{かく}秘して、磯野の田舎へ遊びに行った。叔父は海辺から帰って、また家にぶらぶらしていた。病気が快くなつたとも思えなかつたが、いくらか肉づきもよくなつていたし、^{いろつや}色沢も出て元気づいていた。叔父は自分では^{はいせんカタル}肺尖加答児だと称していた。

狭い田舎の町では、お庄は^{なり}姿が人の目に立って、長くもいられなかつた。磯野とも一度^{うなぎや}鰻屋で二人一緒に飯を食つたきりで、三日目の午後には、もう^{とねがわ}利根川の危い舟橋を渡って、独りで^{くまがや}熊谷から汽車に乗つた。

駐車場で買った^{ごかぼう}五加棒などを土産に持って、お庄はその夕方に家へ帰つた。

帰つて来たことが知れると、湯島の伯母がすぐにやつて来た。

「お前まあ何てことをするだえ。」と、伯母は前から感づいていたお庄の^{ふしだら}不乱次を言い立てた。

「田舎へでも知れて見ない。それこそ親類のいい^{かおよご}顔汚しだぞえ。」

叔父は傍に黙っていた。

「お安さあも、年中傍についていて、何をしているだい。」伯母は母親にも当り散らした。

叔父と伯母とのあいだに、お庄を片着けるような家の^{せんさく}詮索が始まつた。伯母はその男との関係があまり^{もつ}纏れて来ないうちに早くお庄の体を始末をしなければならぬことを主張した。

「やつぱり田舎がいいらと思うが——。」

お庄を田舎へ片着けるという話が、本家のいとこ従兄の出て来た時伯母の口からまた言い出された。

叔父の知合いで、本家と同じ村から出た男に勧められて、石川島のすた廢れ株をうんと背負い込んだ従兄は、そのころ悩まされていた神経痛の療治かたがた株の配当を受け取りに出て来ていたが、そんな株に何の値打ちもないことが知れて来ると、急にがっかり落胆して毎日の病院通いも張合いが脱け、せなか背や腕にぴったり板を結び着けられた自由の利かぬ体を、二階の空間に蒲団をかぶ被って寝てばかりいた。

株をすすめられた時、のぼせがちの従兄が親類のたれそれ誰某となかたが仲違ひまでして、二度も三度も田地を抵当に入れて、銀行から金を借りた事情を、母親も伝え聞いて知っていた。これまでに村の大火の火元をしたり、多勢の妹を片着けたりして、ようやく左前になりかけていたしんしょう身上を、従兄は盛り返そうとして気をあせ燥った。お庄母子兄弟のことも始終気にかけていた。

峠を一つ越して十里ばかりかけ離れた親類の家に、ちょうどお庄の片着くような家が一軒あった。従兄はその家のことを話して母子の心持を確かめようとした。

そこには家着きの娘に養子が貰ってあったが、この春その娘が死んだということや、病気は肺病だという評判もあつたが、実際はそんな悪い病気でもなかつたらしいということや、昔からの親類関係、人柄財産の高なども、従兄は詳しく話して聞かした。

「どうだお庄さん、行く気はないかい。」

従兄はお庄親子と三人顔を突き合っている時笑いながら言った。

「叔父さんの病気も、あの様子じゃどうも面白くないようだし、こうしていちゃだんだ

つま
ん 究 つて来るばかりだで、少しでも物のあるうち片着いた方がよかないかい。」

お庄はただ笑っていた。東京から離れるということを考えるだけでも厭な気がした。肺病で死んだ娘の後へ坐るのも薄気味が悪かった。磯野の産れ故郷で見せつけられて来たような百姓家で一生を送る人の^{みじ}惨めさが、思いやられた。その町では、宿へ呼んでもらうような髪結一人なかった。

「どういものだかね。」と、母親もお庄を手放したくはなかった。

「東京に育つたものには、百姓家にとても辛抱が出来まいらと思うが——。」

「百姓家だつて、^{のら}野良仕事をするようなこともないで。」

「それでも、やれ田の草取りだことの、やれ植えつけだことの、養蚕だことのと言つて、ずぶ働かないでいるわけにも行かないでね。」

「そんなことくらい何でもないじゃないか。気に苦勞がないだけでもいい。またあのくらいよく出来た養子もないものせえ。働くことも働くし姑も大事にする。」

母親もお庄も、^が我を張つて断わることも出来ないと思つた。

お庄は日が暮れると、天神下にある磯野の叔父の家へ、時々訪ねて行つた。以前はかなりの船持ちであつたという磯野の叔父はもと妾であつた女と一緒に、そのころそこにひつそく^や塞^{つぶ}していた。下谷で営つていた待合も潰れて、人手に渡つてから、することもなく暮していた。

お庄は夏の末に、また出て行くと言つた磯野の^{ことば}言を思い出しては、この叔父から、田舎の消息を聞き出そうとした。

六十二

お庄と母親とが障子張りをやっていると、そこへお増も来て手伝つた。

免状を取ると一緒になるはずの芳村が、学資の継続問題で、秋の末に郷里へ帰つてか

ら、お増は始終ここへ入り浸っていた。四つも五つも年上のこの女に付き絡まとわれるのをうるさがつて、二階にいた中江という書生も、そのころはどこへか引つ越ゆくえして行方が知れなかった。

お増はお庄と一緒に、茶の間で障子を張りながら、自分の身の上のたよりないことを話した。お増は自分の親を知らなかった。浜町のある遊び人の家で育ったことだけは解っているが、そのほかのことは何にも知れていなかった。ようやく小学校を出た時分から男と関係して、田舎の医いしや師のところへ縁づく前には、ある薪炭商しんたんしょうの隠居の世話になっていた。

ほんとう「真実まことに私ほど苦勞したものではありませんよ。」と、お増は粗雑ぞんざいな障子の張りをしながら、自分のことばかり語った。

「これで芳村がまた駄目となれア、私だつて考えまされ。」

お庄も母親も人のこととばかり聞き流してもいられなかった。

奥では磯野が叔父と碁を打っていた。磯野がまた東京へ出て来たのは十一月の初旬で、お庄は叔父や母親に隠れて、時々叔父の家で逢っていた。問屋の方をすっかり封ぜられた磯野は、前のように外を遊あび行あってばかりもいられなかった。碁敵ごがたきや

話し相手に渴かつえている叔父も、磯野の寄りついて来るのを、結句よろこ悦よんでいた。

医いしや師の糾きりや繁三が来ると、すぐに石を消毒して、済んだあとでもまた自分の手を注意深く消毒するのが気にくわなかったが、それすら今はあまり相手をしてくれなくなつた。

障子張りが一ト片着き片着いてから、衆みんなは一緒に晩飯を食べた。お増は芳村のいない宿の部屋へ帰つて、昨日から持越しの冷たい飯を独りで食べる気がしなかった。

「話を聞いてみれば、あの人だつて可哀そうですよ、寄りつくところがないんですから

ね。」と、お庄は後でお増のことを噂した。

「一生懸命芳村さんに^{かじ} 噛りついていたら、その芳村さんがどうなるか知れやしない。」

お庄はそう言いながら、奥の箆笥のうえに置かれた鏡の前に立って、髪を直していた。磯野とお増と三人で、晩に寄席に行く相談が、飯の時取り決められてあった。磯野はお増に寄席を^{ねだ} 強請られると、そのつもりで、飯が済んでからお増と一緒に、一旦帰って行った。

お庄は顔も^{つく} 化粧り、着物も着替えて待つていたが、時計が七時を打つても八時を打つても誰も来なかった。お庄はじつとして落ち着いていられなかった。

軒の外へ出て見ると、雨がしぶりしぶりと降り出している。お庄は出たり入ったりしていたが、待ちきれなくなって、^{かさ} 傘を持ち出して、つい近所のお増の宿の前まで様子を見に行つた。

お増の宿は、その番地の差配をしている家の奥の方の^{はなれ} 離房で、^{くろいたべい} 黒板塀の切り戸を押すと、狭い庭からその縁側へ上るようになっている。お庄はその切り戸の節穴から、そつと裏を^{のぞ} 覗いてみると、^{はなれ} 離房の方の板戸は、ぴったり締つていて、中にひとけ^{ひとけ} 人気もしなかつた。お庄は急いで天神の通りの方へ出て行った。

磯野の叔父の家では、やつと飯を済ましたところであつた。叔父は茶の室の^ま 火鉢のところ^{あぐら} に胡坐を組んで、眼鏡をかけて新聞を見ていた。

お庄は^{あが} 上り^{がまち} 框のところ^{あが} に膝を突いて、奥の方を覗き込んだが、磯野は三時ごろにぶらりと出て行つたきり、まだ帰つていながつた。

「私アまた庄ちゃんのとこだと思つたら、そいつアおかしいね。」叔父はそう言いなが

ら、また新聞に目を移した。

寄席へ入って行くと、目をきよろきよろさせながら、^{あたり}四下を見廻しているお庄のすぐ目の前に、磯野とお増が^{な な}狎れ狎れしげに肩を並べて坐っていた。

六十三

お庄はその^{なか}側へ割り込んで行くことも出来なかつたが、そのままそこを出る気にもなれなかつた。幾度も声をかけようとしたが、^{のど かわ}咽喉が渴きついているようで、声も出なかつた。高座からは調子はずれの三味線の音ばかり耳について、二人並んだ芸人の顔なぞは、目にも入らなかつた。二人は時々顔を見合つて話をしていた。お庄はそのたびに胸がいらいらした。いつか番傘を借りて行つてから顔を覚えられてしまった、近所の折を拵える家の^{むすこ}子息だという^{あご}顎の長い中売りの男が、姿を見つけて茶を持って来ながら、

「お連れさんがそこへ来ていらつしやいやすよ。」と言つてその顎を^{しゃく}杓つた。その時にお増が後を振り^{かえ}顧つた。磯野も振り顧つた。

お庄は明けてくれた磯野の右側の方へ座を移した。
「人を出し抜いたり何かして随分ね。私を誘うという約束だつたじゃありませんか。」と、少し^{きつ}強いような調子で言つた。

この前にも夜天神を散歩している時、お増は浮いた調子で磯野に歌を^{うた}謳つて聞かせたり、暗いところを^だしな垂れかかるようにして歩いていた。その時は男に^こ媚びることに慣れている厭味なこの女のそうした癖だと思つて見て見ぬ振りをしてはいたが、そうとば

かりに澄ましていられなくなった。

「そういうわけじゃないのよお庄ちゃん。」とお増は小さい可愛い手頭てさきに摘んだ巻苧などをふか喫して、「誘おうと思つたけれど、もう時間も遅かつたしきつとお庄ちゃんが先へ来ているだろうと思つたのよ。決して出し抜いたわけじゃないんですから、どうぞ悪しからずね。」

みす御簾みすがおりてからも、二人はしばらくそんなことを言い合つた。

「まあいいじゃないか。おれ己おれが悪かつたんだから。」と、磯野は制した。

お庄は世間摺れのした年上の女に、そう突つかかつて行くことも出来なかつた。二人だけのおり、後で磯野に話をすれば筋道の解ることだとも思つた。

三人はもう落ち着いて高座へ耳を澄ましてもいられなかつた。お庄は始終磯野に話しかけるお増の様子に気を配ることを怠らなかつた。お庄を傍につけておいて、時々謎なぞのようなことを言い合つている二人の素振りには、ずうずうしいようなところがあつた。

中入り前に寄席を出ると、その足で蕎麦屋そばやへ入つて、それから寒い通りをもつ纏もつれ合つて歩いてた。蕎麦屋を出る時には、お庄の心も多少落ち着いてた。

「私のようなものでも、どうぞ姉と思つて交際つきあつて頂戴ね。磯野さんにも、芳村の弟のつもりで、これから力になつてただ戴ただくことに私お願いしたんですからね。」と、お

増はちよく猪口ちよくを差しながらお庄に話しかけた。なにかにつけて源之助のこわいろ仮声こわいろぶりを演るその調子が、お庄の耳にはな舐なめつかれるようであつた。

帰りに磯野もお庄もお増の宿へ寄ることになつた。六畳ばかりのその部屋はきちんと

片着いていた。先刻^{さつき}出て行つたままに、鏡立てなどが更紗^{さらさ}の片^{きれ}を被^かけた芳村の小机の側に置かれて、女の脱棄^{だつし}てが、外から帰るとすぐ暖まれるように余熱^{ほとぼり}のする土^{つち}の安火^{あんか}にかけてあつた。

「私冷え性なものですから、安火がなくちやどうしても寝つかれないの。」と、お増は中へ手^さを挿し入れて、火^ほを掘^{ほじ}くつた。そしてそこから小さい火種^{ひこ}を持ち出して、火鉢^{ひばち}に火^{おこ}を興^{おこ}しはじめた。長いあいだ慣らされて来たこの夫婦の切り詰めた世帯が、炭^{すす}の注^つぎ方にも思いやられた。田舎からの細い仕送りで、やつと図書館通いをしている芳村が、三度の食事を切り詰めても、傍に女がいなくては、一日も本を読んでいられないといふことを、お庄はお増から聞いて知つていた。

口^{くちば}を窄^{つば}めて火を吹いている、生^はえ際^{ぎわ}の詰つたお増の老けた顔^ふを横から眺めながら、お庄は毎日弁当を持って図書館へ通つていた芳村の低い音声や、物優しい蒼い顔を想い出していた。脚^か気^{つけ}で悩んでいる時も、お増は男を低い自分の肩に寄りかからせながら、それでも図書館通いを続けさせていた。

六十四

三人で安火に当っているうちに、磯野は腹が痛むと言い出して、そこへ突つ伏した。お増は押入れから自分の着物を出して来て、背^せへ被^かけたり、火鉢^{ひきだし}の抽斗^{ひきだし}から売薬^{うりやく}を捜して飲ませたりしたが、磯野の腹痛は止まなかつた。

「いけないわね。」と、お増は独りで気^もを揉みながら、枕^{まくら}など持ち出して来て、

「気味が悪いでしょうけれども、少しそこにお寝^よつていらつしやいよ。」

「あまり^{おそ} 晩くならないうちに、お庄ちゃんは一足先へお帰り。叔父さんが心配するといけませんよ。」と、大分経つてから、安火^{のぼ}に逆上^{あか}せたような^{あか} 赫い顔をあげながら磯野はいいつけるように言った。

「僕も少し治まったら、すぐ後から行って、叔父さんにお庄ちゃんを引つ張り出したお^わ詫びをするからね。」

お庄は二人の様子を見て見ぬ振りをして黙っていた。

「心配しなくたっていいのよお庄ちゃん。」と、お増も言い出した。

「磯野さんは私がきつとお預かりしてよ。家で病気が出たのですから、このまま帰しちゃ私も心持が悪いわ。」

「……大変ですね。」と、お庄は少し笑いつけるような調子で、「私そんなに心配なぞしやしませんよ。」

お庄は途中まで出て行つたが、やっぱりその部屋のことが気にかかった。家へ帰ると、母親が一人火鉢のところに坐っていた。お庄はその側に寄つて行くと、叔父のと決ま^のっている座蒲団を側へ退けて坐りながら、不興気に火を搔き廻していた。自分独りでは口上手のお増と喧嘩^{けんか}をすることも出来なかつた。磯野の気心も解らなかつた。

「また喧嘩でもして来たろうえ。」と、母親は何を言いかけても、お庄がつんけんしているので、腹のなかでそうも思つた。これまでも、お庄は磯野とよく言合いをした。

天神下の叔父の家で、友達と一所に酒を飲んで、それから一^{みんな}同遊びに出かけようとしているところへ行き合わせた時も、外へ出てから雨のなかで喧嘩を始めて、傘で腕^ぶを撲たれたりした。女を引つ張り込んでいるところへ踏み込んで行つたこともあつた。

お庄は押入れから夜具を卸していながら、ぴしゃんと閉^たてつけた戸と柱の間へ挟んだ指をなめながら、「お痛^いた。」と大げさな声を立てて突っ立っていた。母親が戸締りをしてからそこへ寄って来た。

「外で気に喰わないことがあつて、家でそうぷりぷりするものじゃないよ。手がどうかなたかえ。舐めてやろうかい。」と笑った。

「阿母さんに舐めてもらつたつてしようがないわ。」と、お庄はつぶや^{つぶや}きながら、やっぱり突っ立っていた。胸がむしやむしやして、そのまま床に就く気もしなかつた。

ね^ね臥てからも、お庄は始終外を通る人のあしおと^{あしおと}躰音に気をいらいらさせた。

翌朝床を離れて手洗^{ちようず}をすますと、お庄は急いで、お増の宿まで行って見たが、切り戸はまだ締っていた。隙間から覗くと、靴脱^{くつぬ}ぎの上にあつた下駄も取り込んだらしく、板戸もびつたり締つて、日当りの悪い庭の、立枯れの鉢植えの菊などが目についた。差配の方の格子戸もまだ開かなかつた。お庄はしばらくそこをぶらぶら^{ぶらぶら}彷徨していた。

昼少し前に、お庄が台所で飯の支度をしているところへ、磯野はぶらりとやって来た。そして奥で叔父や母親に調子を合わせて、何やら話し込んでいた。お庄はその顔を一目見たきりで口を利くことも出来なかつた。

飯の支度の出来た時分に、磯野は母親の止めるのも聞かずに、そわそわした風で帰って行つた。

お庄は目に涙をにじませながら、台所の方から出て来ると、「昨夜^{ゆうべ}のことどうしたんです。」と出口で外套^{がいとう}を着かけている磯野に声かけた。

「どうもしやしないよ。」と、磯野はにやにや笑いながら、「後で遊びにおいで」と言つて出て行つた。

六十五

田舎にいる芳村のもとへ、友達がそつと電報を打つてやつた時分には、磯野はおおびら公然にお増の部屋に入り込んでいた。

紬や芳村の友達仲間あとおしに後援をされて、ある晩お庄が磯野を連れ出しに行った時、お増はちょうど餅を切っていた。磯野もどてら褌袍などを着込んで、火鉢の前に構え込んでいた。その前にも、お庄は天神の年の市に二人一緒に歩いているところを人中で見つけて、一度お増に突つかかつて行った。

「あなたも何か悪いことがあるから、家へ寄つ着かないんでしょう。私ちゃんと知っていますよ。随分ひどい人ね。」とお庄は暗いところで、磯野に厭味を言つてからお増をなじ詰つた。

「お庄ちゃん、あなたにはすまないが、お察しの通りよ。」とお増は磯野をかば庇護うようにして落ち着きはらっていた。

「こうなれば、意地にも磯野さんは私が一緒になつて見せますよ。お気の毒ですけれど、まあそう思つてもらいましょうよ。」お増はこわいろ仮声のような調子で言つた。

「しかたがないから磯野さんも、お庄ちゃんにきつぱりした挨拶をして下さい。」
「そんなことを言うもんじゃないよ。ここで逢つたんだから、とにかく一緒に歩こう。」と、磯野は二人を明るい方へ連れ出して行った。

それからも逢つて、話をするような折もなかった。

お庄は夜になると、よく一人で家を脱け出して、お増の部屋の切り戸の外に立ち尽していた。

「お前が騒ぐからなおいけない。」と、母親はたしなめたが、お庄はそつとしておけなかつた。

紘や芳村の友達が集まって、そんな相談をしている時も、叔父は棄ておく方がいいと言つて、傍で笑っていたが、一同はお庄を連れて押しかけて行つた。

「誰の許しであなたは人の家へなんか入つて来ました。家宅侵入罪ですよ。」と、お増はこわい目をして、磯野を外へ連れ出すつもりで、独りで入り込んで行つたお庄を睨めつけながら呶鳴つた。

「いいじゃありませんか。私は磯野さんに用事があつて来たんですから。あなたこそ誰に断わつて磯野さんなどをこんなところへ引つ張り込んでいるんです。」

「引つ張り込もうとどうしようと私の勝手ですよ。そのために、あなたにもお断わりしたんじゃありませんか。」

「いいえ、私はまだ磯野の口から、一言も断わりを言われたことはありません。あなただつて、芳村さんという人があるじゃありませんか、あんまりずうずうしいことをなさると私がいつけてやるからいい。」

「ええいいんですとも。芳村が帰つて来たつて、私逃げも隠れもするじゃありません。よけいな心配などして頂かなくとも、私が綺麗に話をつけて別れますよ。はばかりながら、そんな意気地のないお増じゃありませんよ。」

ふたりは長い間、すごい勢いで言い合つた。傍で制する磯野のこともばも耳に入らなかつた。

「あなたになぞ係り合つていませんよ。」と、お庄は最後に磯野の方へ向いて、

「磯野さん、ちよつとそこまで私と一緒に来て頂戴。」

「お気の毒ですが行きやしませんよ。磯野は私の良人です。」

お庄は紘や友達に呼び出されて、そのまま引き取つた。田舎から出て来た芳村は、上野へ着くとすぐその足でお庄の家へやつて来た。友達からの報知を受け取つた時、芳村は何のこととも想像がつかなくかつたが、すぐ宿へ乗り込むのは不得策だということだ

けは、電文にも書き入れてあつた。

みんな

一同から事情を聞いてから、芳村は自分の宿へ帰つて行つた。

六十六

その晩芳村は行ききりであつたが、お増と綺麗に手を切つたことは、翌朝芳村が友達のところへやつて来てから、やつと解つた。そのことを話しに二人はお庄のところへもやつて来た。

芳村は旅の^{つかれ}疲労^{ゆうべ}やら、昨夜の騒ぎ^{やつ}やらでめつきり顔に^{やつ}寝れが見えた。今朝友達の宿で飲んだ酒の気もまだ残つていた。

「それにしても可哀そうな女です。彼^{あれ}自身も思い設けない結果になつてしまつて——。」と、芳村はまだ女の心持を^{あわれ}慫んでいた。

「それにしても随分ずうずうしいやね。」と、友達は芳村から聞いた^{ゆうべ}昨夜の事情を、お庄や母親の前で話した。磯野とお増とが、芳村の顔を見ると、いきなり二人がそうなつた動機を話して、芳村にも同情してくれろと言つたことや、お増が部屋にあつたいろいろの世帯道具や夜の物、^{こうり}行李のなかの芳村の持物^{ねだ}までを強請^{さら}つて、おおかた^{さら}浚つて行つたことなどが、憎さげに話し出された。

「それで磯野と一緒に出て行つたんですか。」と、お庄はあの部屋を出て行つた二人の様子を心に描いた。

「それでも出て行くとなれば、あまりいい心持はしなかつたろうがね。」と母親も傍から口を利いた。

「今度こそは、意地にも添い通して見せるなんて言つて出ては行きましたがね、長持ちがするかどうかは疑問ですよ。」と言つて、淋しく笑っている芳村の顔では、女がまた

自分の懐に ^{かえ}復つて来る時が、きつとあるものと信じているらしかった。

「どうせ一人を守つちやいられない女なんだからね。」友達が言った。

「そうなのでしょうね。あの人は私の聞いているだけでも、随分いろいろの人を知っていましたからね。」と、お庄も芳村の心をもどかしく思った。

二階に寝ていた叔父が起きて来てから、芳村は ^{ゆうべあす}昨夜托けておいた鞆を提げ出し

て、やがて友達と一緒に帰って行った。叔父は淋しい朝飯の膳に向いながら、^{おやこ}母子が

している磯野らの噂に耳を ^{かし}傾げていた。

「お庄も、築地にいる時分にどこかへ片着けておくだつたい。」と、母親はお庄の厭がる弟の給仕をしながら、以前のことを思い出していた。運の向きかけて来てから、まだまだ前途があるように言っていた弟が、こんなにはたばたと息ついて来ようとは思わなかった。

お庄はすることが手に着かなかつた。縫直しに取りかかろうとしていた春着の

^{じゆばん}襦袢なども、染物屋から色揚げが届いたばかりで、この四、五日のどさくさ紛れに、まだ押入れへ突っ込んだままであつた。ひとしきり自分の体に着くものと決まっ

いた数ある衣類も、叔父に言われて、世帯の足しに ^{よそ}大方余所へ持ち出してしまった。磯

野が時に ^{くめん}工面に行き詰つたおりおり、母親に秘密で、二人でそつと持ち出して行った品も少くなかつた。今度磯野に逢つたら、せめてそれだけでも取り返す工夫をしなければならぬとも考えた。

天神下の叔父の家の二階に ^{しやが}潜伏んでいる磯野とお増のことが、時々思い出された。

お庄は明りがつく時分になると、天神の境内から男坂の方へ降りて行った。どの町を歩

いても、軒ごとに門松や輪飾りが綺麗に出来 ^{あが}揚つて、新しい春がもう来たようであつ

た。羽子板を突いている ^{わか} 少い娘たちの顔にも待ち遠しい色があつた。

お庄は淋しい男坂を、また一人で登つて来た。

「お庄も、ああしてうつちやつておいちや悪いがな。」と、湯島の伯母が、蔭で気を揉んだ。

六十七

お庄が ^{したや} 下谷の方のある眼鏡屋の ^{むすこ} 子息と見合いをさせられることになつたのは、一月の末であつた。その眼鏡屋を、湯島の伯母の家主が懇意にしていた。家主が以前下谷で瀬戸物屋をしていた時分からの知合いで、^{ことし} 今茲二十四になつた ^{むすこ} 子息のこともよく解つていた。

お庄は伯母の家で、時々この家主の家の娘と顔を合わして双方が知つていた。娘はも ^{さんじゅう} う三十歳余りで、出戻りであつたが、瀬戸物屋をしまつてから、湯島の方へ引つ越して来た。母子二人きりで質素に暮し、田舎へ小金を廻しなどしていた。五、六軒ある借家の家賃の額も少くなかつた。娘は名の聞えた呑んだくれの洋画家に縁づいていたが、父親が死ぬ前に、病氣の見舞いに来ていて、父の遺言でそれきり帰らずじまいになつていた。

伯母とこの家とは、^{たなこ} 大屋と店子との関係以上の親しみがあつた。瀬戸物屋などして ^{かいわい} いる時分から ^{かいわい} 界限に美人の評判が高かつたその娘は、糺を弟のように可愛がつていた。

「東京で開業なさるなら、資本ぐらゐは家でどうにかしますよ。」と、その娘は伯母の

^{おおびら} 前にも公然に言つていた。

糺が田舎の身内続きのある医者の家を継がなければならぬことになつてからも、この

交際は続いていた。そのころには、画家から籍を取り復^{かえ}されて、娘に養子が迎えられた。

この女が、母^{おやこ}子と一所にあり余る財産を持つていながら、いつも着物らしい着物を引っ張っていたこともなく、顔には白粉一つ塗らずに、克明な姿^{なり}をして、家賃を取り立てて歩いているのがお庄には不思議なようであった。惰^{なま}けものの美術家に縁づいて、若い盛りを嫌^{いや}な借金取りのいいわけに過して来た話を、お庄は時々この女の口から聞かされた。

この家へ、糺や繁三と一緒に、正月カルタを取りに行つた時、女はしみじみした調子でお庄に縁談を勧めた。

「どこか堅いところへ速くお片着きなさい。やっぱり商売屋がいいんですよ。商いは何^{つよ}といつても強^{つよ}ござんすからね。」

女は父親の死ぬ間際に、質に入っている着物が出せなくて、見舞いに来ることも出来ずにいた時の切なかつたことなどを、また新しく語りだした。昼間うるさく借金取りに襲われる画家は、夜戸締りをしてから、やつと落ち着いて画板に向うことが出来た。幾晩もかかつてその絵が出来揚つてから、久しぶりでようやく父親を見舞つたころには、病勢がもうよほど進んでいた。女の体は、それきり実家に押えられてしまった。

眼鏡屋の話は、その晩も母子の口から言い出された。そこはかなり古い店で、財産と^{むすこ}言うほどのものもないけれど、子息は小さい時から大事にして育ててあつたから、世間摺れのしているようなこともないし、母親は少しは芸事なども出来て、気^{きさく}爽な女だから、そんなに窮屈な家ではなかろうということであつた。

磯野との関係を深くも知らないこの母子の前で、お庄は^{うけこたえ}応答のしようもなかつ

た。纏^{まと}まって何一つ^{しつ}躰^{しつ}けられたことのない体で、そんな母子のなかへ入って、日が暮せそうにも思えなかった。

その子息^{むすこ}が、遊びに来ている時、お庄は迎えを受けて、湯島の伯母に連れられてし
ようことなしに出て行った。

「あらたまつた姿^{なり}をして行くには及ばんで、羽織でも一枚上へ引^かつ被^かけて……。」

と、母親と二人、支度でごたごたしている奥の方へ伯母が声をかけた。

子息^{むすこ}は茶の室の火鉢のところに坐^まって、老母^{としより}と茶を呑んでいた。撫^なで肩の男の
後姿が、上り口の障子の腰硝子から覗くお庄の目についた。同時に振り顧^なつた男ののっ
ぱりした色白の細^{ほそ}面^{おもて}も、ちらと目に入った。

裏口の方へ廻されたが、お庄はそこからも入り得ずにやがて逃げて帰った。

六十八

春の末に郊外のある町へ片づいて行くまで、お庄は家にぶらぶらしていた。

その町は飯田町^{いいだまち}から汽車で行って、一時間ばかりの道程^{みちのり}であった。家は古い
料理屋で、東京から西新井^{にしあらい}の薬師やお祖師様へ参詣^{さんけい}する人たちの立ち寄つて飲
食する場所であったが、土地の客も少くなかった。中野の方の電信隊へ勤める将校連
も、時々来ては騒いだ。

四ツ谷に縁づいている父方の従姉^{あね}の家へ出入りしている男が、その家をよく知つてい
たところから、大蔵省へ出ている従姉^{あね}の良人と叔父との間にそんな話が纏まることにな
った。

それまでに、お庄は二度も三度も四ツ谷の^{あね}従姉の家へ遊びにやらされた。^{あね}従姉の家とは長いあいだ打ち絶えていた。互に居所も知らずにいたのが、この三月ごろ田舎から出て来た人の口から、ふとその消息を聴くことが出来た。古いころの早稲田を出たというその良人の浅山は、ある会社の外国支店長をしている自分の姉の^{つれあ}添^{やしき}合いの家宅の門内にある小さい家に住まっていた。家には、幼い時に二度逢ったきりで、顔も覚えていない^{あね}従姉の母親も一緒にいた。

^{なこうど}媒介人はそこでお庄を見てから、思いついて双方へ口を利くことになった。

先方の家の母親だという、四十四、五の女が、^{なこうど}媒介人と一緒にお庄を見に来たとき、お庄は浅山の晩酌の世話をしていた。^{しも}下の病気で始終悩まされていた^{あね}従姉は、頭が痛むと言つて奥で^ふ臥せっていた。

むかし品川で芸者をしていたとかいうその母親は、体の^{ぶと}小肥りに肥った、^{めつき}目容に^{あいきょう}愛嬌のある鼻の低い婆さんであつた。半衿のかかった軟かい着物のうえに、小紋の羽織などを抜き^{えもん}衣紋にして、浅山が差してくれる猪口を両手に受けなどして、お庄にもお愛想を言っていた。

お庄も酒の酌をしながら、この婆さんの気質を知ろうとして、時々顔色を見ていた。「家は別にむずかしいことはございません。お爺さんはもうごく気のいい人ですし、私もこれっきりの人間なので、ただ^{むすこ}子息のお守りをしてもらいさえすればそれでいいのです。」と、母親は帰りがけに、ずっと打ち^と積けたような調子で、猪口を浅山にさしながら言つた。

少年のような顔をした浅山は、ぐずりぐずりした調子で、^{なこうど}媒介人とこの婆さんとを相手に、ちびちびいつまでも後を引いていた。そして時々お庄の^{ふきだ}失笑するようなじょうだんぐち笑談口を利いた。お庄は奥の方へ逃げ込んで行った。

母親の話では、嫁がうまく落ち着いてくれて、^{むすこ}錢遣いの荒い子息がそれで締つてくれさえすれば、自分ら夫婦は早晚商売を若夫婦に譲り渡して、この春建てた裏の^{はなれ}離房へ別居してしまいたいということであつた。自分が来て世話を焼くようになってから、メキメキ商売が^{はんじょう}繁昌するようになったという自慢話も出ていた。

婆さんが^{なこうど}媒介人と一緒に、いい機嫌で帰つて行つてから、^{あね うつとう}従姉は鬱陶しい顔をして、^ま茶の室へ出て来た。浅山は手酌で、まだそこに飲んでいた。

「どうだお庄さん行つて見るかね。^{おれ}己のような安官員のところなぞへ行つて、年中びいびいしてるよりか、どのくらい気が利いているか知れないよ。」浅山は景気づいて言出した。浅山がなにかにつけて、^{あね やつかい}始終実姉の家の厄介になっていることは、お庄^{あね ぐちばなし}も従姉の愚痴談で知っていた。

「腰弁当こそ駄目よ。」と、^{あね}従姉もそうけ立つた^{あたま}頭髪を押えながら呟いた。「お庄の前祝いに、私も一つ頂きましょうかね。」と、酒ずきな伯母が傍から浅山に猪口を催促した。お庄は伯母にも愛想よく酌をしてやったが、まだそこまで気が進んでいなかった。

婚礼の日にも、お庄は母親と一緒に、昼間からあね従姉の家に行っていて、そこから

なこうど媒介人夫婦と浅山夫婦とが附いて行くことになった。

四ツ谷から汽車に乗ったのは、その日の夕暮れであつた。線路沿いのほりばた濠端には葉桜ばかりが残っていて、暗い客車の窓には若葉の影が流れた。お庄はもうそんな時節かと思つて、初めてそこらを見廻した。先が急いでいたのに叔父の手もとが苦しく、持っている物も、その日の間に合わすことも出来なかつた。じみな色合いの紋附の上に、衿の型の少し古くなつたコートを着て、手に指環一つないのが心淋しかつた。

お庄は二、三日前に受け取つた磯野の手紙のことなどを思い出していた。その手紙には磯野から折れてこの間のことを詫びた文句などが書いてあつた。磯野が後悔していることは、その手紙でも解つたが、そんなことは他の女に対しても、これまでないことで

はなかつた。お庄はせわ体が忙しかつたので、その返辞を書くひま隙すらなかつた。これざり手紙のやり取りをする時がありそうにも思えなかつた。

停車場へ着くと、ちようちん提灯を持った男が十人余り出迎えていた。はつび法被を着た男

しまや、しりはしよ縞の羽織にはおりはかま尻端折りをして、靴をはいた男などがいた。中には羽織袴の人もあつた。

「どうも御苦労さまで……。」という挨拶が、双方から取り交された。

その家は停車場から五、六町も隔たつた通りにあつた。暗い町中にはところどころに人立ちがしていた。広い空地につど集うている子守の哀れな声でうた謳ううた唄の節が、胸に染みるようであつた。お庄らの入つて行つたところは、近ごろの普請と思われるとびら扉

のある新しい門口で、そこをくぐ潜ると、木立ちを切りひら拓いて作つたような、まだ落着

きのない山ばかりの庭を通つて、橋廊下で繋つながれた一棟の建物の座敷の縁側へ出るよ
うに、飛び石が置いてあつた。池の縁には松の葉蔭に燈籠とうろうの灯が見えなどした。

お庄らの上つて行つた部屋は、六畳ばかりの小間こまであつた。浅山もなこうど媒介人も、イン
バネスを脱ぎ棄て、縁側から上つて行くと、やがていろいろの人がそこへ顔を出した。
としより
老人夫婦もちよつと来て挨拶をして行つた。

店の方で、何やらごたごたしている様子が、こつちへも解つた。お庄が女中に頼ん
で、そこへ鏡台を持って来てもらつて、顔を直したり、衣紋を繕つたりしている間に、
なこうど
媒介人は二度も三度も、店の方へ呼ばれて行つた。

「困つたな。」と、なこうど媒介人は部屋へ復かえつてくると、入口でそつと浅山に耳打ちをし
た。一行が乗り込んで来る二、三時間前に、ぶらりと店頭みせさきから出て行つたきり、
むすこ
子息の姿が見えないと言うのであつた。

「どうしたというんだ。肝腎のお婿さんの行方が知れないなぞは少しおかしいね。」と
チヨツキの間ぬけて衿ひろの潤いフロックを着けて坐り込んでいた浅山は、興のさめたよ
うな顔をして、薄くちひげい口髭ひねを捻つていた。

頭の地の透き透きになつた、色の黒い大柄のなこうど媒介人は、落着きのない顔をしか顰めて
もや
また母屋の方へ渡つて行つた。

二十二になる新にいむこ婿が、床前とこまえに伏目がちに坐っている嫁の側へ押し据えられた
のは大分経つてからであつた。お庄はその顔を見ることすら出来なかつたが、べろべろ

に酔っていることだけは、^{なこうど} 媒介人に引張られて入って来た時の様子でも解った。並

みはずれに^{たけ}身長の詰ったじくじくした体や色の蒼白い細面なども、坐る時薄々目に入っ
た。

親戚たちの挨拶が長く続いた。

^{しょくだい} 燭台の火が目にちらつくようで、見まいとしている婿の姿が、横からまた目に
映った。

^{さかずき} 盃の時、骨細い婿の手が、^{ふる}ぶるぶる 震えていた。

七十

翌朝お庄が目を覚ました時分は、^{やうち} 屋内がまだひっそりしていたが、立て廻した

^{びょうぶ} 屏風の外の日影は^た 闇けていた。昨夜は^{ゆうべ} 寝室へ^{ねま} 退けてからも、^ひ 衆^{みんな} はいつまでも

騒いでいた。^{しま} 終いにはお袋の三味線などが持ち出された。汽車の間に合わなくなっ

て、東京へ帰れなかつた連中もあつた。意地の汚い浅山も酔い潰れて、次の室に^ま 衆^{みんな}

と一緒にごろ寝をすることになった。そんな人たちの疲れた寝息や^{いびき} 鼾が、こつちま
でも聞えた。

^{むすこ} 子息の^{よしたろう} 芳太郎は、蒲団の外へ^{すべ} 亡り出したまま、まだ深い眠りに沈んでいた。
角刈りにした頭の地も綺麗で、顔立ちも優しい方であつたが、手足の筋肉がこちこちと

硬かつた。時々板前をやると見えて、どこか^{なまぐさ} 腥い臭いのするの胸につかえる

ようであつた。お庄は明け方までおちおち眠ることが出来なかつた。

芳太郎の口から聞かされる家の様子の、お袋の話と違ったところのあることが、じきにお庄にも感づけた。盃をする間際に、近所の飲み屋で酒を呷っていたのも、

みんなからか衆が擲擲っていたように、きまりの悪いせいばかりとも思えなかった。芳太郎の

父親が死んでから、父親の生きているうちに外妾から後妻に直ったお袋が、引っぱり込んで来た今の親父を、始終不快に思っている芳太郎の心持も呑み込めた。親父には、

牛込にいる女房も子もあつた。実の父親が逐い出した芳太郎の母親は、長いあいだ田舎の方を流れ歩いて、今は消息も絶えていた。

「お前も、あの親父にいびられることくらいは覚悟してはやくちや駄目だよ。」少し口がほぐれてきた時分に、芳太郎はそう言つて狎れ狎れしげに、酒くさい息を吐きかけた。

お庄はそんなことを憶い出しながら急いで床を離れると、屏風の外で着物を着換えて部屋を出た。

橋廊下から母屋の方の台所へ出て行くと、年増のときわかいのと、女中が二人で

ゆうべ昨夜の膳椀や皿小鉢の始末をしていた。筒袖に三尺を締めて、土間を掃いている男衆の姿も目に着いた。

あね従姉が起きて来た時分には、母屋の方の座敷も綺麗に掃除が出来て、うららかな日影

が畳のうえまで漂ういていた。床の間には、赤々した大きい花瓶に八重桜が活けら

れて、庭のはずれのがけからはうぐいすの鶯の声などが聞えた。

二人で縁端に坐っていると、女中が蒲団を持って来たり、朝茶や梅干を運んだりした。

「花の時分は随分忙がしござんしたよ。小金井ももう駄目でしょうよ。」と、女中は茶くを汲みながら、お庄の顔をじろじろ見た。

「ねえ姐さんはどこ……。」などと、あね従姉は珍しそうに女中の相手になって、はなれ離房の普請を賞めなどした。

「私もこれからちよいちよい寄せてもらいましょう。こんなところで一日も遊ばしてもらえと、どんなに気が晴れ晴れするか知れやしない。」

「ええ、東京から皆さん随分いらッしゃいますよ。」

なこうど媒介人や浅山の起き出した時分に、またゆうべ迎え酒が始まった。昨夜店の方に構え込んでいて、あまり座敷へ顔出しをしなかつた親父も、そこへ来て一緒に飲んだ。お庄はあね従姉と一緒に、はなれ離房の方の二階座敷へ上つて見たり、庭をぶらつ逍遙いたりした。

芳太郎のことが、あね従姉の口からいろいろたず訊ねられた。

「この家でみんな衆に思われるれば、お庄さんもしあわせ幸福だよ。婿さんは若くてうぶ幼だし、物はあるしさ。」と、あね従姉はてす手擦りにもた凭れていながらうらやましそうに言った。

お庄は男の無作法さが腹立たしかつた。「あまりそうでなさそうなの。家も随分ごたごたしているようですよ。」お庄はあか赧らんだ顔に淋しく笑つた。

七十一

つつじ躑躅の時分に一度ここへ寄つて、半日ばかり遊んで行つた外神田の洋服屋だとかいう男が、どこかの帰りに友達を一人連れて来て、新建ちの方の座敷で、女中を相手に無駄口を利きながら酒を飲んでた。そこへお庄も酌に出された。

来た当座丸まるまげ鬻うに結むすつて、赤い手て絡がらなどをかけているのが、始終帳場に頑張っている親父の気に入らないことが、素振りでも解とつて来た。そんなことを口へ出して言うこともあつた。

「こんな客商売をする家へ来たら、お前もちつと氣を利かさなくちやいけないよ。」

お庄はお袋の指図で、浅草にいたころ挿したような黄楊つけくしの櫛くしなどを、前髪を広く取つた島田鬻あたまの頭あたま髪かみに挿さきされた。そして手の足りない時は、座敷へ出て客の相手をもしなければならなかつた。

「あんたはここの家の何です。」と言つて客きに訊きかれると、お庄はいつも曖あい昧まいな返事をして笑っているのが切なかつた。お袋に教おわつた通りに、ここの養女だということが、慣れて来るまでは口へ出なかつた。

親父もお袋も、血を引いていない子むすこ息この芳太郎のことをあまり氣にかけてもいなかつた。芳太郎の生みの母親が、いつかどこからか帰つて来はしないかということも、始終きづか氣づか遣かわれた。この家を芳太郎に譲れば、自分たちはやがてここから逐おい出だされて行かなければならぬようなことがないとも限らぬと不安のある様子も、お庄の心に感じられて来た。

お袋は土間へ降りてビールや正宗あきびんの空あきびん鑊びんを、物置へしまいでいるお庄の側へ来て、

「こんな物は皆なお前まへにあげるよ。三月も溜めておいちや空鑊屋へ売るんですがね、ど

うして大きいものですよ。お前はそのお鳥目あしを自分ののものにして除のけておおきよ。これ

までは芳もうの儲あけれにしておいたけれど、彼あれにやつたつて皆な飲んでしまうから何にも

なりやしない。」と言つて、薄暗い物置のぞの中を窺のぞいていた。

お袋は、これまでに骨折つて、^{ちいさ}幼い芳太郎を育てて来ても、芳太郎の^{あたま}頭脳にはまだ田舎にいる母親のことが、時々憶い出されているということや、今の親父と折合いの悪いことなどを言い出して^{こぼ}零した。お袋の口ではこの界限で顔利きの親父が、帳場にでも坐っていてくれなければ、一日もこんな商売がして行かれないということであった。

「それでお前さえ^{おとな}柔順しく辛抱してくれれば、私は何でもして上げるよ。芳太郎が厭なら厭でもいいのさ。^{あれ}彼に^わ身上を配けて別家さして、お前に他から養子をしたつていんですからね。」

お庄は空鑊の積みの前に立って、「え、え。」と言つて聴いていたが、ぼつぼつ^{あばた}痘痕のような穴のあるお袋の顔が、薄気味わるく眺められた。四、五日前に、親父がどこからか、延べの指環を一つ持つて来てくれた時も、同じようなことを聴かされた。相談ずくで、自分を店の売り物にしようとしているような二人の心持が、ようやく見えて来たようにも思えた。

洋服屋が前に来て騒いだ時も、お庄は着物など着替えさせられて、座敷へ出された。その男は酒に酔うと浮かれて^{うた}唄など^{うた}謳い出した。そして帰りがけに、^{かくし}衣兜から名刺を取り出して、お庄にくれた。名刺には高等洋服店^{なんのなにがし}何某と記してあつた。

洋服屋は、今日もお袋にちやほやされて、養女のお庄を相手に騒いでいた。お庄は^{ちょうし}銚子を持って^{もや}母屋の方へ来たきり、しばらく顔出しをせずにいると、また呼び立てられて、^{はなれ}離房の方へ出て行つた。

「お客さまの前へはあまり出さないことにしておりますものですから……。」と、お袋はお愛想を言いながら、入れ替りに部屋を出た。

七十二

暮れてから客が引き揚げて行くと、家が急に淋しくなつた。お庄も強いられた酒の酔いがさめかかつて来た。取り散らかつた座敷を片着けている女中を手伝いがてら、二階へ上つて手擦りに^よ凭りかかっていると、裏の^{たんぼ}田圃で^な啼き立てている^{かえる}蛙の声が耳に

ついて、^{あたま}頭脳が掻き乱されるようであつた。いつもそのころになると、お庄は東京を憶い出していた。

ここへ来る少し前に、茨城の方から叔父のところへ長い手紙をよこしたお照のことが、思い浮べられた。叔父が悪い病気に^{かか}罹つてからも、一日も傍を離れなかつたお

照は、田舎から持つて来た着物までなくして、^{しま}終いにやりきれなくなつて、姿を隠してしまつた。それが茨城まで流れて行つたことは、叔父も知らなかつた。手紙には相変

らず^{きちがい}狂氣じみた文句ばかり並べてあつたが、何をして暮しているかということを考えて、人事のようにも思えなかつた。

女たちは、そこに置き忘れて行つた敷島を吸いながら、客の^{しなさだめ}品評などをし合つていた。この女たちも方々を^{わた}渉り歩いて、いろいろの男を知つていた。いつもよく来

る中野の隊の方の、若い将校連の^{うわさ}風評なども出た。

こんな連中にも評判のいい洋服屋の様子は、お庄にも悪くはなかつた。男はお庄に東京へ出たら、是非店へ遊びに来いと言つて、そこを^{くわ}委しく教えてくれた。お庄のこともいろいろ聞きたがつた。お庄は女たちにそのことをいろいろ言われた。

「私にあんなのツペりしたような人嫌いですよ。」と、お庄は^{そむ}顔を背向けながら言つ

た。

「それでも家の芳ちゃんよりかもいいでしょう。」と、年増の方の女は、そこにベツたり坐っていた。

「芳ちゃんも可哀そうね。」と、若い方の女は、^{ちやぶだい}餉台の上を拭きながら呟いた。

八時ごろに、お庄はお袋に断わって、ちよつと四ツ谷まで出かけた。何だか今夜は家にジツとしてもいられなかった。

停車場まで来ると、前の床屋で将棋仲間に加わっていた芳太郎が、すぐにお庄の姿を見つけた。お庄が客の前へ出るのを、芳太郎は快く思わなかった。そんな時にはきつと

料理場で ^{こもかぶ}菰冠りの飲口を抜いて ^{あお}コップで酒を ^{あお}呷ったり、お袋に突つかかたりし

た。そうしたあげくに、^{つか}金を ^{つか}掴みだして、ぷいと家を飛び出して行つた。手近に金の

ない時は、^{いたぎれ}板片の端に ^{もち}麴をつけて、^{ぜにばこ}銭函の中から銀貨を釣り出した。

「家のものは皆な ^{おれ}己のものだ。己の物を己が持ち出すに不思議はない。」

芳太郎はこう言つて、^{あぐら}銭函の前に、どかりと ^{あぐら}胡坐をかきながら、銀貨の勘定をしていた。

「それが厭なら、身上を速く己に渡すがいいんだ。」と、^こ駄々を ^こ捏ねた。

親父は苦い顔をして、帳場の方で見ぬ振りをしていた。

「誰がこの身上を作つたと思ひだい。^{ばか}莫迦お言いでないよ。」と、お袋はたしなめた

が、強いて止めることも出来なかった。お庄が来る少し前に、親子の ^{なか}間 ^もが揉めてしば

らく家を出ていた親父を、また引つ張り込もうとして大喧嘩をした時、外から ^{くら}食 ^{くら}い酔つて帰つて来た芳太郎に、刃物を振り廻されたことが、お袋にも気味が悪かつた。

芳太郎は金を持ち出して行くと、^{しゆく}宿の方へ入り浸って、二日も三日も帰らなかった。お庄が来てからも、^{にいよめ}新婦の仕打ちに^{かんしゃく}癩癩を起して、夜中に家を飛び出すこともめずらしくなかった。

お庄はぷりぷりして出て行く芳太郎を送り出すと、そつと戸締りをして、また^{ねどこ}寝所へ^{かえ}復った。そして楽々と手足を伸ばして甘い眠りに沈むのであった。

「おいおい。」

床屋の店から、芳太郎が声をかけた。お庄は黙って行き過ぎようとした。

七十三

「おい、お前どこへ行く。」と、芳太郎は後から追いかけて来た。

「四ツ谷の^{ねえ}従姉さんのとこまで行って来ますの。」と、お庄は振り顧りながら言った。

「何しに行くんだい。」芳太郎は^と積りかかった太い^{しろちりめん}白縮緬の^{へこおび}兵児帯をぐるぐるま^ま捲きつけながら、「お前今夜は帰りやしないんだろう。己も一緒に行こう。」

「人に^{わら}嗤われますよ。」と、お庄は^{あとば}後歯の下駄を鳴らしながら、停車場へ入って行った。

お庄が切符を買うと、芳太郎も^{がまぐち}鰐口から金を出して同じように四ツ谷行きを買った。

「一緒に行つたり何かして、後で^{しか}叱られてもいいんですか。」お庄は念を押しながら^{らち}埒の外へ出て行った。

お庄は内密で、従姉にいろいろ話したいこともあった。この前にもちよつと従姉

の耳へ入れておいた家の様子や自分の立場について、媒介人の利いた口と大した相違のあることを、今一度委しく話して見たかった。

「いいんだよ。」と、芳太郎は耳に挟んでいた両切りの蓑に火を点けて吸いながら、お庄の傍を離れなかつた。帽子も冠らない顔が蒼白く、目の色も澱んでいる。二人はこのごろ、ろくろく話をするような折もなかつた。芳太郎は昼間も酒の気を絶やさず、夜はまたふらふらとそこらをほつき廻り、友達と一緒に宿場を騒ぎ歩いた。

お庄は時々お袋からいつかって、心の荒びたような男の機嫌をも取らなければならなかつた。

座敷の閑な時は、お庄も寄りついて来る芳太郎と一緒にたまには打ち積けた話をすることもあった。隠し立てのない芳太郎の口から、お袋や親父の噂を聞き出すのも興味があつたし、芳太郎の関係した女のことを知るのも面白かつた。

「お前が出て行けア、己だつて家にアいねえ。」と、芳太郎は駄々つ児のように言い出した。

そんなところを見つけると、お袋はすぐに厭な顔をした。

「ふざけていちゃいけないよ。」と、お袋は呶鳴りつけて、お庄に用事をいいつけた。

酒で頭脳の爛れたようになっている芳太郎は、汽車のなかでも、始終いらいらしていた。そして時々独り語のような棄て鉢を言つた。金を掻つ浚つて家を逃げ出してくれるとか、お袋を撲り殺して高飛びをするとか、そんなことをすらお庄の耳元で

口走った。これまでに、酔って正体がなくなると、芳太郎は、時々そうした^{くちぶり}口吻を洩らした。

お庄は暗い窓の外を眺めながら、顔に笑っていた。

新宿まで来た時、お庄はとうとう一緒に降りることにした。そうでもしなければ、男^まを撒くことが出来ないと考えた。

停車場を出ると、二人は並んで暗い片側町を歩いていた。芳太郎は時々^{きちがい}気狂の発作のように、お庄の手を引っ張って、明りの差さない草ツ原に連れ出した。足場の悪いくさむら草叢にはところどころに水溜りが、ちらちらと空明りに黒く光った。お庄はけたたましい声を立てながら、芳太郎の手に掴まってそこを^{わた} ^{あたり}涉った。四方はシンとしていた。

広い通りへ出ると、両側の^{ぎろう}妓楼の二階や三階に薄暗い^{ガスとう} ^{とも}瓦斯燈が点れて、人影がちらほら見えた。水浅黄色の^{のれん}暖簾のかかった家の入口からは、^{まわ}周りに色硝子の障子の^{はま}嵌った中庭や、^{つや}つるつるした古い光沢のある廊下段階子などが^{みすか}見透された。芳太郎は時々そこらの門口に立ち停った。

「今夜中に、私きつと帰ってよ。」と、お庄がやつと芳太郎と手を分つたのは、それから大分経ってからであった。

お庄は大木戸から俵をやとって、荒木町の方へ急がせた。二度と帰って来るような気がしていなかった。

七十四

荒木町の家では、^{あね}従姉が相変らず^{いろつや}色沢の悪い顔をして、ランプの薄暗い茶の間に

坐っていた。いつも気が浮き浮きしたということもないあね従姉の、髪一つ綺麗に結った姿をお庄は見たことがなかった。

「またどうかしたんですか。」と、お庄はき氣遣わしげに訊いた。

「いいえ。相変らずぶらぶらしているもんですからね。」と、あね従姉はぼきぼきしたお庄の顔を眺めた。行つた時から見ると、どこかお茶屋風になっているのも目についた。

浅山は、このごろしばらく帰朝している姉婿の家へ行つていて、留守であつたが、台所にいた伯母は、手を拭きながらすぐに傍へ寄つて来た。

「お前もそうしていいところへ片着いて、どんなにしあわせ幸福だか知れやしないわね。」

と、おしゃべり饒舌の伯母は独りでお庄の身の上をうらやましがった。浅山の月給が細いのに、娘が始終寝たり起きたりしているので、長いあいだ胃が持病の自分が、六十幾いくつ歳になつてこうして立働きもしなければならぬという愚痴が、じきに始まつた。

「私が寝てばかりいるもんだから、浅山にもあね氣の毒しおでね。」と、従姉もあね萎しおれて言つた。

浅山が、今の役所をや罷めて、今度の帰朝を幸いに姉婿の方へ使つてもらふ運動をしておやこいるのだが、それがうまく行きそうにもない様子が、母子の口から洩れた。

お庄は伯母とあね従姉が、着るものを着ないでも、膳の上にうまいものの絶えたことのないのを知つていた。伯母が浅山と同じに、刺身などに箸をつけながら、ちびちび晩酌をやっていることもめずらしくなかつた。お庄はこの人たちの貧乏するのに不思議はないと思つた。

「……少しなこうど媒介人だまにあね瞞だまされたようですよ。」と、お庄は帯の間から蓑入れを取り出

うがいたばこ
して、含嗽菘をふかしながら言い出した。

「始終家が揉み合っているものですし、あの人だつてちつとも柔順しかありませんよ。」

「それでもいい男だという話じゃないかえ。——酒癖でも悪いと言うのかい。」と、伯母は切り髪頭の、長い澗びた顔を顰めながら言った。

お庄は思っていることを、話すことも出来なかつた。

芳太郎を嫌っているお庄の心持は、従姉によく解つた。

としより
「老人の思うようじゃないんですよ。」と、従姉は、お庄の顔をじろじろ眺めながら、薄ら笑いをしていた。

「でもまア辛抱していさえすれば、あの家も始終はお前たち夫婦のものだでね。」

「そうは言つても、欲ばかしにかかつてもられませんよ伯母さん。」

すし
鮎を少しばかりおごつて、茶呑み話にごまかしていながら、お庄はしみじみした話もしずに、やがてそこを出た。

「浅山から、中村さんによく話してもらつて上げるからね、自棄を起さないで、まア当分辛抱した方がいいでしょう。」

帰りがけに、従姉はお庄の様子を気遣いながらそう言った。お庄がお照の稼ぎに行っている茨城の方へでも行けば、自分の体一つぐらいは、自分の腕一つで、どうにでもして行けると言つたことが、従姉にも気にかかつた。

「今夜は家へお帰りよ。心配さしても悪いでね。」と、伯母も門口まで送つて出ながら行つた。

外はもう更けていた。そこらの芸妓屋や、劇場の居周りも静かであつた。お庄は暗

い町をすごすごと歩いてしたが、どこへ行くという^{あて}的もなかった。

伝馬町の方へ出ようとする途中で、二、三度車夫に声をかけられたが、乗る決心もつかぬうちに、皆なやり過してしまった。

停車場へ来たのは、もうよほど^{おそ}晩かつた。構内には、疲れたような人の姿がちらほら見えていた。お庄は薄暗い隅の方のベンチに腰を^{おろ}卸しながら、上り下りどつちの切符を買おうかと思案していた。

七十五

その晩お庄は本郷の方に泊った。

ちょうど正雄が来合わせていて、^{ふたり}姉弟は久しぶりで顔を合わした。正雄はこれまでも二度ばかり親方を取り替えた。体の弱いので、あまり仕事の^{はげ}劇しい家では、辛抱がしきれなかった。お庄はそのたびに弟をつれて、前の主人へ話をつけたり、新しい洋服店へ交渉したりした。今の家は^{おんなあるじ}女主人であつた。その主人はお庄のところへも遊びに来て、一緒に花など引いたこともあつた。

正雄は脚気で蒼い顔をしていた。お庄の変つた様子を見て、にやにや笑っていたが、お庄も弟の様子がめつきり落ち着いて来たと思つた。

^{いしや}「医師が転地しろと言うそうで。」と、母親は一番体が弱くて可愛い正雄のことで

^{さつき}先刻から気を揉んでいた。

「しばらく田舎へでもやらずかと思うけれど……そうすれば叔父さんも一緒に行くと言
うでね。——叔父さんも^{つゆ}梅雨が体に^{さわ}障つたようで、あれからずつと工合が悪いで、ど

うでも田舎へ帰ると言つて、今その支度中さね。」母親は火鉢に^よ凭りかかつていながら、屈托^{いじ}そうな顔をして、火箸で火を弄^{いじ}っていた。

家の^{さび}荒れている様子が、ひしひしお庄の胸に感ぜられた。お庄が行くとき^{やと}傭い入れた女中の姿も見えず、障子の破けた台所の方もひっそりして、二階にも^{さま}人氣がなかった。掃除ずきな自分がいなくなつてから、そこらの^{さま}だらしなく汚くなつた^{さま}状も、心持悪いようであつた。

この家を早晚^{さま}まなければならぬことは、行く時分からお庄にも解つていたが、また帰つて来てここを盛り返したいような気も、時々しなくもなかつた。

母親は、ここの雑作が売れ次第、借金を少し片着けて、それから田舎へ行きたいと言つている叔父のことや、お庄が行つてから、ここへ寄り着く人もめつきり少なくなつたことなどを言い出した。叔父が会社にいた時分の連中も、近ごろはとんと顔出しをしなくなつたし、ちよいちよい金を貸してあつた人たちも、^{かんざら}ともしなかつた。

そんな話が長く^{おやこ}続いて、母子の目はいつまでも^さ冴えていた。

「姉さんの家はどんなとこだえ。」と、弟はもう^{まきたばこ}捲^{ふか} 蓆などを喫して、お庄に訊いた。

「今までのように、^{あし}不断にお鳥目を使つたり何かしちやいけないからつて、今阿母さんともその話をしていたのさ。」

「それアそうさ。私だつてそんな^{ばか}白痴じゃないよ。」と、お庄は磯野との関係以来、自分が^{みんな}さもだらしのない女のように、^{みんな}衆に思われているのが切なかつた。誰よりも一番苦勞をして来たことも考え出された。

「見かけによらない、私はこれで苦勞性ですよ。」と、お庄は長い指に蓆を揉んで、煙

管に詰めながら言った。話そうと思つて来たことを、二人の前に打ち明けることも出来なかつた。

「何だか知らないけれど、皆な運が悪い。」と、母親は、この家が畳まれてからの、自分の体の行き場のないことを^{こぼ}零した。

「湯島で来ておれと言うだけけれど、たびたびのことだし、そうも行かないでね。」

^{みんな}衆のまごついているのを、田舎に傍観している父親のことが、また噂された。

^{すた}廃^{かぶ}株の買占めで^{しくじ}失敗つてから、家のばたばたになつた本家の後始末に気骨を折つている父親が、このごろは皆なの思うほど気楽でもないことは、こつちへも解つて来た。本家が銀行から差押えを喰つて、ぴたびた^{くら}庫を封せられ、若い^{あるじ}主が取り詰めたようになって気の狂い出したという消息の伝わつたのは、お庄が行つてから間もないことであつた。

^{あたま}頭脳に異状のある本家が、わざわざ町から診察に来た^{いしや}医師の頭を、^{なぐ}撲り飛ばしたということを言い出して、正雄もお庄も、腹を抱えて笑つた。

宵から奥で寝ている叔父が、目をさましたと見えて、力ない^{せき}咳の聲が洩れて来た。

七十六

家へ帰つて行つたのは、その翌々日の午後であつた。それまでお庄は伯母の家へ行つたり、親しい近所の家を訪ねたりして遊んでいた。伯母の家では、相変らず皆と花など引いたが、その間も心は始終今の家に辛抱していいか悪いかということについて思い惑うていた。

^{さき}「前途に見込みがないから、私もうあすこを逃げてしまおうかとも思つているんで

す。」と、お庄は思い断^きつて伯母や糺にも、自分の心持を打ち明けてみたが、二人ともあまり真面目に聞いてもくれなかった。

「そんなことを言つて、今家へなんか帰つてどうするつもりだい。」と、伯母は頭ごなしに言つて、先の家の深い事情などは、ろくろく考えもしないらしかった。

「むやみなことをして、中へ入つた浅山の顔を潰^{つぶ}すようでも悪いじゃないか。」と、糺も言つた。

始終聞きたい聞きたいと思ひ続けていた磯野やお増のことを、お庄は時々言い出そうとしたが、それも詳しくは二人の口から聞き出すことが出来なかった。

「何だかまた別れたとかいう話だぜ。」と言つて糺は笑つていた。

芳村が前からよく行きつけていた碁会所の娘と約束が出来て、そこへ荷物を持ち込んで引越すようになってから、お増がまた気を焦^{あせ}つて、このごろでは磯野の手を離れて、芳村との関係が旧^{もと}へ復^{かえ}つたとか、芳村がお増をどこかに隠しておくとかいうことだけは、糺の話でも解つた。お庄は磯野と自分との縁が、またどこかで繋がれていそうな気もして、もどかしいようであつたが、こつちから訪ねて行く心にもなれなかった。

お庄は、叔父がいよいよ田舎へ帰るようになったら、ちよつと報^{しら}してほしいとそのことを母親に頼んで帰つて行つたが、途中で小石川の伝通院前の赤門の家で占いの名人のあるということを思い出して、ふとそこへ行つて観^みてもらふ氣になつた。占いやおみくじ神籤はこれまでも、たびたび引いて見たことがある。磯野との縁が切れそうになつ

た時も、わざわざ水天宮で御籤^{みくじ}を引いた。その時の籤はそんなに悪くもなかつたが、

三十過ぎるまでは、心に苦勞が絶えないというようなことは、一、二度売^{うらない}卜者にも聞

かされた。着ることや食うことには大して不足もないが、^お処るところがまだ決まらない
というようなことも言われた。

赤門ではその日がちょうど^{やすみ}休日であつた。お庄はさらに伝通院横にある、大黒の小
さいお寺へ行って、そこに出張つている^{ぼうず}法師に見てもらうことにした。

派手な衣を着けて、顔のてらてらしたその^{ぼうず}法師は、じろじろお庄の顔を見い見い
^{すいしょう}水晶の^{じゆずだま}数珠玉などを数えていたが、示されたことはあまり望ましいことでも

なかつた。法師は古びた易書を繰つて、^け卦などを読んで聞かせた。

「あなたの心は、今二つにも三つにも迷っている。」と、言つて、お庄が亭主運のまだ
決まっていないことや、今いる場所と動こうとしている方角のよくないことなどを説い

て聞かせた。どちらにしても、^{あが}当分足掻きが見つからないということだけは確かめられた。

お庄は銀貨を一^{ひとつぶ}顆紙に^{ひね}捻つて、傍に出してあつた^{さんぼう}三方の上に置いて、そこ
を出て来た。出る時、俵で乗り着けて来た一人の貴婦人に行き逢つた。その婦人は
^{しゆちん}繡珍の^{あずまぶくろ}吾妻袋を提げて、^{ひふ}ぱつとした色気の羽二重の被布などを着け、手にも

宝石のきらきらする指環を^{いくつ}幾個も^は嵌めていた。夫人は^{ぼうず}法師に目礼をすると、すぐに
どたばたとお庄らの控えている傍を通つて、本堂の奥の方へ入つて行つたが、それを見
^{ぼうず}受くる法師のしおしおした目元には、^{わるごす}悪狡いような笑いが浮んでいた。

お庄は何となしもの足りぬような暗い心持で、夏の日ざしの強い伝通院前の広い通り
を、片蔭づたいに歩いていた。

「お前は帳場に見張りをしていておくれ、芳が来てまたお鳥目を持ち出すといけないから。」と、お袋にそう言われて、お庄は店の方へ来て坐っていた。

じい
爺さんは二、三日東京へ出ていて、留守であつた。お庄が帰つて来る前に、母子三人のあいだに ^{おおも}大揉めがあつて、お袋も爺さんに ^{あたま}頭脳を ^{なぐ}したたか撲られた。お庄に

は深い事情の解りようもなかつたが、牛込の自分の弟のところに ^{おやこやっかい}母子厄介になつ

ている ^{おやじ}親爺の ^{つれあ}添合いや子供のことから、時々起る ^{ごたくさ}紛紜が、その折も二人の間に起つていた。お庄が四ツ谷へ行ツつたきり帰らなかつたことも一つの問題であつた。芳太郎がそのことで暴れ出して、二人に突つかかつて行つたのが、一層騒ぎを大きくした。

お庄が帰つて来た時分には、家がひっそりしていた。お袋は頭が痛むと言つて結び髪のまま氷袋をつけて奥で寝ていたし、芳太郎もそこらで ^{やげざけ}自暴酒を飲んで ^{ある}行いて家へ寄りつきもしなかつた。

奥の客座敷で、お庄は年増の女中からその話を聞いて、体がぞくぞくするほど厭であつた。お庄を速く呼び ^{かえ}還せと言つて、芳太郎がお袋と長いあいだ ^{もんちやく}捫着したあげくに、争いが爺さんの方へも移つて行つた。お袋が死んでしまうと言つて、素足のまま帯しろ裸で裏へ飛び出して行つたことや、 ^{きちがい}狂気のように爺さんに ^{むしや}武者ぶりついて泣いたことなどを、女中は手真似をして話した。

「お神さんが独りでいさえすれば、何のことはないんでしょうがね。」と、世帯崩しのこの女中は、婆さんの男意地の汚いのを憎んだ。

「自分じゃ ^{ちいさ}稚い時分から育てた芳ちゃんが、まんざら可愛くないこともないんでし

ようけれどね、やっぱりあの爺さんと別れられないんでしょうよ。お爺さんだつて、今
となつちや^{ただ}空手じゃ出て行きやしませんからね。」

お庄は、お袋からは何のことも聞かされなかった。

今日もお袋は、朝のうち料理場や帳場の方を見廻っていたが、まだ顔色が悪く、髪も
取り乱したままであつた。そして掃除がすむと神棚へ切り火をあげて、お庄と一緒に
ちやぶだい
餉 台 に向いながら、これまでに自分の苦勞して来た話などをして聴かした。

「何も辛抱ですよ。辛抱気のない人間はどこへ行つても駄目だよ。」と、お袋は、東京
へ行つて二日も帰らなかつたお庄の心が、まだ十分ここに落ち着いていないのをもどか
しく思った。

昼からお袋は、また頭が痛むと言つて奥へ引つ込んで行つた。

三時ごろ、お庄は帳場の蔭で、新聞の三面記事に読み^{ふけ}耽りながら、そうした世間や
自分の身のうえなどをいろいろに考えていた。広い通りには折々荷車が通つて、^{はしや}燥
ぎきつた砂がぼこぼこと立つた。箆笥や鏡、嫁入り道具一式を売る向いの古い反物屋の
前に据えた^{てんすいおけ}天 水 桶 に、^{かつか}熱 そうな日 が 赫々と照して、^{ほこりぶか}埃 深 い陳列所の硝子
のなかに、色^さの褪めたような帯地や^{ゆうぜん}友 染 が、いつ見ても同じように飾られてあつ
た。来た当座は寂しいその店などは、目にも留らなかつたが、見馴れるにつれて、思
ひのほか奥行きのあることも知れて来た。^{ほのぐら}幽 暗 い帳場格子のなかで、^{そろばん}算 盤 をはじ
いている四十ばかりの内儀^{かみ}さんも、そんなに田舎くさくはなかつた。

^{みせさき}店 頭 まで来てちよつと立ち停つて、そのまま引き返して行つた洋服姿の男が、ふ
と目についた。新しい^{むぎわら}麦 稈 帽子を着て、金縁眼鏡をかけていた丸顔の横顔や様子

が、どうやら磯野らしく思われた。お庄はここを^{のぞ}覗かれたような気がして、胸がどきりとした。

やがて門の方から奥庭へ入って行く男の姿が、目に入った。男は庭の真中に立って、うそうそ家のなかを見廻していた。お庄は帳場格子の蔭に深くうつむいてしまった。男は確かに磯野であった。

七十八

「お客さまが若い方のお神さんに、ちよつといらして下さいってそうおっしゃるんですよ。」と、一人の女中が菘盆などを運んで行つてから、やがてお庄を呼びに来た。

お庄はその時帳場を離れて、料理場から物置の方へ出ていた。

「私に。」と、お庄はじめじめした物置の蔭に積んである^{まき}薪に^{もた}体を凭せていながら、胸を騒がせた。

「あの人私を知っているとでも言うの。」

「何ですか、ただお目にかかりさえすれば解るからって……。」

お庄はそこから庭の方へそつと出て行つて見た。あれほど不人情な仕向けをしておきながら、のこのこ嫁入り先へやつて来た男の愚かしい心持が腹立たしいようであったが、床柱のところに^{あぐら}胡坐を組んで、^{うちわ}団扇遣いをしているその姿が目に入ると、何のことも考えていられなくなった。

「しばらくだつたね。」と、磯野に挨拶されると、お庄は胸が一杯になって、涙が^わ湧き立つようににじみ出て来た。

磯野の目にも涙が溜っていた。

「どうして来たんです。」と、お庄はめずらしくチヨツキに金鎖などを光らせている男の様子を見ながら、大分経つてから、やつと口を利くことが出来た。ここへ来るために

^{みなり}わざわざこんな身装を拵えたのであらうと、お庄はしつくり体に合っていない洋服な

どがおかしかった。

「僕は実に悪いことをした。お庄ちゃんにも済まなかった。」と磯野は気弱そうな調子で言い出した。

お庄がここへ来たことが、磯野の耳に伝わった時分には、お増はもう天神下の家にもいられなかった。磯野も、時のはずみ機はずみでしたことが振り顧つて見られたし、お増にも、始終変つてゆく男の心の頼みがたいことが解つて来た。学資もろくろく送つてもらえなくなっていた磯野を世に出すまでには、また新しい苦勞も重ねなければならぬということも考えられた。

暮会所の若い娘と一緒に歩いている芳村の姿を、天神の境内で見たとき、お増は芳村に鼻を明かされたような気がした。

「芳村さん、あなたは随分ね。」と、お増はその時追すがいすが縫すがるようにして芳村の後から声かけた。

芳村は黙つて行き過ぎようとしたが、後悔の影のさしている女の心をいじらしく思った。

「ちつと遊びにおいで。」と、芳村は娘と離れて、磯野の消息をたず訊たずねなどした。

芳村がお増を自分の方へ引きつけようとしていることが、磯野の前に何事をも包み隠さぬお増のくちぶり口くちぶり吻くちぶりでも解つた。二人は磯野の叔父の家の二階でよく言合いをした。毎

あたま日頭あたま脳あたまのふらふらしている磯野は、気ままなお増に責められて芳村わへ詫わび手紙をさえ書いて送らせられ、お増と別れるについて、手切れの金の算段にも出歩かなければならなかった。

「僕はあの時の罰が来て、実にひどい目に逢わされた。」と言つて、磯野は涙を出しながら愚痴をこぼ零こぼした。

お庄は終いに笑い出した。

「お庄ちゃんも、ここに辛抱おしなさい。この家には、相当に金もあるというじゃないか。」と、磯野は ^{ハンケチ} 手で眼鏡を拭きながら、お庄の顔を眺めた。

「どうですか。何だかあんまり面白いこともないんですけれど。」と、お庄は自分の立場を打ち明ける気にもなれなかった。

「しかし変だね。何にも取らないで話ばかりしていちゃ。」と、磯野は気にし出した。

お庄はそうして長く坐り込まれても困ると思った。母屋の座敷で昼寝をしている芳太郎のことも気にかかったが、とにかく酒だけは出すことにした。しばらくしてから、卵焼きに ^{のり} 海苔などが酒と一緒に ^{うわぎ} 上衣を脱いで ^{くつろ} 寛いでいる磯野の前に持ち運ばれた。

七十九

磯野がちびちび酒を飲んでいる間も、お庄はちよいちよい母屋の方を気にして覗きに
来た。磯野は切り揚げそうにしては、また思い出したように ^{ちょうし} 銚子をいいつけいいつ
けしたが、お庄が傍ではらはらするほど、気が ^い 熬れて話がこじくれて来た。

「僕はここの家の人に紹介してもらおう、そしてお庄ちゃんのこと頼んで行きたいと思うが悪いかね。」磯野は ^{かくし} 衣兜のなかから、帳場へおく祝儀などを取り出して、お庄の前におきながら言った。

「そんなことをしなくともいいんですよ。かえっておかしゅうござんすから。」と、お庄は押し戻した。

「芳太郎という人にも、ここでちょつと逢つて行こうじゃないか。僕は第三者として、お庄ちゃん夫婦のためにいささか健康を祝したいと思う。」と酒の廻った磯野は芝居じみたような調子で、真面目に言い出した。

「それもおかしいでしょう。家は今少しごたごたしているんですよ。」と、お庄は^{あそ}遊

^{にんはだ}び人肌のようなところのある芳太郎を、磯野に見らるるのも厭であつた。

日が^{かけ}蔭りかかる時分に、磯野はやつと帰つて行つた。

お庄が帳場へ勘定をしに行つた時、いつの間にか起き出して、庭の植木に水をやって
いた芳太郎が、橋廊下の下の方にたたずんで、^{ふか}菘を喫しながらうつとりした顔をして

いた。廊下に^{ぞうきん}雑巾がけをしていた年増の方の女中が、手を休めて手擦りに^{もた}凭れな
がら、芳太郎と何やら話しているところであつた。

「お客さまはもうお帰りですか。」と、女中は落ちかかった着物の裾を帯の間へ押し込
んで、また働きはじめた。西日を受けた廊下の板敷きは、砂埃でざらざらしていた。

「ちよいと勘定なんですがね。」と、お庄は立ち停つて、芳太郎に声かけた。

帳場へ上つて来た芳太郎の目には不安の色があつた。

「お前にあんな親戚があるなんて、何だかおかしいじゃないか。」と、芳太郎は書付け
を書きはじめながら^{なじ}詰つた。

「私にだつて親類がありますよ。」と、お庄は^{あか}顔を赧めながら言つた。

「それじゃお前の何に当る人だ。」

お庄はへどもどして、もう口が利けなかつた。目にも涙が出た。

「お前の親類が、座敷へあがつて酒を飲むなんて、変じゃないか。」

「え、だから皆さんにもお目にかかるつて、そう言つたんですけれど、阿母さんは加減
がわるいし、あなただつて、今まで^{やす}寝んでいらしたじゃありませんか。またそれほ
ど近しい親類でもないんですもの。あの人がいけなくここを通つて、ちよつと寄つ
たまでなんです。」

「うまく言つてら。四ツ谷へ行つて聞いて見るからいいや。」

「え、いいんですとも。私そんな嘘なぞ吐きやしませんよ。」

しばらく言い合ったが、お庄は秘し^{かく}おお^{おお}逐^{おお}せないような気がした。そして^{たもと}袂^{たもと}で顔
ににじみ出る汗を拭きながら、黙って裏口の方へ出て行った。

女中に呼びに来られて出て行った時分には、磯野は書付けを前に置いて、座敷にぼんやりしていた。お庄は目に涙を一杯溜めていた。

「どうかしたの。」と、磯野は薄笑いをしていた。しばらくしてから、勘定が足りなくて、磯野のもじもじしていることが解った。

「勘定なんぞどうでもいいんです。」と、お庄は邪慳^{じゃけん}そうに言ったが、磯野はまだそこにもじもじしていた。

八十

磯野を送り出してから、お庄はしばらく座敷にぼんやりしていた。

磯野はまだ話したいこともあるから、金助町の方へ来たら、一度訪ねてくれと、靴の紐を結びながら言っていたが、お庄は磯野のここへ来たことを、伯母などの耳へ入れたくないと思つた。十八の年に初めて男に逢つたのが磯野で、それから三年ばかり関係していた。田舎から出て来てからは、磯野も比較的落ち着いて勉強していたし、お増の事件さえなければ二人の交情^{なか}は何のこともなく続けられたかも知れなかつた。磯野も始終^{のら}の移つて行く男だから、あれで別れてかえつてよかつたようにも思えたが、やきもきしてこつちから騒ぎを大きくした傾きのあつたのがくやしかつた。

お庄はそこに坐つて少しばかり銚子に残っていた酒を注いで、独りで飲んだ。器などの散つた部屋には今まで差していた西日の影が消えて、野良くさい夕風が吹いていた。お袋の耳へ入れば、どうせ一騒ぎ持ち上らずには済まないだろうし、もう長くはここにもいられないような気がしていた。書付けばかり持つて帳場へ行くのも厭であつた。

お庄は勘定前を合わそうと思つて、帯の間の財布から自分の小遣いをさらけ出して、磯野の置いて行つた祝儀と一緒にしているところへ、芳太郎が入つて来た。お庄は急いで財布を帯の間へ挟んだ。

いろ
「情人でも何でも無いものなら、お前が自腹を切る謂われはないじゃないか。家だつてお前の親類の人から、勘定を取ろうとは言やしまいし。」芳太郎はお庄の側へ来て、あぐら
胡坐を搔いていながら言つた。もう飲口を捻^{ひね}つて二、三杯^{あお}呷^{あお}つて来たらしかつた。

「それアそうですけれどもね、そうしないと私も何だか厭ですから。」とお庄は気味悪そうにそこらを片着けはじめた。

「まアそんなことはどうでもいいや、お前にごまかされるような己^{おれ}じゃないんだからな。」

「それはそうですとも。私もこんなつもりでこちらへ来たんじゃないんですよ、話と実際とは、随分違つていたんですからね。」

がちやがちやと軍刀の音をさして、いつも来て飲む大隊の方の将校が、二人門の方から入つて来て、縁側へ腰かけて靴を脱いだころには、芳太郎もお庄も大分頭が熱していた。芳太郎はそこにあつた盃洗^{はいせん}を取つて投げつけるし、お庄は胸から一杯に水を浴

びながら、橋廊下の方へ逃げて行つて、ハンケチ^{ハンケチ}で頸首^{えりくび}などを拭いていた。芳太郎はまた空の銚子を持って、部屋を飛び出した。

ここの家の様子をよく知つている、頭の禿げた年取つた方の将校は、ふらふらと追つかけて行く芳太郎の姿を見ると、次の部屋から出て来て見た。

「おいおいどうしたんだい。」と、その将校が声をかけた時分には、お庄はもう素足で庭へ飛び出していた。

暗い物置のなかへ逃げ込んだお庄が、料理場から引き返して来た芳太郎に隅の方へ押

えつけられて、目のうえで ^{さしみぼうちよう}刺身庖丁を振り廻されているところを、将校も母親も駈けつけて行って、やつと取り押えた。刃物をぎ取られた芳太郎が、^{はだ}披けた胸を苦しげな荒い息に波立たせながら上へ引つ張りあげられると、お庄も壊れた^{かみ}頭髪を手で押えながら ^{まっさお}真蒼になつて物置を出て来た。そこらはもう暗くなつていた。

その晩、牛込から親父が呼び寄せられた。

^{おど}「脅かすんだよ。私なんぞ慣れツつこで平気なものさ。」と、お袋はしばらくぶりで帰つて来た爺さんと、酒を飲みながらお庄に言つた。

「こんなことは、四ツ谷なぞへ行って、あまり ^{しゃべ}弁つちやいけないよ。」お袋はこう言つてお庄に口留めをした。

芳太郎も酔いがさめると、早くから奥へ引つ込んで寝てしまった。

八十一

爺さんが来て、また帳場に頑張ることになつてから、芳太郎はしばらく四ツ谷の ^{なこうど}媒介人の家に預けられた。

その話が決まるまでには、お庄も ^{なこうど}媒介人から事をわけていろいろに言つて聴かされた。火災保険の ^{おもだ}重立ちの役員であつた ^{なこうど}媒介人の中村の言うことには、お袋などの ^{おもわく}所思とはまた違つたところもあつた。中村は爺さんやお袋やお庄の顔を ^{そろ}揃えている折にも、自分の考えを述べて、爺さんと ^そ反りの合わない芳太郎を、お庄と一緒に一時自分の家へ引き取ることに話を ^{まと}纏めた。

忙しい時は、ちよいちよい手伝いに来るという約束で、お庄が中村の家へ移って行ったのは、病気で困りきっていた金助町の叔父が、ちょうど上野から田舎へ立った日の夕方であった。お庄は正雄と一緒に停車場まで見送ってやった。

叔父の家は、その三、四日前に畳まれてあった。雑作も棄売りにして、それで滞っていた払いをすましたり、自分もいくらか懐へ入れて、町に涼^{すずけ}気の立った時分に、湯島の伯母の家を俵で出て行った。

叔父は田舎へ行っても、快く自分を迎えて、養生をさしてくれそうな隠れ家の^{あて}的^的ともなかった。東京で世話を^なしてやった友人が町でかなりな歯科医の玄関を張っている、そこへ行くか、亡^なくなった妻の実家の持ち家が少しばかりある、その中の一つを借りて^{きが}起臥するかよりほかなかった。どつちにしても、こんな病人に来て寝込まれるのを迷惑がるのは、解りきっていた。

田舎でみつちり養生をして、^{なお}癒^癒つたらまた出て来て、運を盛り返そうという心組みのあることは、瘦^やせ衰えた叔父の顔にも現われていた。

「私はまだ結核にはなっておらんつもりだで——。」と、叔父は立つ前にもそう言って、一人では道中が気遣われると言って危ぶむ母親や伯母に笑って言った。

「そんなこといって、汽車のなかで血でも吐いたらどうすらい。」と、母親は弟をたしなめた。ことによつたら糺か繁三に行つてもらつてもいいし、正雄がついて行つてもいいと思つたが、強^しいて勧めもしなかつた。

「工合が悪かつたら、すぐ宿屋へ入つてどつちへでも電報を打たつし。」と、伯母も言い添えた。

叔父の手荷物と言つては、書生で出て来た時分ほどの物すらないくらいであった。時計や指環などもとつくに亡くなって、汚れたパナマだけが、京橋で活動していた時分の

のこ
面影を遺していた。そのパナマも、遊びに来る糺の友人に買ってもらおうとしたくら
いであつたが、かいね 買値を言えば ちら われるほどであつたので、叔父は気持を悪くして、
それだけは 冠 かって行くことにした。

正雄もお庄も、型の古いその帽子を冠って、三等客車に乗り込んで行く、叔父の、
やつ ば
窶れて耄けたような姿を見て、後からくすくす笑つていた。

叔父はお庄のことなどは、口へ出して聞きもしなかつた。出来る時分にあまり世話を
しておかなかつたことが、心に省みられたからでもあろうし、このごろ様子や心持のす
つかり かわ めい
渝った 姪の身のうえを知るのも いと 厭わしいように見えた。お庄も自分のこと
を言い出すどころではなかつた。

「叔父さんには、もう逢えやしませんよ。」と、お庄はプラットホームを歩いていなが
ら、帰りに弟に話しかけた。弟はまだ売り損ねたパナマがおかしいと言つて思い出し笑
いをしていた。

送つた人たちと一緒に、お庄は湯島の家へ引き返して来たが、今日は中村の家で初め
て泊る日だと思つたと、うんざりした。ひとまと
纏めにして出て来た、鏡台や着替えを入れ
た行李などが、もう運び込まれているころだとも思つた。

「ああなるのも自業自得でしかたがない。」と、母親らは、まだ茶の室^まで茶を呑みなが
ら、今立たしてやつた叔父の噂をしていた。

お庄もそれに釣り込まれながらも、時の移るのが気が気でなかつた。

八十二

ほんとう
「真実におつかない人ですよ。」と、お庄は立ち際に、伯母と母親の前で、子の間

芳太郎に刃物で追っかけられた話をしながら言い出した。お袋も一度は斬^きりつけられて
けが
怪我をして、長いあいだ奥州の方の温泉へ行っていたということも話した。

「それじゃまるで話が違うがな。」と、母親は顔の色を変えていた。そんなところへお庄を取り持った四ツ谷の人たちの心持も疑わしいと思った。

「お前が客の前へ出るが悪いとって、そんなことをするだかい。」と、伯母も訊いた。

「まあそうなのでしょうね。婆さんはまた私がそうしないと機嫌が悪いんですの。あの人の腹では、芳太郎が可愛くないことはないんでしょうけれど、どうしたって血を分けた子じゃないんですから、いろいろお爺さんに言われると、その気になるんでしょうよ。やっぱり欲なんですね。」

「その^{あんばい}塩梅^{むすこ}じゃ、^{おとな}子息が^{しんしょう}柔順しくしていたって、いつ^{しんしょう}身上を渡すか解らないと言ったようなものせえ。」母親は望みがなさそうに言った。

「それでいて、私にはいろいろまいことを言つて聴かすんですの。」と、お庄は長く客商売をして来たお袋の自分に対する心持を話した。

「お前のような娘が一人あれば、こんな^{しみ}吝^{しみ}つたれな料理屋なんかしていやしないなんて、そんなことを言うんですよ。」

「ああいう人は、女さえ見れアじき金にしようと、そんなことばかり思っているで。」

と、伯母は^{あざわら}冷笑^{あざわら}した。

母親と伯母のあいだには、また門閥の話が出た。田舎にいる父親が、まだ得心していませんだったので、籍を送らずにおいたことが、かえつて幸いであつたようにも思えた。

「まア浅山ともよく相談して見るだい。片輪にでもされてから、何を言つて見たつて追つ着かない話だで。」伯母は心配そうに言った。

お庄は家のなくなつた母親のことも気にかかつた。どうせ針仕事もあるから、お庄さえ辛抱する気なら、母親に来ていてもらつてもいいと言つていたお袋の^{ことば}言^{おも}を憶^{おも}い

出したが、^{かいしょう}効性のない母親が、手も口も^{やかま}喧しい、あの人たちのなかにいられ
そうにも思えなかった。自分一人の体さえ、いつどうなるか解らないと思った。

「阿母さんこそ、田舎へ帰った方がよかつたんですよ。」と、お庄はいじめるように言
った。

こんなに行き詰まっても、母親がまだ田舎へ帰るのを厭がっているのがもどかしくも
思えた。

「正雄でも一人前にならにや、^{わし}私も田舎へ提げて行く顔がないで。」と母親は切なげ
に言った。

「その間、私は私でどこかお針にでも行っているでいいわね。」

「お針って、お安さあはどんな仕事出来るだい。」と伯母は手も遅く、気も利かない

母親のことを^{わら}嗤った。これまでに、お庄に突き放されると、母親は、そこからそこ
までへも、買物一つしに行くことが出来なかった。

お庄の帰ったのは、八時ごろであつた。婚礼後、芳太郎と一緒に、一度挨拶に行つた
ことがあるので、家の様子は大概解つていた。お庄はその少し手前で俵から降りて、途

中で買った手土産を^さ拵げながら入つて行つた。

家はかなり人数が多かつた。^{としより}老人も子供もあつた。お庄は一々それらの人に、

ていねい

町寧に挨拶をしてから、自分ら夫婦のに決められた奥の部屋へ導かれた。芳太郎は
ちょうど湯に行つているところであつた。

「どうもお世話さまでした。」と、お庄はランプを持って来てくれた細君に愛想よく礼
を言つて、まだ荷の片着かない部屋を見廻していた。

八十三

お庄もそこらを片着けてから、べとべとする昼間の汗を流して来ようと思つて、鏡台

ひきだし
の 抽 斗 にしまっておいた ぬかぶくろ 糠 袋 などを取り出し、縁づいてからお袋が見立てて

おきがた ゆかた
拵 えてくれた細い矢羽根の 置 型 の 浴 衣 に着かえた。

部屋はたツた六畳敷きで、一間の押入れに置き床などがあつて、古びた天井も柱もし
つかりしていた。住居とはかけ放れた方の位置で、前はすぐ広い荒れた庭になつてい

へいぎわ た き
た。崩れかかったような 堀 際 に、大きな 立 ち 樹 が暗く枝葉を差し交していて、裏通

りにも人氣がなかつた。浅山の話によると、ここはもと神田で大きな 骨 董 商 を
こつとうしょう
していた中村の父親の別邸で、今の代になつてから、いろいろな失敗が続いて、このご
ろではこの家すら抵当に入っているということであつた。芳太郎のお袋からも、少しは
借りているような様子もあつた。

あれやしき いごこち
この 廃 邸 の空気は、お庄にはあまり 居 心 がよくなかつた。部屋で声を立て
ても、奥から駈けつけて来てもらえそうにも思えなかつたし、庭も何だか陰気くさかつ
た。こんなところで毎日芳太郎と顔を突き合せているよりも、家で座敷の手伝いでも
していた方が、まだしも気が紛れてよかつたようにも思えた。

まわ
深い木立ち際から舞い込んで来た虫が、薄暗いランプの笠に淋しい音を立てて 周 り
を飛んでいた。お庄は帯を締めると、障子を 閉 じ て 閉 てきつて、暗い廊下の方へ出て行つた。

ま ちゃぶだい
だだツ広い茶の室では、大きな 餉 台 がまだ散らかつたままであつた。下町育ち

はだ しな ふく
らしい束髪の細君が、胸を 披 けて 萎 びた乳房を三つばかりの女の子に 脚 ませている

しゅうとめ かみ
る傍に、切り髪の 姑 や大きい方の子供などもいた。四十四、五の 頭 髪 の薄い

あるじ
主 は、古い折り靴からいろいろの書類を取り出してしきりに何やら調べていた。

ひっそりした広い門のうちには、ほかに汚い家が二軒ばかり明りが洩れていた。

淋しい屋敷町を通って、お庄が湯から帰って来たころには、芳太郎も途中で、一杯飲んで帰って来たところであつた。芳太郎は薔薇色の胸を披けて、ランプの蔭に引つくらかえつていた。細^{ほつ}そりした足の指^{ゆびさき}頭^{まつか}まで真紅であつた。

お庄は声もかけずに、そつと押入れから小搔捲^{こがいま}きを取り出して被^かけてやると、置き床のうゑに据えた鏡台の前に坐つて、銀杏^{いちようがえ}返^{びん}しの鬢^{びん}を直したり、白粉をつけたりして、やがてまた部屋を出て行つた。

その晩十時過ぎまで、お庄は茶の室^まで話し込んでいた。主^{あるじ}が寝てからも、細君に引き留められて、身の上^{ばなし}談^{しゅうと}などして聞かされた。舅^{しゅうと}がまだ世にあつた自分の

良人の放蕩^{ほうとう}が原因で、自分たちがとうとう賑やかな下町から、こんな山のなかへ逐^おいあげられたという細君の話では、この夫婦の若いころの豊かな生活の有様が想像され、子供が育つ時分から、だんだん落ちて来て、こうした貧乏世帯に慣らされるまでの細君の気苦勞も窺^{うかが}えるように思えた。

「私も、まさかあんな家とは思いませんでしたよ。」

お庄もつい引き込まれて、自分の家の事情など話しながら言い出した。お庄はこの人たちの心持も知つておきたいと思つた。

「あのお爺さんのいるうちは、とても丸く行かないだろうって、良人^{うち}でも心配しているんですよ。」と細君はこの婚礼についての主の苦心を語つた。これまでも、芳太郎がちよくちよくここへ囿^{かく}まわれていたことも言い出された。

「……あの人^かが、一番可哀そうですの。」と細君はこうも言つた。

芳太郎が、中村の知っているある通運会社へ出るようになってから、お庄も時々外へ出られるようになった。

これまで芳太郎は、中村から小遣いを強求^{せび}つては、浪花節^{なにわぶし}や講釈^{よせ}の寄席へ入ったり、小料理屋で飲食^{かなあみ}いをしたりして、ぶらぶら遊んでいた。昼は邸の裏の池に鉄網を張って飼^{あひる}つてある家鴨^{にわとり}や家鶏^{いじ}を弄^{いじ}つたり、貸し本を読んだりして、ごろごろしていたが、それにも倦^うんで来ると、お庄をいびつたり、擲^{からか}掬^{からか}つたりした。お庄がちよつとでも家を出ようとする、芳太郎が目の色がたちまち変った。家へ訪ねて来たお庄の前の男のことも始終言い出された。

木立ちの深いこの部屋は、昼もめつたに日光が通わなかった。三時ごろからしばらくの間斜^{はす}に差し込む西日の影は、かなり暑かった。お庄は芳太郎の昼寝をしている側で、自分もぐつたり眠^まつてしまうようなことが間々^まあつた。森^まに蝸^{ひぐらし}の聲が、聞える時分に、ふと汗ばんだ腋^{わき}のあたりに、涼しい風が当^あつて目がさめると、芳太郎もぼんやりした顔をして、起き直^つつていた。両手を上へ伸ばして、突^つ伏^ぶしになっていたお庄は、懈^{だる}い体を崩^なして、べつたりと坐^なりながら、大きい手で顔を撫^なでたり、腕^なを擦^さつたりしていた。通りに豆腐屋の聲などがして、邸のなかはひっそりとしていた。

体に悪^{いたずら}戯^{いたずら}をされたことに心づくと、お庄は妙に腹が立^たつた。子供のような芳太郎はお庄のぶよぶよした白^{もも}い股^{もも}のあたりに、何やら入れ墨のようなものを描^かいて、にやにやしていた。

「知っていますよ。」

お庄はその悪戯書きを見て見ぬふりをしていたが、終いに一緒に^ふ噴き出してしまった。

「叱られますよ。」とお庄はまた^{むき}本気になって見せた。その顔は^{あか}紅かった。

く、く、くと鳴いている^{とり}鶏の世話をしに芳太郎は裏の方へ出て行った。お庄も砂埃を拭き掃除しようと思つたが、初め来たころ日課にしていたようには働けもしなかつた。今日逃げようか、明日は出ようかという気が、始終^{あたま}頭脳にあつた。

浅山のうちでも、長く続かないことが解つて来た。いつかお庄が、夜その相談に行つたときも、夫婦は、もう^{あきら}断念めてしまったような^{こうふん}口吻を洩らしていた。

「私たちが黒幕にいるように思われちゃ、事が面倒ですよ。中村さんにも気の毒ですから、誰も知らない風にして、うまく逃げられたらお逃げなさい。そうすれば、私たちに^{あね}責任はないし、中村の顔も立つんですから。」と、^{あね}従姉は内々でお庄を^{そその}唆かした。

お庄はそれから、時々風呂敷に包んで、着物や何かを、^{あね}夜従姉の家へ持ち込むことにした。家からも、中村の家へ持ち運ぶように見せかけて、少しずつ取り出すことを怠らなかつた。中には以前磯野から受け取つた手紙を封じ込んだ^{しよ あ}背負い揚げや、死んだ叔母から伝わつた^{うたまろ}歌麿の絵本などがあつた。その絵本を、ほかの物と一つに、お庄は磯野と質に入れたこともあつたが、芳太郎のところへ来てから間もなく、やつと取り出すことが出来た。お庄はその値打ちのものだということを、磯野に聴いて知つていた。「まかり間違つて、茨城にいるお照さんのところへ訪ねて行くにしても、これを売りさえすれば旅費ぐらゐは出来る。」

お庄は中村や芳太郎の手からのがれたとき、^{せつば}切迫つまつて来れば、自分はどこへ行

く体が解らないと思つた。そして、その方がどんなに自由だか知れないとも考えた。

お庄は箆笥の底から持ち出して、^{あね}従姉の家へその絵本の入った^{てばこ}手匣を持ち込む時
も、そつと中から出して、^{かび}黴くさい絵を従姉に見せながら、その値踏みなどをしても
らつた。

八十五

「そう毎日ぶらぶら遊んでばかりいるのが、大体よろしくない。」世話好きな中村は、
会社から退けて来ると、^ひ芳太郎に何か^{こごと}叱言を言いながら言つた。

芳太郎はまだ庭で^{とり}鶏を^{せつちよう}折打していた。鶏は驚きと怖れに充血したような目をして、
きよときよとと木蔭をそつちこつち^に遁げ廻つた。木の下や塀の隅はもう薄暗くな
つていた。芳太郎は竿でその鶏をむやみに^お逐い廻して^{あるじ}いた。そこへ洋服姿の^主が、
縁から降りて来たのであつた。

二人で^{とや}鶏を鶏舎へ始末をしてから、縁側の方へ戻つて来ると、中村は愚かしい芳太郎
に、いつも言つて聞かせるようなことを、また繰り返した。
「まさか労働するわけにも行くまいが、何しろ若いものが遊んでいてはいけない。体が
怠けるばかりだ。お神に堅くなつたという証拠を見せるつもりで、一時こういうところ
へ出てみてはどうかね。」と、中村はその時自分の知っている通運会社のことを言い出
した。

芳太郎は荒い息をしながら、縁に腰かけて黙つて^{たばこ} 煙を^{ふか} 喫していたが、するうち
に手拭や^{せつけん}石 鹸を持ち出して湯に行つた。

お庄や細君——女連は土台の腐れた古い湯殿で毎日行水を使うことになっていた。

こうじまち
麴 町 の方の会社へ出るようになってから、芳太郎はこれまでのように朝寝をし
ていることも出来なかった。

せわ
店の 忙 しいとき、芳太郎は夜おそく帰るような日が二、三日続いた。

お庄は押入れの行李のなかに残っていたものを、もえぎ からくさ よの
萌 黄 に 唐 草 模様 の 四布風呂敷
に包んで、近所からやとつて来た俵に積み、自分もそれに乗って、晩方中村の邸を出
た。

大雨がざあざあ降っていて、外は真暗であつた。中村はちょうど留守であつたし、広
い茶の室で晩飯の ま ちやぶだい
餉 台 に就いている細君も としより
老人 もそんな荷を持ち出したこと
に気がつかなくつた。荷の中には、鏡台のような かとば
稜 張 った物もくるまれてあつた。お
庄は自分の部屋の縁側から、ばしばし あまだ ひさしぎわ つ
雨 滴 れのおちる 廂 際 に沿いて、庭の木戸
から門までそれを持ち出さなければならなかつた。夜具などは後でどうでもなると思つ
たが、少しばかりの軟かい着替えや手廻りの物を、芳太郎の目の前に のこ
遺 しておくのは
不安心であつた。

てすき
「阿母さんの手 隙 に洗濯や縫直しをしてもらいたいものがありますから。」と、お庄
はそんなにびくびくすることもないと思つたので、荷を持ち出す前にちよつと二人の前
へ出て断わつた。

「昼間風呂敷包みを持ち出すのもおかしゅうござんすから。」と、お庄はそうも言つ
て、胸をそわそわさせながら二人の傍をやつと離れた。

ここの女たちは、いつお袋や爺さんの機嫌が直つて、芳太郎が家へ入るようになるか
解らなかつた。これまでちよいちよい人に貸したりなどしている部屋を、この夫婦のた

めに長く塞^{ふさ}げておくのも惜しかった。細君が主^{あるじ}の好奇^{ものずき}を喜ばない気振りが、お庄には見えすくように思えて来た。お庄ら夫婦がこの家へ住み込むようになってから、もう一ト月と十日余りになっていた。

俵^{かじぼう}の柁^{ぼう}棒^{ぼう}が持ち上げられた時、お庄はようやくほつとしたような目つきになった。

従^{いとこ}姉^{ねえ}の家へ着くまで、お庄は後から追い駆けられるような気がしていたが、着いてからも気が気でなかった。

包みはすぐ奥の押入れへ隠されたが、お庄は下駄や傘までも気にして、裏の方へ廻した。

「芳がきつと来ますよ。」と、お庄は落ち着いて坐つてもいられなかった。

「今ごろは押入れでも開けて見て、びっくりしているかも知れませんよ。」

時計を見ると、芳太郎がいつも帰つて来る時分までには、たつぷり一時間の余裕があった。

八十六

その晩のうちに、お庄は雨のなかを湯島まで逃げて来た。

目立^{くろがすり}たぬ^{ひとえ}黒^{ひとえ}緋^{ひとえ}の単衣^{ひとえ}のうえに、小柄な浅山のインバネスなどを着込んで、半

分^{つぼ}窄^{つぼ}めた男持ちの蝙蝠^{こうもりがさ}傘^{はしよ}に顔を隠し、裾^{はしよ}を端折^{はしよ}つて出て行くお庄のとぼけた

姿^{あね}を見て、従^{あね}姉^{あね}は腹^{あね}を抱^{あね}えて笑^{あね}つた。

「かまうもんですかよ。彼^{あいつ}奴^{あいつ}にさえ見^{あいつ}つからなけアいいんだ。」と、お庄は用心深く

暗^{あたり}い^{あたり}四^{あたり}下^{あたり}を見廻^{あたり}しながら出^{あたり}て行^{あたり}つた。

寂しい士官学校前から、広い濠端^{ほりばた}へ出たころには、強い風さえ吹き添って来た。

お庄は両手で傘^{つか}に掴まりながら、すたすたと走るようにして歩いた。俵があつたら乗

ろうと思つたが、提灯^{ちようちん}の影らしいものすら見当らなかつた。見附^{みつけ}の方には、

うすあおステーションの明りが見えていたが、そんなところへ迂闊^{うかつ}に入り

込んで行くことも出来なかつた。

そこからは道^{ひとすじ}が一条であつた。神楽坂^{かぐらざか}の下まで来ると、世界がにわかにも明るくなつた。人の影もちらほら見えていた。ぐつしより雨に濡れたお庄は、灯影を避ける

ようにして、揚場^{あげば}の方へ歩いて行つた。

湯島の家へ着いたのは、もう九時ごろであつた。元町の水道の傍^{わき}を通るとき、すれすれに行き違つた背の低い男が一人あつた。お庄は傘の下から、ふつと顔を出すと人家の薄明りに、ちらと見えた白いその男の顔が、芳太郎であることに気がついた。お庄は

息^{つま}が塞^{どて}るような心持で、急いで堤^{どて}について左の方へ道を折れた。店屋の立て込んだ狭い町まで来た時、お庄は冷や汗で体中びつしよりしていた。

湯島の家では、みんな^{みんな}が入口まで出て来て、ちが^{ちが}つたお庄の姿や、真蒼^{まつさお}なその顔を眺めた。お庄は上り口でインバネスを脱ぐと、がっかりした体^はを這うようにして流しの方へ出て行つた。

「芳が今ここへ俵で駆けつけ尋ねて来たぞえ。」伯母はお庄の顔を見るなり、言い出した。

「やっぱりそうでしょう。」と、お庄は呼吸^{いき}がはずんで、口が利けなかつた。

その晩は早くから戸を締めた。

母親が、二、三日前から^{よそ}余所へ手伝いに行っていることが、伯母の話で解った。その

家が、近所の^{しりびと}知人の^{しりびと}また知人の書生の新世帯であることも話された。

「正雄が店でも持つまで、人中へ出て苦勞してみるもよからうず。」伯母はこうも言った。

あしたひるから^{としより}翌日午後、四ツ谷の家から、老人が着替えを二、三枚届けてくれてから、お庄は独りで世帯を切り廻したことの無い母親の身の上も気にかかったし、この先自分の体の振り方も会って相談して見たいと思った。後から暗い影の^{まと}付き絡っているような東京を離れて、独りで遠くへ出るにしても、母親の体の落着きを見届けておかなければならぬとも思った。

お庄はジミな^{くろじゆす}緋に、黒^{くろじゆす}縹子の帯などを締めて、母親を世話した近所の家まで訪ねて行った。

その家は氷屋であつた。^{あるじ}主はお庄たちと同じ村から出た男で、^{かぶとちよう}兜町の方へ出ていた。お庄の父親とも知らない顔でもなかつた。

母親のいる家は、伝通院のすぐ下の方の新開町であつた。場末の広い淋しいその通りには、家がまだ少かつた。出来たてのペンキ塗りの湯屋の棟が遠くに見えたり、壁にビラの張られてある床屋があつたりした。

四、五軒並んだ新建ちのうちの 하나가、それであつた。まだ木の香のするようなその建物について、裏へ廻ると、じきに石炭殻を敷き詰めたその家の勝手口へ出た。

新壁の隅に据えた、^{がさつ}粗雑な長火鉢の傍にぼつねんと坐り込んでいる母親の姿が、明け放したその勝手口からすぐ見られた。台所にはまだ世帯道具らしいものもなかつ

た。裏は^{がけした}崖下の広い空地で、厚く^{しげ}繁つた^{ささ}笹や夏草の上を、真昼の風がざわざわと吹き渡つた。

お庄は母親の隠れ家へでも落ち着いたような気がして、狭い茶の室^まへ入り込んで日の暮れまで話し込んでいた。

底本：「日本の文学 9 徳田秋声（一）」中央公論社

1967（昭和 42）年 9 月 5 日初版発行

1971（昭和 46）年 3 月 30 日第 5 刷

入力：田古嶋香利

校正：久保あきら

2003 年 2 月 27 日作成

2007 年 7 月 22 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）](http://www.aozora.gr.jp/)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。